

インドネシア 言語と文化

Bahasa dan Budaya:

Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang

＜第 31 号＞

インドネシア 言語と文化

Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang

第 31 号 (2025 年)

目次

Daftar Isi

コーパス分析に基づく ke-an 非名詞派生語の用法に関する考察

Tinjauan tentang Pemakaian Kata Turunan Non-nominal dengan Konfiks ke-an Berdasarkan Analisis Korpus

降幡正志、原真由子、森山幹弘

(FURIHATA Masashi, HARA Mayuko, and MORIYAMA Mikihiro) 1

TRACES OF SUFFERING ALONG THE WAY IN TAN TENG KIE'S "SYA'IR DJALANAN KERETA API"(1890)

タン・テン・キエの『SYA'IR DJALANAN KERETA API』(1890)に描かれた道に沿った苦難の軌跡

Cahyaningrum Dewojati (チャハヤニンルム・デウオジャティ) 16

Kalimat Langsung sebagai Pembangun Teks Narasi dalam Kelas Kemahiran Menulis Bahasa Indonesia Universitas Osaka

大阪大学インドネシア語専攻のナラティブ作文教育における直接話法

Cynthia Vientiani (シンティア・フィエンティアニ) 27

The Role of Indonesian Women Writers as Propaganda Agents During the Japanese Occupation in Indonesia

日本占領下のインドネシアにおけるプロパガンダ活動家としてのインドネシア女性作家の役割

Alifia Masitha Dewi (アリフィア・マシタ・デウィ) 35

Kata Berfrekuensi Tinggi Dalam Korpus Pemelajar Bahasa Indonesia Beranotasi Error

エラータグ付きインドネシア語学習者コーパスにおける高頻度語

David Moeljadi (ダヴィド・ムルヤディ) 44

インドネシアにおけるカルティニ批判の原因の考察

An Analysis of the Causes of Criticism Against Kartini in Indonesia

ミヤ・ドゥイ・ロスティカ (Mya Dwi Rostika) 53

原オーストロネシア語のシュワーとスラウェシの諸語群における反映

Pepet Protobahasa Austronesia dan Perwujudannya dalam Kelompok Bahasa di Sulawesi

山口真佐夫 (YAMAGUCHI Masao) 69

ジョグジャカルタの言語風景：ジャワ語とジャワ文字について

Linguistic landscapes of Jogjakarta and its vicinity: Javanese language and Javanese letters, Bahasa Indonesia, and English

三宅良美 (MIYAKE Yoshimi) 90

補文標識 *untuk* に導かれる補文について

Klausa pemerlengkapan yang didahului oleh pemerlengkap “*untuk*”

安田和彦 (YASUDA Kazuhiko) 102

日本インドネシア学会会則

116

編集後記

118

コーパス分析に基づく *ke-an* 非名詞派生語の用法に関する考察¹ Tinjauan tentang Pemakaian Kata Turunan Non-nominal dengan Konfiks *ke-an* Berdasarkan Analisis Korpus

降幡正志（東京外国語大学）、
原真由子（大阪大学）、
森山幹弘（南山大学）

**FURIHATA Masashi (Tokyo University of Foreign Studies),
HARA Mayuko (The University of Osaka),
MORIYAMA Mikihiro (Nanzan University)**

Abstrak

Konfiks *ke-an* memiliki dua jenis pembentukan kata, yaitu pembentukan kata nominal dan non-nominal. Dalam makalah ini, fokus akan diberikan pada pembentukan kata non-nominal, khususnya penurunan dengan *ke-an* yang merupakan makna pasif akibat kerugian atau penderitaan. Kata turunan non-nominal dengan *ke-an* tersebut pada dasarnya menjelaskan bagaimana subjek yang bersangkutan mengalami kerugian atau penderitaan, seperti kerugian akibat cuaca atau bencana (misalnya kata *kepanasan*, *kebanjiran*) atau gangguan oleh orang lain (misalnya kata *kemasukan*). Namun dalam kenyataannya, kata-kata seperti itu tidak digunakan secara seragam. Makalah ini akan membahas frekuensi penggunaan kata turunan non-nominal dengan *ke-an*, makna yang disampaikan, serta struktur kalimat yang sering digunakan. Juga akan dianalisis kata-kata yang sering dipakai bersama dengan subjek atau pelengkap dalam kalimat-kalimat, dengan menggunakan korpus dari media surat kabar. Selain itu, pembahasan juga akan meliputi kata turunan dengan *ke-an* yang memiliki penggunaan baik sebagai nomina maupun non-nomina, serta perbedaan dalam penggunaannya.

1. はじめに

インドネシア語の共接辞 *ke-an* は、名詞派生語を作る機能と名詞以外の派生語を作る機能を持つ。名詞以外の *ke-an* 派生語には、いわゆる「被害受身」を表すとされる一群の語があり、名詞派生語ほど生産的ではないもののインドネシア語の文法において重要な項目のひとつである。例えば、天候や災害による被害（*kepanasan* 「暑さに苦しむ」、*kebanjiran* 「洪水に見舞われる」）あるいは他者による被害（*kemasukan* 「入り込まれる」）など、対応する主語が損害や被害を受ける、といったものである。その他にも、可能あるいは自発を表すとされる *kelihatan* （「見える」）や *kedengaran* （「聞こえる」）があり、また「～過ぎる」という意味を持つ語（*kekecilan*

¹ 本論文は 2024 年 11 月 23 日に立命館アジア太平洋大学で開催された第 55 回日本インドネシア学会研究大会において行った発表「コーパス分析に基づく *ke-an* 非名詞派生語の用法に関する考察」を基にまとめたものである。本研究は科学研究費助成事業（基盤研究 C）「日本のインドネシア語教育における上級教材の研究とインドネシア語活用辞典の開発」（2021～2025 年）の助成を受けて実施している。このプロジェクトの成果として、これまでに降幡・原・森山. (2022) および原・降幡・森山幹弘. (2024) を発表している。森山については、上記科学研究費と併せて、2025 年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 による研究助成を受けて研究を実施した。

「小さすぎる」など)や「～的である、～っぽい」という意味を表す語 (kemerah-merahan「赤色がかっている」、kekanak-kanakan「子供っぽい」など)もある。本稿ではこれらのうち、いわゆる「被害受身」の ke-an 派生語のみに焦点を当てて論じる²。

ke-an 非名詞派生語は一般に、対応する主語が「被害(迷惑)や影響を受ける」ことを述べるとされる。確かに大部分の語が被害(迷惑)といったネガティブな意味を表すが、実際にはポジティブあるいは非ネガティブな意味を表す ke-an 非名詞派生語も存在する。これまでネガティブな意味の用法ばかりが注目され、ポジティブあるいは非ネガティブな意味の用法については軽視される傾向が強かった。

一方、ke-an 派生語には同じ語幹から名詞と非名詞の両方の用法を持つ語も存在するが、両用法を示すことに対する言及もこれまで十分であるとは言えない。語形としては同じだが、名詞と非名詞との間には何らかのつながりがある(連続性を持つ)かどうかという点について検討する余地がある。

そのような問題意識から、本稿では日刊紙 KOMPAS の記事をコーパスとして用い、ke-an 非名詞派生語の使用の実態について、頻度(出現数)や文構造、意味などの面から分析を行う。とりわけ、どのような ke-an 非名詞派生語がどの程度現れるのか、主語や補語として共起する構成要素はどのようなもので、どのような文構造をとるのか、名詞としての用法もある語の場合、名詞と非名詞との間にどのような関係が見られるのか、といった観点から実例を検討していく。

2. 参照文法における ke-an 非名詞派生語の言及

初めに、Sneddon et al. (2010: 124-129)、Moeliono et al. (2017: 164-168)、森山・原・降幡(2017)において ke-an 非名詞派生語がどのような説明がなされているか概観する。

2.1. ke-an 派生語および語幹の品詞

ke-an 派生語の品詞の観点からは、Sneddon et al. (2010)、Moeliono et al. (2017) は「名詞」「動詞」「形容詞」の各章の下でそれぞれ対応する ke-an 派生語を取り上げている。本稿の意図する ke-an 非名詞派生語すなわち「被害・影響を受ける」ことを述べる ke-an 派生語は「動詞」の章におかれている。なお、Sneddon et al. (2010: 53-55) は「形容詞」の章で「～過ぎる」(例: kekecilan)、「～的である」(例: kemerah-merahan、kebarat-baratan)を、Moeliono et al. (2017: 233) は語幹の重複を伴う「～的である」(例: kekanak-kanakan)を挙げている³。

一方、森山・原・降幡(2017)は、「共接辞 ke-an」をひとつの章とし、その中で名詞と非名詞の両方を説明している。非名詞として、『『予期しない状況に見舞われる』(本稿で対象とする ke-an 非名詞派生語)、「可能・自発」(例: kelihatan)、『『～的』(例: kemerah-merahan)、「過剰」(例: kebesaran)と分類している。

名詞と非名詞の両方の用法を持つ ke-an 派生語については、森山・原・降幡(2017)はひとつ

² 議論の対象とするいわゆる被害受身を表す ke-an 派生語を、本稿では便宜上「ke-an 非名詞派生語」と呼ぶことにする。

³ Moeliono et al. (2017: 210) では「～過ぎる」を表す ke-an 派生語は「過剰の度合い」の節で取り上げている。

の節として取り上げているのに対し、Moeliono et al. (2017) には言及がない。Sneddon et al. (2010: 125, 126-127) は、一部の語 (kematian、ketakutan など) に対して「同じ語幹から派生した名詞と区別しなければならない」といった言及にとどまっている。

語幹の品詞については、Sneddon et al. (2010) および Moeliono et al. (2017) は名詞・形容詞・自動詞・他動詞などに基づいた分類が見られる。森山・原・降幡(2017) は語幹の品詞に関する言及はほとんどない。

2.2. ke-an 非名詞派生語の統語的機能と共起する構成要素

文法構造あるいは統語的な観点からは、ke-an 非名詞派生語は典型的に述語として用いられる。Sneddon et al. (2010)、Moeliono et al. (2017) がいずれも ke-an 非名詞派生語を動詞の章に分類しているが、このことは動詞が述語として機能することを前提としていると考えられる。森山・原・降幡(2017) は「主語が、語幹が表す動作・行為、状態、事象に予期せず見舞われる」と述べており、主語に対応する述語として機能するという考え方に立っている。

共起する構成要素については、述語に対応する主語があり、このことが前提となっていることは3文献とも共通している。語によっては ke-an 非名詞派生語に補語が後続するという点も共通して述べられているが、ほとんどすべて補語が名詞であるという認識である。ただし Sneddon et al. (2010: 128) は kedapatan と ketahuan が動詞の補語を認めると補足している。なお、Moeliono et al. (2017: 164-165) は主語や補語という統語的枠組みではなく、「1名詞のみの共起」「2名詞が必須項として共起」「2名詞が共起し2番目の名詞は恣意的」と説明している。

2.3. ke-an 非名詞派生語の意味

Sneddon et al. (2010: 124) は、ke-an 非名詞派生語の持つ意味について若干の例外を除いて「反意的 (adversative)」であるとし、「主語が不愉快なあるいは予期しない経験や出来事を受ける」と述べている。Moeliono et al. (2017: 166) も同様に「反意的 (adversatif)」とし、さらに「不愉快なあるいは不利な状態を描写する」と付け加えている。

一方、森山・原・降幡(2017) は既述のとおり「主語が、語幹が表す動作・行為、状態、事象に予期せず見舞われる」という意味の語を作ると説明し、さらに、ほとんどが被害・迷惑を被るという否定的な意味であるが肯定的な意味の例も若干あることを示している。

2.4. 小括

ke-an 非名詞派生語は典型的に述語として用いられ、また意味についても対応する主語が「反意的」などネガティブな影響を受けることを表す点が3文献に共通している。ただし森山・原・降幡(2017) は若干ながら主語が肯定的な影響を受けることを表すと語例を挙げて説明している。Sneddon et al. (2010) の言う「若干の例外」が肯定的な影響を意味するのか、あるいは別の意図があるのかは定かではない。

ke-an 非名詞派生語が補語を取るか取らないかは、Moeliono et al. (2017) がその観点に基づいた記述をしているのに対し、Sneddon et al. (2010) と森山・原・降幡(2017) は語例や文例で示しているに過ぎない。Sneddon et al. (2010) が若干の語について動詞が補語として用いられることを述べているが、基本的に3文献とも補語を取る場合には名詞が補語となるという認識である。

3. 分析の方法と分析対象の抽出

本研究ではコーパスとして KOMPAS 紙（ウェブ版）2004 年 1 月～12 月の記事をテキストファイル化したものを用いた。記事数は 33,361 件である。

分析にはコンコーダンスソフト AntConc（バージョン 3.5.8）を使用した⁴。AntConc に表示された上述のコーパスの総語数は 18,212,252 語、異なり語数は 222,807 語であった。Wordlist 機能を用いて作成した語彙リストから ke-an 非名詞派生語を抽出し、まずは第 2 節で言及した 3 文献に出現する語例と照合した。その結果、3 文献のいずれかに提示された ke-an 非名詞派生語の語例でコーパスに現れたものは 36 語であった⁵。表 1 は、その 36 語をコーパス内での出現頻度の高い順から並べたものである。なお、参考までに 3 文献のうち当該の語を語例として用いた文献数も記載しておく。

表 1 コーパスに出現した ke-an 非名詞派生語とその出現数

番号	ke-an 派生語	出現数	文献数	番号	ke-an 派生語	出現数	文献数
1	kehilangan	3,131	3	19	keseريان	107	3
2	kekurangan	2,364	3	20	kedapatan	101	2
3	kebakaran	2,119	2	21	kecanduan	72	2
4	kematian	1,996	3	22	kemasukan	70	3
5	kelebihan	1,329	1	23	kepanasan	52	3
6	keberatan	1,120	1	24	kedinginan	40	3
7	kedatangan	1,061	3	25	kehausan	30	2
8	ketakutan	752	3	26	kegirangan	30	1
9	ketinggalan	707	3	27	kecopetan	22	3
10	keracunan	322	3	28	ketiduran	20	1
11	kelaparan	276	3	29	keguguran	18	2
12	kehabisan	261	3	30	ketularan	14	2
13	kebagian	244	1	31	kesiangan	13	2
14	ketahuan	237	3	32	kehujanan	11	3
15	kebanjiran	160	3	33	kecurian	9	2
16	kejatuhan	144	2	34	kemalingan	9	2
17	kegelapan	127	1	35	kemalaman	2	2
18	kesakitan	124	3	36	ketumpahan	1	2

表 1 の「出現数」は、この時点では名詞的な用法と非名詞的な用法の区別がなされていない。AntConc の Concordance 機能を用いて各語を含む文を抽出し、名詞的な用法か非名詞的な用法か

⁴ AntConc については、<https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/>を参照（最終閲覧：2025 年 3 月 9 日）。

⁵ この他に 2 文献が kebongkaran を、1 文献が ketumbuhan を語例として挙げているが、コーパス内には現れなかった。

を判断しながら、出現頻度も考慮しつつどの語を用例として取り上げるかの検討を行った。

4. 用例の検討と考察

本節では、上述の手順に従って得られて検討した用例のうち、構造的あるいは機能的な側面を確認しつつ、これまではあまり述べられてこなかった特徴的な用法についていくつか取り上げる。

4.1. ネガティブな影響を表す ke-an 非名詞派生語

すでに述べてきたように、ke-an 非名詞派生語は主語で述べたものがネガティブな影響を受けることを示すという説明が従来なされてきた。確かにそのような用法は多いので、本項でいくつかの語を取り上げ用例を確認する。

4.1.1. kehilangan

kehilangan は名詞（「喪失」）と非名詞（「失われる」）の両方の用法があるが、コーパス内ではそれらを合わせた出現数および非名詞の出現数が最も多かった。全出現数 3,131 のうち非名詞の用例が 2,650、名詞の用例が 328 であった。一方で、非名詞か名詞かの判断が困難な用例も 153 見られた。判断が困難な理由は主に 接続詞 karena などの節内に現れたり、特定の名詞の修飾語として用いられていることによる。

(1) は主語 (umat Islam 「イスラム教徒」) に対する述語として用いられており、補語はなく、前置詞句 (atas kepergian imam besar ini 「この偉大な導師の死去に」) による意味の補足を伴っている。
(2) は khawatir 「心配する」(ただし文中では tak khawatir 「心配していない」) に対する補語として用いられ、kehilangan 自体は補語 (peluang 「機会」) を伴っている。他の用例も検討すると、対応する主語は《人》《組織》《国・地域》が多く、また補語を伴う場合は主語がその補語の《所有者》・《(家族などの) 関係者》であるという傾向が強い。

(1) Umat Islam sangat **kehilangan** atas kepergian imam besar ini.⁶ [30 Maret 2004]

「イスラム教徒はこの偉大な導師の死去に大いに喪失感を抱いている。」

(2) Kendati demikian, dia tak khawatir **kehilangan peluang bekerja** sebagai penangkap ikan tuna di perairan Hawaii. [12 April 2004]

「それでも、彼はハワイ海域でマグロ漁師として働く機会を失ってしまう心配をしていない。」

(3) と (4) はいずれも名詞に対する修飾語となっている。(3) は「紛失 (の証明)」のように名詞であると考えられるが、(4) は sedih 「悲しい」と並列しており、ここでの kehilangan は非名詞であると考えべきである。

(3) (...), polisi membuat surat keterangan **kehilangan** untuk mengurus dokumen pribadi yang ada di dalam tas, (...) [21 November 2004]

「警察は鞆の中にあつた個人文書进行处理するために紛失証明書を作成した (……)」

⁶ 太字 (当該の ke-an 非名詞派生語) および下線 (主語や補語など直接関わる構成要素) は筆者による (以下同様)。

(4) Pekatnya perasaan sedih dan **kehilangan** juga memenuhi rumah keluarga Rudyono (19), (...)

[29 Mei 2004]

「悲しく、喪失してしまったという思いの深さがまたルディオノ（19 歳）の家族の家に満ちていた（……）」

(5) は **karena** に導かれる節に現れている。ここでの **kehilangan** は「(生徒を) 失うこと (により)」のように名詞と考えるか、「(生徒を) 失ってしまった (ために)」のように非名詞と考えるか、判断が難しい。

(5) Dua tahun lalu SMP Kanisius di Playen, Gunungkidul, ditutup karena **kehilangan** murid.

[17 Maret 2004]

「2 年前に、生徒がいなくなってしまったためにグヌンキドゥルのプライエンにあったカニシウス中学校が閉鎖された。」

4.1.2. **ketinggalan**

ketinggalan は「(～に) 取り残される、後れをとる」という非名詞の用法が一般的であると考えられてきたが、コーパス内での全出現数 707 件のうち、非名詞の用例 508 件に対し、主語や他動詞の目的語など統語的に名詞としてふるまう用例が 185 件見られた。

(6) では述語として用いられ、名詞 (*ilmu* 「学問」) を補語としている。(7) でも述語として用いられているが、補語として動詞 (*memanfaatkan* 「利用する」) を伴っている。また(8) のように補語を伴わない用例も見られる。

(6) Pengalaman menunjukkan bahwa dokter juga dapat **ketinggalan** ilmu, seperti ketika AIDS menjalar ke Indonesia. [28 Agustus 2004]

「エイズがインドネシアに蔓延した時のように、医師も学問から取り残されうることを経験が示している。」

(7) Ia tidak mau **ketinggalan** memanfaatkan momentum Euro 2004. [25 Juni 2004]

「彼は Euro 2004 の機会を利用することに後れを取りたくなかった。」

(8) Teknologi nutrisi kita **ketinggalan** hingga satu dekade lebih. [30 Juli 2004]

「我々の栄養技術は 10 年以上に至るまで後れを取っている。」

ketinggalan に対応する主語は、補語を伴う場合は **kehilangan** と同様に《人》《組織》《国・地域》であることが多かったが、(8) のようにそれら以外の物事が主語として対応することもあった。また補語が名詞の場合、主語と補語の意味的な関係は **kehilangan** のようにある程度明確であるとは言えず、現段階ではなんらかの関係性が見られるという段階に留めておくべきであろう。

すでに述べたように **ketinggalan** が統語的に名詞として現れる例も少なからずコーパス内に見られた。(9) は主語、(10) は他動詞 (*mengejar* 「追いかける」) の目的語として用いられている例である。「後れ (をとること)」といった意味で用いられている。

(9) **Ketinggalan** terlihat dari ketersediaan prasarana dan infrastruktur pembangunan. [28 Juni 2004]

「開発の設備やインフラの準備状況から、遅れが見られる。」

- (10) Sebab, selama sejarah NBA, belum pernah ada satu tim pun yang mampu mengejar ketinggalan sejak tertinggal 1-3 dari lawannya. [16 Juni 2004]

「なぜなら、NBA の歴史の中で、対戦相手に 1 勝 3 敗と取り残されてからその遅れを取り戻すことのできたチームは 1 つもない。」

共接辞 **ke-an** が名詞を形成する機能もあることから、非名詞の場合の意味と連続性を持ちつつ名詞として用いているのではないかと推測される。

4.1.3. keberatan

keberatan は、コーパス内での総出現数 1,120 件のうち非名詞（「異存がある」）の用例が 481 件、名詞（「異存、異議」）の用例が 586 件であった。名詞としての用法が多いにも関わらず、名詞・非名詞両方の用法があることを指摘しているのは、3 文献のうち森山・原・降幡(2017) のみであった。

(11)～(14) は、いずれも述語として用いられている。(11) は補語を伴わず、**atas** に導かれる前置詞句が内容を補足している。(12) は名詞（**penerapan**「適用、導入」）が補語として後続している。

- (11) Pada prinsipnya, gubernur tidak **keberatan** atas pemeriksaan terhadap yang bersangkutan (Bupati Pandeglang) sejauh ada bukti-bukti. [02 Oktober 2004]

「原則的には、証拠がある限り、知事は関係者（パンデグララン県知事）の調査に異議を唱えない。」

- (12) Pihak perusahaan jasa TKI (PJTKI) maupun balai latihan kerja (BLK) tidak **keberatan** penerapan sistem online. [11 Desember 2004]

「インドネシア人労働者サービス会社（PJTKI）と職業訓練センター（BLK）は、オンラインシステムの導入に異存はない。」

(12) を含め名詞を補語として伴う用例では、主語と補語の意味的な関係は **kehilangan** や **ketinggalan** ほど明確ではない。強いて言うと、**keberatan** の補語（名詞）は主語に何らかの関係があるものという説明しかできないようである。

(13) と (14) は名詞以外の補語を伴う例である。(13) は動詞句が、(14) は節が **keberatan** の補語となっている。

- (13) Mereka (Dishub) **keberatan** memberikan diskon karena saat ini sudah tidak krisis moneter lagi.

[28 Februari 2004]

「彼ら（交通局）は、現在はもはや通貨危機ではないので、割引を行うことに異論がある。」

- (14) Pedagang tidak **keberatan** pasar ini dibuat lebih bagus asal pedagang kecil tetap diperhatikan.

[19 November 2004]

「商人は、小規模事業者に関心を払う限りにおいて市場をよりよくすることに異議はない。」

(15) は名詞としての **keberatan** の用例である。

(15) Hakim sempat menanyakan apakah ada saksi yang mencatat **keberatan** tentang hasil penghitungan suara. [15 September 2004]

「開票結果に関する異議を記録した証人がいるかと、裁判官は尋ねる場面もあった。」

keberatan にも名詞・非名詞の両方の用法があり、**ketinggalan** の説明としても述べたが両用法に意味的な連続性が保たれていると考えられる。

4.1.4. **kecopetan**

kecopetan 「スリに遭う」は **kecurian** 「盗まれてしまう」と共に 3 文献のすべてで取り上げられている。語幹が他動詞であること、補語を伴う場合も伴わない場合もあるという説明が、いずれの文献にも共通している。(16) は補語 (HP「携帯電話」) を伴う **kecopetan** の用例、(17) は補語を伴わない例である。

(16) Tanggal 8 Januari 2004, saya **kecopetan** HP di atas bus PPD jurusan Blok M - Kota (...) [12 Mei 2004]
「2004 年 1 月 8 日、私はブロック Mーコタ間の PPD バスで携帯電話を掏られた。」

(17) (...), bagaimana mungkin capres dan tim suksesnya yang dikawal anggota keamanan negara bisa **kecopetan**. [15 Juli 2004]

「国家の保安員の警備を受けている大統領候補やその陣営がスリに遭うことなどあり得るのか。」

いずれの文献にも取り上げられる、いわば **ke-an** 非名詞派生語の典型例のひとつと言えるが、コーパス内での出現数はかなり少なく、非名詞としての **kecopetan** の用例は 17 件、**kecurian** は 8 件であった。*Kamus Besar Bahasa Indonesia* 第 6 版 (Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa 2016) では、両語とも口語的であると記されており⁷、発言の引用だけではなく地の文にも出現するものの、口語的であることが使用の少なさにつながっているのかもしれない。

4.1.5. **kesulitan**

kesulitan は森山・原・降幡(2017)が名詞(「難しさ」)で取り扱っているのみで 3 文献のいずれも非名詞として取り上げておらず、表 1 にも掲載されていないが、実際には総出現数 2,852 件のうち非名詞(「困難に見舞われる」)の用法が 1,105 件も見られた。そのため、第 3 節で述べた抽出方法とは異なるが、ここで触れておく。

(18)~(20) のいずれも **kesulitan** は述語として用いられている。(16) では補語を伴っていないが **karena** に導かれる節で内容を補足している。(17) では他動詞句 (**mencari murid**「生徒を探す」) を、(20) では名詞句 (**air bersih**「きれいな水」) を補語として続けている。

(18) Petugas yang membantu jalannya evakuasi **kesulitan** karena situasi sangat gelap. [01 Desember 2004]
「辺りの様子が非常に暗かったので、救出の動きを手伝う担当者は困難に見舞われた。」

⁷ 最終閲覧：2025 年 3 月 9 日。

(19) Saat ini, dia kesulitan mencari murid untuk diajari membuat wayang. [10 Juni 2004]

「現在、彼はワヤン製作を教える弟子を探すのに苦労している。」

(20) Lebih dari 10 tahun kami kesulitan air bersih di sini. [25 Oktober 2004]

「10 年以上も我々はこの地できれいな水に困っている。」

4.1.6. kebakaran

kebakaran は、総出現数 2,119 件のほとんどが名詞（「火事、火災」）であったが、一方で非名詞（「燃えてしまう、火事に遭う」）の用法が 28 件見られた。Sneddon et al. (2010)と森山・原・降幡 (2017)は影響を受ける《人》ではなくその人物が所有する《物》が主語として対応すると説明している。(21)の主語(Pasar Tanah Abang「タナアバン市場」)は確かに《人》ではないが、ある人物の《所有物》というとらえ方ができるかどうかは、再検討する余地がある。

(21) Saat Pasar Tanah Abang kebakaran, memang banyak barang saya yang tidak terbayar.

[12 Agustus 2004]

「タナアバン市場が火事に遭った時、私の商品の多くは代金が支払われなかった。」

一方で、(22)のように、火事に遭って影響を受けた《人》(penduduk「住民」)が主語として対応する用例も見られた。

(22) Itu karena di perkampungan penduduk acapkali kebakaran, (...) [03 April 2004]

「そのことは、集落ではたびたび火事に遭っていることによる(……)」

「～～《人》は……《物》が燃えてしまった」という例は(23)のような kebakaran jenggot「慌てふためく」という慣用句が数件見られただけで、それ以外にはコーパス内には現れなかった。

(23) Pemerintah Ibu Kota juga kebakaran jenggot karena usulan retribusi yang diajukan oleh Bekasi.

[10 Januari 2004]

「首都政府はまた、ブカシの提示した補償の提案のおかげで慌てふためいた。」

4.1.7. ketahuan

ketahuan は、これまでに扱った語とは統語的に異なるふるまいを見せる。コーパス内での総出現数 237 のすべてが非名詞（「知られてしまう」）であると判断でき、かつ対応する主語が《人》《組織》《国・地域》とは一概に言えない。

まず(24)は《人》(mereka「彼ら」)が主語として対応している例である。

(24) Namun, selalu saja mereka gagal dan ketahuan petugas yang berjaga 24 jam. [05 April 2004]

「しかし、常に彼らは失敗し、24 時間体制で見張っている警備員に見つかってしまった。」

(25) では接続詞 agar に導かれる節内に現れているが、対応すると考えられる主語が《事柄》(tindakan korupsi「汚職の行為」)となっている。

(25) Tindakan korupsi dikemas secara rapi agar tidak gampang **ketahuan**. [22 September 2004]

「汚職行為は、簡単に知られてしまわないように丁寧に包み隠されていた。」

(26) では、《人》(perempuan「女性」)が主語、動詞 mengutil「万引きする」が補語という形式を取っているが、実際には「女性が万引きした」という事柄が「知られてしまった」と考えられる。一方 (27) は、「我々が政治に参加した」(kita berpartisipasi dalam politik) ことが「わかる」というように、後続する節が **ketahuan** の主語であると考えられる。

(26) Perempuan berusia 39 tahun ini **ketahuan mengutil** di sebuah toko. [12 September 2004]

「39歳のこの女性は、店で万引きしているのを見つかってしまった。」

(27) Dengan kita mencoblos, **ketahuan** dengan jelas kita berpartisipasi dalam politik. [02 April 2004]

「投票することで、我々は政治に参加していることがはっきりとわかる。」

(27) も含め、**ketahuan** は「知られてしまう、ばれてしまう」の他に「(～であることが) わかる、認識できる」という意味を表すこともある。(28) と (29) がその例である。なお、(29) は -nya による名詞化が起きている。

(28) Yang datang **ketahuan** turis bukan hanya dari bahasa Perancis dan Jerman, (...) [24 Juli 2004]

「来た人が旅行者だとわかるのは、フランス語やドイツ語からだけではない (……)」

(29) Ada gangguan di pita suara saya, dan **ketahuannya** menjelang saya show. [08 Oktober 2004]

「私の声帯に異常があり、それがわかったのはショーを目前にしていたときだった。」

先述のとおり、Sneddon et al. (2010:128) が「kedapatan と **ketahuan** が動詞の補語を認める」と言及しているが、それだけでなく節が主語として対応することもあり、対応する構成要素にさらなる注意が必要である⁸。

4.1.8. kematian

kematian は3文献ともに「……に死なれる」という補語を伴う、いわば典型的な例として挙げていた。ところが、コーパスで総出現数 1,996 件のほとんどが名詞(「死」)として用例であった。

「……に死なれる」という表現はむしろ、(30) のように ditinggal mati が多用されると言われている。

(30) Pasalnya, sewaktu masih bocah, ia ditinggal mati ayahnya yang direnggut sifilis. [01 September 2004]

「というのも、まだ子どもの頃に、彼は梅毒に命を奪われた父親と死別してしまった。」

1 件だけ、(31) のような非名詞の用例があったが、その意味は「～～が死んでしまう」という

⁸ 本稿では **kedapatan**「見つかる」は取り上げないが、コーパス内で **ketahuan** と同様のふるまいを見せることを確認している。

用いられ方であった。

(31) Tetapi jika dia melawan maka risikonya kalau tidak **kematian**, ya, penjara! [25 Agustus 2004]

「しかし、もし彼が抵抗すれば、危険は死んでしまわないにしても、ああ、監獄だ！」

kematian は他者の死によって主語として対応する《人》が影響を受けるという説明が一般的であったが、(31) はそうではなく主語として対応する《人》自身が「死んでしまう」ことを表している。

4.2. 非ネガティブな影響を表す ke-an 非名詞派生語

本項では、非ネガティブな影響を表す ke-an 非名詞派生語について用例を検討する。基本的にポジティブな影響を表すと考えられる語として **kebagian** を、ネガティブかポジティブかをそれ自体が表すものではないと考えられる語として **kedatangan** の用例をまず確認する。加えて、一般的にはネガティブな意味を持つと考えられる語がポジティブな意味を表している用例についても言及する。

4.2.1. **kebagian**

kebagian は ke-an 非名詞派生語のうち非ネガティブな影響を表すいわば代表的な例といえよう。コーパス内での出現数は 244 件で、用法の判断が難しい 1 例を除きほぼ全てが非名詞（「分け前にあずかる」）の用法であった。(32) は補語（**kue moci** 「餅」）の「分け前にあずかる」ことを述べている。(33) は補語を伴わないが、話の流れから **warga** 「人々」が冒頭の **pinjaman** 「借入金」の「分け前にあずかる」という関係が成り立っている。

(32) Para pembeli biasanya memesan lewat telepon beberapa hari sebelumnya agar **kebagian** kue moci bermerek Double Happiness itu. [02 Desember 2004]

「購買者は普通、Double Happiness 製のモチが手に入るよう、数日前に電話で予約する。」

(33) Pinjaman itu dikembalikan secara angsuran, dan setelah lunas digulirkan kepada warga yang belum **kebagian**. [23 Desember 2004]

「その借入金は分割で返納され、完済したら、まだ割り当てを受けられていない人に回される。」

(32) と (33) はいずれもポジティブな意味で **kebagian** を用いているが、常にポジティブであるとは限らない。(34) における補語は **limbah** 「廃棄物」であり、これはネガティブな意味を表している。

(34) Kami juga tidak ingin Ogan Ilir hanya **kebagian** limbahnya saja. [25 Oktober 2004]

「私たちはまたオガン・イルルがただ廃棄物を割り当てられるだけになってほしくない。」

ke-an 非名詞派生語がネガティブ（あるいは非ネガティブ）な意味を表すかどうかは、語そのものがその意味で固定されているわけでは必ずしもなく、文脈や共起する語句にも大いに依存すると言えよう。

4.2.2. kedatangan

kedatangan は総出現数 1,061 件のほとんどが名詞（「来訪、到着」）であったが、非名詞としての用法について 3 文献すべてに挙げられており、コーパス内でも非名詞の用法が 43 件見られた。Sneddon et al. (2010: 127) と Moeliono et al. (2017: 169) では他動詞 *di-i* に対応するといった説明が見られ、さらに Sneddon et al. (2010: 124) は *didatangi* との比較で *kedatangan* について「反意的 (adversative)」と述べている。一方、森山・原・降幡(2017) は「～に来られる、思いがけず来訪があった」という訳語により非ネガティブな用法があることを表している。

実際に用例を見ると、ネガティブな意味での用法は少ない。(35) はネガティブか否かの意味を表さずただ単に「(若い医師の) 来訪を受けた」ことを表すと考えられる。(36) は *gembira* 「喜ぶ」の補語として *kedatangan* が用いられており、明らかにポジティブな意味を表している。

(35) Ketika aku mulai bisa bangkit dari tempat tidur, aku kedatangan seorang dokter muda yang sudah beberapa kali datang memeriksa kondisiku. [03 Februari 2004]

「寝床から起き上がることができはじめたとき、私は身体状態をすでに数度見に来ていた若い医師の訪問を受けた。」

(36) Apalagi ada ayah dan ibu, yang sudah pasti sangat gembira kedatangan cucu-cucu mereka dari kota yang jauh. [10 Oktober 2004]

「しかも父と母がいて、遠い町から彼らの孫たちが来てくれてとても喜ぶのは当然だ。」

4.2.3. その他

一般にネガティブな意味を表すと考えられる *ke-an* 非名詞派生語が、常にネガティブな意味で用いられるとは限らない。ここでは 3 つの例を挙げて説明する。

kebanjiran は補語を伴わない場合には「洪水に遭う」というネガティブな意味で用いられるが、(37) のように補語を伴うとむしろポジティブな意味で「～～が溢れんばかりにやってくる」という用法が多く見られる。

(37) Perlahan namun pasti, Ismail pun mulai kebanjiran pesanan. [21 Oktober 2004]

「ゆっくり、でも確実に、イスマイルは注文が殺到し始めた。」

kejatuhan は Moeliono et al. (2017: 166) では *kejatuhan batu bata* 「レンガが落ちてきてあたってしまふ」という例を挙げているが、コーパス内では (38) の *kejatuhan rezeki* 「予想外の収入を得る」のようにポジティブな例も見られる⁹。

(38) Bu Hadi, penjahit di sebuah kompleks perumahan di Pondok Bambu, mengaku tetap kejatuhan rezeki jahitan menjelang Lebaran ini. [10 November 2004]

「ポンドック・バンブウの集合住宅の仕立て職人であるハディさんは、ルバランが近くなり相

⁹ ネガティブな意味を持つものとして、*kejatuhan bom* 「爆弾が落ちてきてしまふ」、*kejatuhan komet* 「彗星が落ちてきてしまふ」という用例も見られた。

も変わらず予想外に収入を得られたと述べた。」

kemasukan は「入り込まれてしまう」といったネガティブな用法が多いが、「外国の投資が入ってくる」という用例がコーパス内に見られた (39)。文脈や補語として対応する語によって、非ネガティブな用いられ方もする例といえよう。

(39) Lian mengatakan, Indonesia dan Filipina tidak bisa berharap akan **kemasukan investasi asing** dalam waktu dekat. [07 Juli 2004]

「リアンの言うところでは、インドネシアとフィリピンは近いうちに外国の投資を受けられることが期待できない。」

4.3. 考察

ke-an 非名詞派生語は、典型的には統語的に述語として機能すると言って差し支えないであろう。ただし、(2)(25)(36) のように補語として用いられることもあるが、このことは **ke-an** 非名詞派生語以外にも当てはまることであり、特に違和感はない。

ke-an 派生語が名詞と非名詞の両方の用法を持つケースとして、**kehilangan**、**keberatan**、**kesulitan**、**kebakaran**、**kedatangan** の用例も検討した。いずれも意味の連関があると認められる。**ketinggalan** に関しては、一般に非名詞として用いられると考えられてきたが、主語 (9) や他動詞の目的語 (10) のように、統語的に名詞としてふるまう用法も少なからず見られた。共接辞 **ke-an** による派生語という同じ形態を持つことから、非名詞としての意味を保ちつつ、名詞として使われることもあると推測される。他の派生語についても詳細に検討する必要があるが、**ke-an** 派生語が非名詞と名詞の両方の用法を持つ場合、それらの間には意味的な連続性があると考えられよう。

共起する構成要素は主語と、語によっては補語を伴うが、**kedapatan** と **ketahuan** が動詞の補語を認めるという Sneddon et al. (2010: 128) の指摘があるものの、補語は名詞であるという認識が強かった。しかし、名詞以外の補語を取る **ke-an** 非名詞派生語も少なくない。本稿では、**ketinggalan** (7)、**keberatan** (13) (14)、**kesulitan** (19) の用例に見るように、動詞あるいは節なども語によっては補語となりうる例が少なからず見られた。また **ketahuan** については、(27) のように節が主語として対応する例も認められた。、このような、これまで十分に触れられていなかった例については、統語的にさらに検討する必要がある。

ke-an 非名詞派生語自体の意味的な面については、ネガティブな影響を主語が受けることを示すという説明がこれまで一般的であった。この点については、森山・原・降幡(2017) が「若干」としながらも肯定的（すなわちポジティブ）な例もあることを述べている。Sneddon et al. (2010: 124) は若干の例外があるとしているが、その例外がどのようなものであるかは明言していない。ポジティブな意味を表す語として、本稿では **kebagian** のみを扱ったが、他にもそのような語はいくつか存在する。また **kedatangan** はネガティブな意味を示すというよりは、なんらかの影響を主語が受け、その影響がネガティブかポジティブ（あるいはどちらでもない）かは文脈やその文の内容によると考えた方がよいと思われる。さらには、ネガティブな意味を表すとされる語であっても、(37)～(39) のように、文脈や文自体の内容によってポジティブな意味で用いられることもある。

補語を伴う場合、主語と補語とがどのような関係にあるのかも検討した。**kehilangan** のように

補語が主語の所有物（あるいは家族など関係者）である傾向が強いものもあれば、*ketinggalan* や *keberatan* のように補語（名詞）は主語と何らかの関係があるものという説明しかできないものもある。

ke-an 非名詞派生語に対応する主語は、多くが《人》や《組織》、《国・地域》であった。*kebakaran* などについて、Sneddon et al. (2010: 128-129) は「*ter-* 動詞に似ている」とし「主語は反意的に影響を受ける人ではなく、その人の所有する物」であると述べている。しかし、(21) のような文からは、必ずしもそうではなく主語そのものが火事による被害に遭うと考えることもできよう。

kematian に関しては、これまでの理解では補語を取り、その補語で述べる人物が死ぬことにより主語で述べる人物が（ネガティブな）影響を受ける、と考えられてきた。しかし、そのような用法では使われなくなっているとも言われており、今回のコーパス内においても1件も見られなかった。その一方で、(31) のように主語で述べる人物について死ぬということを表す用例が1件だけが見られた。ひとつ指摘できることは、*ke-an* 非名詞派生語の語幹に主語として対応するのは何かという点であるが、なぜこのような用法が見られたのか、この用法が珍しいものかどうか、さらなる検討が必要である。

5. まとめ

本稿では、いわゆる「被害受身」を表すとされる *ke-an* 非名詞派生語について、コーパスを用いて論じてきた。その大部分が「被害（迷惑）」を表すとはいえ、これまでに見てきたように、語によっては「被害（迷惑）」というネガティブな意味ではなく、非ネガティブな意味で用いられ、またネガティブな意味が一般的な語であっても文脈あるいは文の表す内容によっては非ネガティブの意味で用いられることもある。「被害受身」という表現にとらわれず非ネガティブな語あるいは用法もあることに注意すべきであろう。

名詞と非名詞の両用法を持つ *ke-an* 派生語については、語幹が同じであれば意味のつながりも当然あるはずだが、実例を通じて検討した結果として、非名詞の持つ「影響を受けることを表す」という意味的な面が名詞との間に連続性を持つことも示唆された。特に *ketinggalan* は一般に非名詞と考えられるが、その意味を保ちつつ名詞としても用いられることが、意味の連続性を考える上での好例であると思われる。

共起する構成要素についても、補語を伴う場合はほとんどが名詞であるという認識が強いが、実際には動詞の類や節など、語によっては補語が名詞とは限らないことも、実例の分析から明らかになった。

今後の課題として、非名詞としての *ke-an* の用法をさらに精査していく必要があると思われる。今回は新聞の記事をコーパスとしたが、異なるコーパスではおそらく出現のしかたも異なるであろう。また口語的かどうかとも考慮する必要がある。

参考文献

Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa. (2016) *Kamus Besar Bahasa Indonesia (Edisi ke-6)*.

Kementerian Pendidikan, Kebudayaan, Riset, dan Teknologi Republik Indonesia.

<https://kbbi.kemdikbud.go.id/>

Moeliono, Anton M., et al. (2017) *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia Edisi Keempat*. Jakarta: Badan

Pengembangan dan Pembinaan Bahasa Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan.

Sneddon, James N., et al. (2010) *Indonesian: A Comprehensive Grammar*. 2nd ed. London: Routledge.

原真由子, 降幡正志, 森山幹弘. (2024) 「インドネシア語における副詞を伴う命令文における他

動詞の形態についての考察」『インドネシア 言語と文化 Bahasa dan Budaya: Jurnal

Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang』第 30 号, 日本インドネシア学会, pp. 129-147.

降幡正志, 原真由子, 森山幹弘. (2022) 「コーパス・データを用いたインドネシア語応用教材の開

発における課題」『インドネシア 言語と文化 Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Peneliti

Indonesia Seluruh Jepang』第 28 号, 日本インドネシア学会, pp. 105-122.

森山幹弘, 原真由子, 降幡正志. (2017) 『インドネシア語基本文法』.

https://www.tufs.ac.jp/ts/personal/furihata/ind_kyozai_bank/

**TRACES OF SUFFERING ALONG THE WAY
IN TAN TENG KIE'S "SYA'IR DJALANAN KERETA API"(1890)**

タン・テン・キエの『SYA'IR DJALANAN KERETA API』(1890)に

描かれた道に沿った苦難の軌跡

**Cahyaningrum Dewojati
(Faculty of Cultural Sciences, Universitas Gadjah Mada)**

チャハヤニンルム・デウオジャティ

(ガジャ・マダ大学人文学部)

Abstract

In the history of the development of Indonesian literature, the contribution of the Chinese Peranakan has a very important role. One of them is "Sja'ir Djalanan Kereta Api" written by Tan Teng Kie in 1890. The writer was named Tan Teng Kie and was known as a merchant in Batavia who was active in publishing literary works from 1890 until the early 1900s. This research will examine certain messages that Tan Teng Kie wants to convey as a sharp criticism of the Dutch colonial rulers. "Sja'ir Djalanan Kereta Api" was written by Tan Teng Kie as a criticism of the people involved in the construction of the railway which was considered inhumane. Tan Teng Kie is known to be close to the Dutch railway company in Indonesia called the Eastern Railway Company (Oosterspoorwegmaatschappij). Thus, it appears that "Sja'ir Djalanan Kereta Api" contains the author's awareness of various phenomena that occurred during the construction of the railway, especially those that contained inequality and injustice against the small people. As a work that has continuity with reality, "Sja'ir Djalanan Kereta Api" has a strong connection with the story setting. This work not only describes the location, but more specifically exposes the space as a site of struggle that represents the individuals represented. This can be explained through Upstone's opinion that the concept of 'space' is often expressed with an awareness of location. Tan Teng Kie, through his work, shows various problems that arose in the construction of the railway in West Java in the 19th Century.

Keywords: Tan Teng Kie, poetry, train, colonial space

1. Introduction

The Chinese Peranakan has made an important contribution to Indonesian literature. Peranakan literary works were created as a result of the acculturation process between Chinese culture, various local Indonesian cultures, and European influences. This affects the way of view, language style, and themes raised in their literary works.

Since the 19th century, Chinese Peranakan literature began to appear in Indonesia. Their work depicts the lives of the Chinese people in Indonesia who live between two worlds: the strong Chinese culture and the local culture they encountered every day during the Dutch period. Many stories in Chinese

Peranakan literature focus on identity conflicts and struggles to find a place in diverse societies, as well as reflections on social changes due to cultural mixing (CNN Indonesia, 2017).

The growth of Chinese Peranakan literature at that time was mostly developed in trading cities, which were the places where the cultures of various ethnicities and nations met both on the island of Java and outside Java. Areas that produce a lot of literature are big cities in Indonesia such as Surabaya, Bandung, Bogor, and Batavia. However, this literature also grew in other small cities in Java, such as Tegal, Yogyakarta, Malang, Kediri, and Cicurug (Sumardjo, 2004:39; Susanto, 2015). These Chinese Peranakan writers, according to Sumardjo, are mostly descendants of the Hokkien people. By 1860-1900 the number of Chinese living in Indonesia had grown rapidly to about 563,000 people, half of whom were Hokkians, followed by the descendants of the Hakka and Cantonese people (2004:39). Thus, the Peranakan people of the Hokkien group have the most contact with the local culture where they live.

Chinese literature became significant because it was able to reveal the 'stored ideology' behind their 'identity politics', especially through its distinctive use of language. In addition, the development of Chinese Peranakan literature in Indonesia cannot be separated from the role and dominance of Balai Pustaka publishers during the Dutch colonial era. As a representative of the rulers, this publication owned by the Dutch East Indies government applies certain standards in publishing literary works. As for Chinese Peranakan literary works, they are generally considered works that are below their standards. Therefore, their work is considered unworthy of publication by this publisher. To get around this, the literary works of the ethnic Chinese community are generally published by private publishers. One of the reasons is that the language used in their work is not standard Malay.

The lack of recognition of their colloquial language, namely Malay-Chinese, as other "formal" Malay languages are common by the Dutch East Indies government, builds the image that Chinese Malay is synonymous with low Malay (*laag Maleisch*), market Malay (*passermaleisch*), Malay *ceracau* (*brabbelmaleisch*), all of which are a mockery of their language style. Although the tone is clearly mocking, these terms really corner the Malay speakers, who are mostly Chinese, at least psychologically.

For the Malay community who were used to living in the midst of the colonial bureaucracy and the life of the *priyayi* elite, the use of the Low Malay was considered a cultural "disobedience" that had the potential to undermine the authority of the High Malay (*hoog Maleisch*). Therefore, in a pinched situation, inevitably the character of the lower Malay language which is more egalitarian and upholds the principle of equality is increasingly trapped and then dissolves in the "official" high Malay, as instructed by Charles Adriaan van Ophuijsen, an expert in the Dutch East Indies.

Chinese people unwittingly begin to experience an "obscuration" of identity, and they are alienated from their own language of conversation. The Chinese community has no effective communication channels "outward", except through the high-quality Malay language which they do not understand. Under such circumstances, they are increasingly isolated from wider public associations, except in a handful of economic relationships. Kwee Tek Hoay and Thio Tjin Boen, are the growth of the young generation who play an important role in disseminating ideas and dreams about a sovereign nation. Some famous Peranakan writers, such as Tio Ciu, Kwee Tek Hoay, Liauw Giok Lan, etc., wrote works that depicted the daily life of the Chinese community and how they interacted with Indonesian society more broadly. These works not only raise Chinese cultural values, but also explore issues of nationalism,

colonialism, and cultural integration that occur in Indonesia (CNN Indonesia, 2017).

In addition to the names that have been mentioned, there is the name of Tan Teng Kie who wrote "Sja'ir Djalanan Kereta Api" in 1890 telling about the construction of the railway line from Batavia to Karawang which took place at the end of the 19th century. As a trader, Tan Teng Kie not only writes for literary purposes, but also as a form of documentation and description of what he saw during the construction of the project. This verse was written in Malay and Dutch, which shows that Tan Teng Kie wanted this work to be understood by both groups, namely indigenous people and Dutch. This shows his social awareness to reach a wider audience.

This poem at least provides a clear and straightforward picture of the construction of the railway. There is no exaggerated style of language or poetic choice of words in this work, except for rhyme. Tan Teng Kie presents what he sees in a very real way, like a description that tells the story of the situation without many frills.

However, more than just a technical description of the project, the *Sj'air Djalanan Kreta Api* can also be considered a form of social protest. Through this writing, Tan Teng Kie describes the condition of the coolies, most of whom are from the indigenous community, who are forced to work hard in very difficult conditions. In this poem, Tan Teng Kie seems to represent the voice of the indigenous people who feel oppressed by the colonial government who exploit their labor for major projects such as the construction of railways.

Tan Teng Kie wrote *Sja'ir Djalanan Kereta Api* as a sharp criticism of the Dutch colonial rulers. *Sja'ir Djalanan Kereta Api* was created by Tan Teng Kie as a criticism of the people involved in the construction of the railway which was very cruel. Tan Teng Kie is none other than an employee of the Eastern Railway Company (*Oosterspoorwegmaatschappij*) (Salmon, 2010:255). Thus, it appears that *Sja'ir Djalanan Kereta Api* contains the author's awareness of various phenomena that occurred during the construction of the railway, especially those containing inequality and injustice against the small people.

The construction of the train initially from Batavia to Bandung using a train through Buitenzorg (now Bogor) and Cianjur built by the *Nederlansch Indische Spoorweg Maatschappij* (NISM) which was inaugurated on May 17, 1884, coinciding with the inauguration of Bandung Station and at that time the train stopped for the first time in Bandung. But because it was considered inadequate, an alternative route was built through Karawang, Cikampek and Purwakarta. The planning for the construction of the Batavia – Bandung railway via Karawang, Cikampek and Purwakarta was only opened on December 29, 1900. (Hartanti, 2010) The planning refers to the 1900 Law in the *Staatsblad* (State Sheet) No.8 of 1901. The construction process itself began in 1902 and the railway line between Batavia and Bandung via Karawang began operating on May 2, 1906 (Subarkah, 1992).

2. Colonial, Colonial Space, and Bumi Putera Society

Colonialism is a form of domination or domination carried out by a country or other region with the aim of expanding power and utilizing the resources available in the region. During the colonial period, colonial countries, such as the Dutch in Indonesia, not only controlled the territory physically, but also influenced various aspects of the life of the local community, both in the economic, social, cultural,

educational, and even environmental fields.

Indonesian colonialism had a huge impact on society and daily life. Economic exploitation, such as the use of Indonesia's natural products for the benefit of the colonizers, occurred on a large scale. Indonesian people are forced to work in very poor conditions, often with rewards that are not commensurate with the labor expended. In addition, colonialism was also socially oppressive by creating a clear social stratification between the colonizers and the indigenous population. Colonialism also leads to cultural degradation, when local cultural values are destroyed or marginalized. Western influence brought by the colonizers changed the way of life of Indonesian people. Restrictions in education also apply, when access to education is only given to certain groups and is unevenly distributed at all levels of society. Even the infrastructure built by the colonizers, although it seems to be developing, is more focused on facilitating the process of exploiting Indonesia's natural resources, not for the benefit of the Indonesian people.

The construction of the railway was not only a matter of transportation, but also a tool to continue economic exploitation by the Dutch. The Dutch used trains to transport Indonesian commodities to ports for export. Natural products such as sugar, coffee, sugarcane, rubber, and spices were exploited on a large scale and shipped to Europe by railroad. With the railway, the cost of transportation to transport goods became cheaper and more efficient, which certainly benefited the Netherlands. This railway infrastructure was built not only to support local needs or the needs of the Indonesian people, but rather to the colonial economic needs that benefited the colonizers (Dick, 2000).

Postcolonialism studies the effects of colonialism on culture and society (Ashcroft, 1998: 186). In the context of literary works, Upstone (2009: 25) states that postcolonial works question or problematize the use of national space as a marker of its involvement in politics. On the one hand, space can provide a certain realistic background. On the other hand, the description of space acquires meaning in relation to events, namely as symbolic meanings (Luxemburg & Weststeijn, 1989: 133). The spaces are classified by Upstone into five parts based on their level, including nation, journey, city, home, and body. Inherently space politics can correlate with issues of identity, power, and resistance (Upstone, 2009: 4). In the Indonesian context, the Dutch saw territorial control as something important for the expansion of the colony's profits, reach, and production volumes (Philpott, 2003: 59).

The term "bumiputera" has a deep meaning related to the history of the Indonesian nation, especially in relation to the identity and naming of the indigenous people of the archipelago during the colonial period. During the colonial period, the Dutch colonial government made systematic efforts to categorize and classify the population in their colonies, one of which was through the use of derogatory terms and clarified the existing social hierarchy (Mawardi: 2011).

One of the important changes that occurred related to this was the replacement of the term "inlander" with "Indonesier" or "inheemsche" as a name for Indonesians. The term "inlander" itself has a very derogatory connotation, often used to describe indigenous people who were considered to be inferior and backward peoples, as if they did not have an equivalent civilization to Europeans. In an attempt to change or refine this perception, the Dutch colonial government introduced new terms, such as "Indonesier" which sounded more neutral, although it still reflected the social hierarchy that existed at the time.

3. Colonial Space in "Sja'ir Djalanan Kereta Api" by Tan Teng Kie

Kreta api buka jalanan Bekasi
Sama tuwan tanah dengan permisi
Sekalian kanjeng tuwan polisi
Keker terukur kawannya besi (Tan, 1890: 38)

The poem above describes the colonial space in Indonesia at the end of the 19th century, when Dutch rule was very dominant, especially in the Bekasi area. The existence of railways that opened the roads showed the integration of infrastructure to facilitate the control and exploitation of the colonial economy, while the phrase "tuwan tanah dengan permisi" reflected the dependence of indigenous peoples on permission from the colonial side to manage their land. The use of "kanjeng tuwan polisi" highlights the role of the Dutch apparatus who supervise and enforce the rules with infinite power, while "keker terukur kawannya besi" describes the military power and weapons used to oppress and control society. Overall, this poem reveals how colonial spaces are full of un independence, tension, and tight control over the daily lives of indigenous people.

Tuwan keker membawa ukuran
Pasang patok aken tanda'an
Membuwat jembatan punya lantaran
Kutika itu banyak kuli'an (Tan, 1890: 38)

The poem above further describes the dynamics of colonial space in Indonesia, especially in the context of infrastructure development carried out by the Dutch. The phrase "Tuwan keker membawa ukuran" shows that the colonial side, through the apparatus or power holders, controlled development projects with strict supervision. "Pasang patok aken tanda'an" refers to the determination of boundaries or land measurements carried out for development purposes, which hints at colonial domination over space and territory. The construction of the bridge, mentioned in this poem, reflects the Dutch efforts in building infrastructure that is not only for the needs of the community, but rather to facilitate control and exploitation, with "lantaran" referring to the purpose or reason for the construction. On the other hand, the existence of "banyak kuli'an" reveals the harsh reality that these colonial projects depended on forced labor, i.e. coolies obtained through a system of exploitation of indigenous peoples. Overall, this poem describes how colonial powers organized and exploited space for their benefit, by imposing forced labor on the people to realize their development goals.

Banyak kelanggar rumah kampungan
Tuwan tanah Tan Kang Ie punya bilangan
Eratannya beda banyak kurangan
Ada jembatan aken sebrangan (Tan, 1890: 38)

This poem describes the social inequality and status difference between colonial power and the lives of indigenous peoples. " Banyak kelanggar rumah kampungan" hinted at the existence of a modest settlement belonging to marginalized commoners, as opposed to the lives of those in power. " Tuwan tanah Tan Kang Ie punya bilangan" refers to colonial landowners, who in this case are referred to by a specific name, signifying organized and measured ownership, indicating full control over the territory. " Eratannya beda banyak kurangan" describes the clear gap between the lives of colonial landowners and ordinary people, where the regulation and control of land is highly uneven, and deprivation or inequality is clearly visible. Meanwhile, "Ada jembatan aken sebrangan " describes the infrastructure built by the colonial side, such as bridges, which serve to connect separate areas, but this infrastructure is more supportive of colonial interests than indigenous peoples, showing the inequality between the space controlled by the colonials and the space of the marginalized ordinary people. Overall, this poem reflects the sharp contrast between the organized colonial world and the world of indigenous peoples living in inequality.

Orang Banten pada kuli'an
Kerja lama sudah kebi'asa'an
Apa keperintah bendara tuwan
Mengerti diya sudah ketentu'an (Tan, 1890: 38)

The above verse reflects the concept of space in Upston's theory of space, which highlights that social space and power are formed through the relationship of domination and influence. "Orang Banten pada kuli'an" shows how certain community groups, in this case Banten, are positioned in marginalized social spaces and exploited through a system of forced labor. "Kerja lama sudah kebi'asa'an" describes the routine that became their destiny, reflecting how colonial space shaped norms that limited individual freedom and choice, so that forced labor became something that was accepted as part of their lives. The phrase "Apa keperintah bendara tuwan" indicates the existence of a ruling colonial authority, where the ruler or "tuwan" has full control over the labor and rules with firmness. In Upston's spatial perspective, it shows how physical and social spaces in colonial systems were not only limited to territorial boundaries, but also involved power relations that governed ways of life and work. "Mengerti diya sudah ketentu'an" signifies acceptance of the terms and rules set by the colonial power, in which the indigenous peoples, in this case the coolies, understand and are forced to follow a predetermined social structure, reflecting their powerlessness in a space that has been completely controlled by the colonizers. Overall, this poem shows how colonial spaces created systematic inequality, by dominating and controlling the lives of indigenous peoples through the inevitable system of forced labor.

Kuli bekerja sampe pagi
Tanah karang teruruk lagi
Kuli menguruk sampe tinggi
Tiyada perduli banyak rugi (Tan, 1890: 39)

The above poem describes the condition of colonial space that leads to the relentless exploitation of indigenous labor. "Kuli bekerja sampe pagi" shows long, non-stop working hours, reflecting how colonial workspaces were filled with oppression against people who were forced to work late into the night. The phrase "Tanah karang teruruk lagi" describes their hard and exhausting work, such as cultivating the hard and difficult soil, a metaphor for the tireless effort forced upon them. "Kuli menguruk sampe tinggi" implied that their labor—in this case the land that was tilled—was always forced to continue to increase, without regard to the welfare or profit of the workers themselves. In Upston's theory of space, this reflects how colonial spaces are not only limited to physical spaces, but also create hierarchies of power that reinforce inequality. "Tiyada perduli banyak rugi" emphasized that although many losses were experienced by workers, both physical and emotional, they were ignored by the authorities, illustrating how in the colonial system, a sense of humanity and concern for indigenous welfare was minimal. Overall, the poem depicts injustices in colonial spaces, where indigenous labor is relentlessly exploited for the benefit of the colonizers, with little or no regard for the losses they suffer.

Kuli kerja sesungguhnya hati
 Siyang dan malam tiyada berhenti
 Kerja cape ta'takut mati
 Supaya dapat ringgit yang puti (Tan, 1890: 39)

The above poem describes the suffering of coolies who work relentlessly in the colonial system, which exposes social injustice and extreme exploitation. "Kuli kerja sesungguhnya hati" show the dedication and earnestness of the workers who, despite being in a situation of suffering, continue to do their work wholeheartedly. The phrase "Siyang dan malam tiyada berhenti" highlights the extremely long duration of work, even throughout the day and night without stopping, which reflects how colonial space not only organizes physical space but also extended working time to maximize colonial profits. "Kerja cape ta'takut mati" describes the extreme fatigue experienced by the coolies, but they are still not afraid of death, which shows how forced and desperate they are to continue working for survival. In Upston's space perspective, this reflects how their social space has been shaped to minimize their basic rights, only to support the continuation of colonial rule. "Supaya dapat ringgit yang puti" illustrates that despite working very hard, the wages received by coolies, namely "ringgit yang puti" (very little money), are very far from what they should receive, illustrating the inequality between the effort expended and the results obtained. Overall, the poem depicts the colonial space as a place where inequality and exploitation continue endlessly, with coolies working without regard for their bodies and lives in order to earn a meager wage that is not commensurate with the suffering they experience.

Kreta api punya perkara
 Dari Betawi ke Tanjung Pura
 Kali Bekasi seperti muwara
 Jambatannya tinggi tiyada terkira (Tan, 1890: 39)

The above verse describes the use of colonial infrastructure as a means of connecting to strengthen control over colonized territories. "Kreta api punya perkara" refers to the railway which became a symbol of colonial power in connecting various regions, in this case from Betawi (Jakarta) to Tanjung Pura, showing the importance of this transportation route to facilitate the mobility of goods and people, as well as strengthen the Dutch influence in Indonesia. "Kali Bekasi seperti muwara" describes the Bekasi river which is part of the landscape of the colonial space, which although natural, was also used by the colonial power for the benefit of transportation and exploitation. In the context of the Upston space, the river can be seen as a controlled space to support colonial economic activities, while indigenous peoples are only part of a marginalized space. "Jambatannya tinggi tiyada terkira" indicates a bridge built of large size and height, which is a symbol of the splendor of colonial infrastructure, but also separates the space between the colonizers and the marginalized living space of the common people. This bridge, although it serves to connect the region, is also a reminder of social inequality, where indigenous people only see the splendor without being able to enjoy it equally. Overall, this poem describes how colonial space was controlled through an infrastructure that not only connected the region but also asserted social and power boundaries between the colonizers and the colonized.

Annemer kerja bilangan bekasi
 Pake sabuk lokcuannya6 pangsi7
 Pekerja'an bagus necis dan berisi
 Maskapij patut beri terima kasih (Tan, 1890: 42)

The above verse illustrates the striking social class differences in colonial spaces, where there was a clear division between indigenous workers and colonial officials. "Annemer kerja blangan Bekasi" refers to a worker or colonial official who works in the Bekasi area, who may have a higher social status than coolies or ordinary people. The phrase "Pake sabuk lokcuannya6 pangsi7" indicates that the person wears a formal and stylish distinctive outfit, namely a belt and a pivot, which is a symbol of colonial status and power. In the context of Upston's space, these clothes can be understood as a symbol of colonial identity that signifies the separation between the upper classes that enjoy the benefits of colonialism and the ruling lower classes. "necis dan berisi" refers to a job that is considered more honorable or prestigious, with the person who performs it seen as more organized and classy. On the other hand, it emphasized the wide social distance between colonial official workers and indigenous coolies who worked in much harsher conditions and without reward. "Maskapij patut berterima kasi" is reminiscent of the respect or gratitude that should be given to individuals who worked in the colonial system, but it is more about the maintenance of status and the recognition of existing power, which ignores the reality of ordinary people's lives. Overall, the poem depicts the profound inequalities in colonial spaces, where status and social identity were maintained through clothing and occupation, which distinguished the colonial class from the colonized.

Muwatin rel bawa mengetan¹¹
 Sarat isinya dengan muwatan

Orang kuli datang berselabutan

Mukanya hitam seperti setan (Tan, 1890: 43)

The above poem describes the social inequality and the sharp difference in status between indigenous workers and colonial peoples in a structured social space. "Muwatin rel bawa mengetan"¹¹ refers to colonial workers or rulers who control railway lines, as a symbol of control over mobility and infrastructure that is very important in the colonial system. "Sarat isinya dengan muwatan" suggests that the train was filled with muwatin (indigenous people) who were part of the exploited workforce, creating an image of how social spaces were formed to separate the powerful from the colonized. Meanwhile, "Orang kuli datang berselabutan" depicts the working coolies in shabby, simple clothes, showing how overlooked they were in the colonial social hierarchy. "Mukanya hitam seperti setan" shows how racial discrimination is applied in colonial spaces, where skin color and social status are often the benchmarks for judging a person's degree, with coolies portrayed negatively based on their appearance. In the context of Upston's space, this poem reflects a very clear division of space between the ruling and the colonized classes, in which indigenous people, despite being an integral part of the colonial system, remained marginalized, kept away from access to power, and looked down upon by the colonizers. Overall, the poem emphasizes inequality and discrimination in colonial spaces structured by race and social status, showing how they were used to reinforce colonial dominance.

Muwat balok serta karang

Kreta api tarik terus ke-Cikarang

Kuli surak¹² dengannya girang

Sampe tiyada dapat di larang (Tan, 1890: 43)

The above verse describes the interaction between colonial power, the infrastructure built, and the reaction of indigenous workers to the system that oppresses them. "Muwat balok serta karang" hinted at major projects involving indigenous workers, such as the construction of railways related to the development of colonial infrastructure. "Kreta api tarik terus ke-Cikarang" refers to the railway that connects the region, which is part of the transportation system controlled by the colonial side to facilitate territorial control and resource exploitation. In the context of the Upston space, this development shows how colonial space was managed to support the interests of the colonizers, with strict supervision of transportation routes vital for the movement of goods and people. The phrase "Kuli surak dengannya girang" shows the reaction of the coolies working on the project, who, despite being in very difficult and forced conditions, feel happy or proud to be part of such a large project. This can be seen as a form of their surrender to the situation, where they may feel little appreciation or opportunity, although in the end they remain enslaved by the colonial system. "Sampe tiyada dapat di larang" describes how their hard work is unstoppable, even under pressure or prohibition from those in power. However, despite the enthusiasm or joy shown by the coolies, this poem still shows how they are trapped in a system that does not give them the freedom or reward commensurate with the effort they put in.

Buka jalanan teruntuk sawa
Melanggar juga rawa-rawa
Onkos keluwar tiyada kecewa
Pekerja'annya susah dengan rewa (Tan, 1890: 46)

This temple depicts the hardships and suffering of indigenous workers in a colonial space filled with exploitation and injustice. "Buka jalanan teruntuk sawa" indicates an attempt to open a difficult path or road, perhaps through swampy areas or hard-to-reach land, as part of a colonial project to control and develop the territory. In the context of Upston's space, it reflects how natural spaces, such as swamps, were harnessed to support colonial interests regardless of the conditions or difficulties faced by indigenous workers. "Melanggar juga rawa-rawa" describes the immense challenges faced by the workers, who were forced to overcome harsh natural obstacles in order to fulfill colonial goals.

The phrase "Onkos keluwar tiyada is kecewa" indicates that although the cost or wages incurred for this work may be little or not proportional to the suffering experienced, there are no complaints or rejections from the workers. This reflects their powerlessness in a colonial space that has shaped oppressive social and economic norms. "Pekerja'annya susah dengan rewa" describes how difficult the work is done by the coolies, who have to struggle in harsh and challenging conditions, with little or no appreciation for their efforts. It also reflects injustices in colonial spaces, where indigenous workers, despite facing heavy burdens, still have to continue their work without any significant change in their conditions.

Relnya jatuh ketindes jari
Hamba melihat sampe mengeri
Putus duwa yang dipikiri
Salah badannya diya sendiri (Tan, 1890: 50)

The above poem describes the suffering and misfortunes experienced by indigenous workers in colonial spaces, which were often ignored by the authorities. "Relnya jatuh ketindes jari" indicates an accident or disaster that occurred during the work process, perhaps while building or repairing a railroad. This dangerous work exposes the conditions in which indigenous workers, who are often forced to work in harsh conditions, are victims of exploitation without adequate safety protection or attention. In the context of Upston's space, it reflects that colonial workspaces were designed to maximize colonial capitalist profits without regard to the welfare of workers. "Hamba melihat sampe mengeri" describes the reaction of fear or horror felt by the workers after seeing the accident, which shows how harsh and dangerous their working conditions were. The phrase "Putus duwa yang dipikiri" reflects the destruction or great loss suffered as a result of the accident, which may refer to the physical or mental loss experienced by the worker. "Salah badannya diya sendiri" indicates that the worker blames herself for the incident, reflecting how the colonial system made them feel responsible for their conditions, even though they were in fact victims of exploitation and injustice.

4. Conclusion

In the conclusion, we learned that "Sja'ir Djalanan Kereta Api" depicts colonial space forming dangerous and risky working conditions for indigenous workers in Indonesia. Railroad construction workers are portrayed as having to endure physical and emotional suffering without any protection or humanity from the railroad companies and colonizers. At that time, many of the victims of the indigenous coolies were never recorded in the history books. The social injustice reflected in this poem shows that the space was designed to maintain colonial power by ignoring the safety and well-being of indigenous peoples. They argued that the construction of the railway was useful for opening up isolated cities. In addition, the construction of transportation was to transport the production of goods and agriculture from remote areas to meet domestic and international needs. The colonial space in the form of the construction of the railway in West Java with forced labor was a form of Dutch colonial control over its colonies which was well recorded in Tan Teng Kie's work.

Bibliography

- Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths, and Hellen Tiffin. (1998) *Post-Colonial Studies: The Key Concepts*. Routledge. London.
- CNN Indonesia. 2017. "Peranakan Is No Longer Just a Mixed Descendant". Retrieved on January 7, 2025 at the link:
<https://www.cnnindonesia.com/gaya-hidup/20170127145617-277-189507/peranakan-bukan-lagi-hanya-keturunan-campuran>
- Dick, Howard. (2006). *Representations of Development in 19th and 20th Century Indonesia: A Transport History Perspective*, *Bulletin of Indonesian Economic Studies*, 36:1, 185-207, University Melbourne.
- Hartanti, N. B. (2010). *Railway stations in Java – Indonesia*. PT. Train (PERSERO).
- Luxemburg, J. V., & Weststeijn, W. G. (1989). *Introduction to Literary Sciences*. Jakarta: Gramedia.
- Mawardi, Bandung. (2011). *"Pribumi dan Bumiputera"* Jakarta: Gramedia
- Philpott, S. (2003). *Collapse Indonesia: Postcolonial Politics and Authoritarianism* (Q. Zuly & Uzair. F., Ed.; Nuruddin. M.A., Editor). Yogyakarta: LKiS.
- Salmon, Claudine. 1981. *Literature in Malay by the Chinese in Indonesia: a provisional annotated bibliography*. Michigan: University of Michigan Press.
- _____. 1985. *Peranakan Chinese Literature in Malay Language*. Translated into Indonesian by Dede Oetomo. Jakarta: Balai Pustaka.
- Subarkah, I. (1992). *A glimpse of 125 years of our Railway 1867-1992*. Library Foundation.
- Sumarjo, Jacob. 2004. *Low Malay Literature*. Yogyakarta: Galang Press.
- Susanto, Dwi. 2015. *"Social Expression of the Chinese Peranakan Community in Indonesia: A Literary Sociological Study of Chinese Peranakan Literature in Indonesia in the Period 1900-1942"*. Dissertation S3 Postgraduate Program. Faculty of Cultural Sciences, Gadjah Mada University. Not published.
- Tan, Teng Kie. (1890) "Sja'ir Djalanan Kereta Api". Batavia.
- Upstone, Sarah. 2009. *Spatial Politics in the Postcolonial Novel*. Ashgate Publishing Company.

**Kalimat Langsung sebagai Pembangun Teks Narasi
dalam Kelas Kemahiran Menulis Bahasa Indonesia Universitas Osaka**
大阪大学インドネシア語専攻のナラティブ作文教育における直接話法

Cynthia Vientiani (The University of Osaka)

シンティア・フィエンティアニ（大阪大学）

Abstract

Writing narrative texts is one of the learning objectives in Indonesian as a foreign language. One of the typical linguistic features in building narrative text is direct speech or known as Quoting in Systemic Functional Grammar (SFG) by Halliday and Matthiessen (2014). Although Indonesian as a foreign language teaching claims to be genre-based text, SFG's analysis of linguistic features is not much. This study examines Quoting in narrative texts based on SFG analysis. The data source is short stories from "Gado-Gado" Rubric of Femina Magazine online 2016--2019. The results show that quoting consists of projecting clause (verbal process clause) and the projected clause. The projected clause contains clause as exchange with the mood tagging in declarative and interrogative, but not many in imperative. Verbs used in verbal clauses is proposition (declarative and interrogative) while verbal proposal (offers and commands) are limited. In addition, verbs of behavioural, mental, and material were used to describe attitudes, emotion, or expressive gestures that accompanies the act of speaking. Although rarely used in narrative texts, quoting thought is also found to represents 'I said to myself' with mental process verbs, such as *pikir*, *cetus*, dan *tebak*. On the other hand, minor clauses, such as greetings, nonlinguistic sound are also found. Therefore the teaching of quoting using SFG analysis and what was believed in Indonesian traditional grammar where quoting could be dichotomized with reporting (indirect speech) need to be considered. From the results of this study, a teaching model of quoting (direct speech) in narrative texts can be developed in the Indonesian as a foreign language teaching, particularly in writing proficiency class at Osaka University.

1. Pendahuluan

Dalam pengajaran bahasa Indonesia terdapat pengajaran salah satu unit bahasa, yaitu kalimat langsung. Kalimat langsung menurut Abdul Chaer (2009:209) adalah kalimat yang langsung diucapkan oleh seorang pembicara. "Kalimat tak langsung lazim didikotomikan dengan kalimat langsung karena kalimat tak langsung ini adalah ubahan dari kalimat langsung. Masalah ini lazim dibicarakan dalam pendidikan formal; dan dalam praktik berbahasa pun lazim digunakan." Dengan kata lain, dari pandangan tersebut dapat disimpulkan ke dalam dua hal, pertama unit bahasa kalimat langsung dan tidak langsung banyak digunakan baik dalam pengajaran bahasa maupun dalam berkomunikasi. Kedua, dalam pengajarannya, kalimat langsung cenderung didikotomikan dengan pengajaran kalimat tidak langsung.

Pendikotomian atau pengubahan dari kalimat langsung menjadi tidak langsung pun sangat populer, baik dalam aspek pengajaran maupun penelitian bahasa Indonesia hingga saat ini. Hal ini pun berlaku dalam pengajaran bahasa Indonesia sebagai bahasa asing. Dalam pengajarannya, kalimat

langsung masih dipengaruhi tata bahasa tradisional, mengubah kalimat tak langsung menjadi kalimat langsung yang berfokus pada tanda baca dan ejaan. Terkadang terlepas dari konteks komunikatifnya. Padahal saat ini, pengajaran bahasa Indonesia sebagai bahasa asing mengakui telah menggunakan pendekatan komunikatif, khususnya pendekatan berbasis teks (*genre based approach*).

Dalam pendekatan berbasis teks, ditekankan pengajaran fitur linguistik sesuai dengan fungsi yang muncul di dalam jenis teks tertentu. Pendekatan berbasis teks ini menganalisis fitur kebahasaan berdasarkan teori sistemik fungsional linguistik (Emilia, 2011). Teori tersebut diperkenalkan oleh M.A.K. Halliday (1985) dengan teori tata bahasa *systemic functional grammar* atau GFS (gramatika fungsional sistemik) yang diterapkan untuk penggunaan bahasa di bidang-bidang linguistik, seperti pengajaran bahasa, penerjemahan, dan analisis wacana (Yuwono, 2016). Dapat disimpulkan, pendekatan pengajaran bahasa berbasis teks menganalisis tata bahasa berdasarkan teori GFS. Dalam tata bahasa fungsional atau GFS, kalimat langsung dan tidak langsung disebut sebagai proyeksi. Proyeksi terbagi dua, yaitu Kutipan (*direct speech*, *verbal process*, *parataxis*) dan Laporan (*indirect speech*: *mental process*, *hypotaxis*). Dijelaskan bahwa proyeksi terdistribusi pada teks saksi mata dalam berita, ujaran narasumber, percakapan dalam narasi, bagian dalam biografi, dan kutipan ahli dalam wacana ilmiah (Halliday dan Matthiessen, 2014:512). Dari penjelasan tersebut, teks narasi adalah salah satu teks yang dibangun dengan menggunakan kalimat langsung atau kutipan.

Teks narasi mempunyai peran yang signifikan dalam berkomunikasi di kehidupan sehari-hari. Secara umum, teks ini bertujuan untuk menceritakan pengalaman seorang atau sekelompok orang dalam menghadapi sesuatu, mengeksplorasi nilai sosial dan budaya suatu masyarakat, serta menghibur pembaca (Emilia, 2016). Dalam pengajaran bahasa Indonesia sebagai bahasa asing, teks narasi ditargetkan agar dikuasai oleh pemelajar asing. Berikut adalah tujuan pembelajaran teks narasi dalam keterampilan menulis bahasa Indonesia sebagai bahasa asing oleh Kemdikbud (kemdikbud.go.id).

Materi ajar BIPA Umum	Tujuan Pembelajaran Menulis
BIPA 3 Unit 5	Mampu menulis teks narasi yang menggambarkan pengalaman dan pandangan pribadi tentang aktivitas sehari-hari.
BIPA 3 Unit 8	Mampu menulis teks narasi tentang dongeng.
BIPA 4 Unit 8	Mampu menulis teks narasi cerita rakyat dari negara masing-masing.
BIPA 5 Unit 6	Membuat cerpen tentang sesuatu yang pernah dialami.

Sebuah teks narasi dibangun dari berbagai fitur linguistik. Dirgeyasa (2016:18) menjelaskan bahwa terdapat pola tata bahasa atau fitur linguistik yang terkait dengan teks narasi. Misalnya, kalimat panjang pendek yang bervariasi, penggunaan percakapan dalam mengembangkan tindakan dan karakter tokoh, penggunaan indra, penggunaan majas, penggunaan pertanyaan retorik, penggunaan kosakata terkait verba aksi, penggunaan sudut pandang orang pertama dan ketiga, penggunaan verba perilaku dan verbal, dan lain sebagainya.

Dari penjelasan di atas dapat dikatakan bahwa teks narasi berperan penting dalam target pengajaran bahasa Indonesia, khususnya bahasa Indonesia sebagai bahasa asing. Akan tetapi, analisis fitur-fitur bahasa sebagai pembangun teks tersebut masih luput dalam analisis berdasarkan kajian GFS.

Oleh karena itu, penelitian ini akan berfokus pada analisis fitur bahasa kutipan dalam teks narasi tertulis. Dari analisis GFS ini akan diketahui bagaimana pola kutipan dalam ragam tulis narasi. Dengan demikian, pola ini dapat menjadi masukan dalam pengajaran kutipan dalam bahasa Indonesia untuk penutur asing (BIPA) maupun penutur jati. Hasil analisis ini juga akan diterapkan sebagai input pengajaran kelas kemahiran menulis tingkat tiga dan empat di Universitas Osaka (bahasa Indonesia IIA).

2. Metodologi Penelitian

Penelitian ini menggunakan metode deskriptif kualitatif. Sumber data yang digunakan adalah kutipan atau kalimat langsung dalam teks narasi. Teks narasi dikumpulkan dari cerita pendek Rubrik “Gado-Gado” dalam Majalah Femina daring di Femina | Fiction.co.id. Terdapat 47 teks narasi yang terkumpul sejak 17 Juni 2016 hingga 25 Agustus 2019. Data yang diperoleh berjumlah 329 kutipan. Setelah itu, kutipan-kutipan tersebut dianalisis menggunakan pendekatan GFS oleh Halliday dan Matthiessen (2014). Selain itu, aplikasi Antconc dengan fitur KWIC digunakan untuk mempermudah menemukan verba verbal pada klausa verbal.

3. Pembahasan

Halliday dan Matthiessen (2014:509) menjelaskan bahwa proyeksi terbagi atas beberapa jenis. Ada tiga sistem yang membedakan proyeksi. Pertama, tingkat proyeksi (ide dan lokusi); kedua mode proyeksi, yaitu hipotaksis laporan (*indirect speech*) dan parataksis kutipan (*direct speech*), fungsi ujaran (proposisi atau proposal). Kalimat langsung disebut dalam GFS disebut kutipan (*quoting*). Kutipan terbagi atas dua klausa mandiri (1 dan 2) membentuk proyeksi.

- a) Projecting clause : seseorang mengujarkannya selanjutnya disebut klausa verbal.*
- b) Projected clause : klausa yang merepresentasikan ujaran itu disebut klausa kutipan.*¹

Seperti telah dijelaskan di atas, kalimat langsung disebut kutipan (*quoting*). Klausa verbal adalah klausa yang menjelaskan bahwa seseorang mengujarkan. Sementara, klausa kutipan adalah representasi dari ujaran tersebut. Halliday dan Matthiessen (2014:514) menjelaskan bahwa kutipan berciri sebagai berikut.

- a. Klausa kutipan mengantarkan sebuah ujaran (*wording*) yang direpresentasikan. Klausa verbal adalah proses verbal.
- b. Klausa verbal dan klausa kutipan adalah klausa yang setara atau dapat berdiri masing-masing.
- c. Dalam klausa verbal terdapat verba verbal yang berisi proposisi. Halliday dan Matthiessen (2014:139) menjelaskan bahwa proposisi adalah klausa yang mempunyai fungsi semantis dalam pertukaran informasi (tanya jawab). Sementara, proposal adalah klausa yang mempunyai fungsi semantis pertukaran barang-barang atau jasa/ pelayanan (meminta dan menawarkan).
- d. Verba verbal dalam narasi fiksi sangat beragam bahkan dapat disajikan dalam klausa perilaku untuk memperlihatkan sikap, emosi, gerak tubuh yang menemani tindakan berbicara.

¹ *Penamaan klausa ke dalam bahasa Indonesia merupakan hasil diskusi bersama Bapak Untung Yuwono dari FIB Universitas Indonesia

- e. Klausa minor hanya ada dalam kutipan, seperti salam, seruan, sapaan, dan bunyi nonlinguistik.
- f. Dalam kutipan, status proposisi dapat berdiri sendiri (termasuk modusnya) dan menjaga bentuk aslinya.
- g. Dalam kutipan, verbal kata, berkata, mengatakan, bilang dapat memproyeksi berbagai modus.
- h. Dalam kutipan, walaupun terbatas, muncul proses mental (ide/pemikiran) sebagai representasi dari ujaran.

Berdasarkan ciri-ciri kutipan dalam GFS, berikut adalah hasil analisis terhadap pola kutipan yang ditemukan dalam data.

3.1. Pola Kutipan Proposisi (Modus Pernyataan)

a. Klausa kutipan – Klausa Verbal

- (1) “Wah, anak kota akhirnya pulang juga...,” kata mereka.
- (2) “Oke makasih. ” kataku.
- (3) “Oalaah, ternyata kamu sembunyi di sana, Cha. Tadinya ibu mau ikhlasin saja kamu kalau tidak ketemu.” ibuku berkata dengan perasaan lega.

Dalam data, banyak ditemukan kutipan yang mengantarkan modus pernyataan. Pola yang ditemukan tersusun atas klausa kutipan diikuti klausa verbal. Pada contoh (1), klausa verbal terdiri atas verba verbal *kata* dan terdapat partisipan Peujar, yaitu mereka. Pada contoh (2) jika Peujar menggunakan klitik aku dan dia, Peujar berubah menjadi enklitik –ku dan -nya. –ku dan –nya melekat pada verba verbalnya. Pada contoh (1) dan (2) walaupun polanya berbentuk seperti frasa nomina kepemilikan, tetap dapat disebut klausa verbal. Klausa ini mengalami penanggalan afiks ber- atau mengalami inversi dengan verba minus afiks yang bentuk asalnya seperti contoh no.3.* Verba verbal lain yang digunakan dalam klausa verbal adalah *ujar* dan *sahut*.

b. Klausa Verbal – Klausa Kutipan

- (4) Dia bilang, “Saya tadinya mau curhat sama Mbak, tapi sungkan, soalnya Mbak pendiam, sih.”
- (5) Suami saya terus-menerus berkata, “Sebentar lagi sampai.”

Bentuk kutipan yang ditemukan pada data lainnya adalah klausa verbal mendahului klausa kutipan. Pada klausa verbal, Partisipan Peujar pada contoh di atas, dia dan suami mendahului verba verbal *bilang* dan *berkata*. Verba verbal lain yang ditemukan dalam klausa verbal adalah *mengatakan*.

3.2. Pola Kutipan Proposisi (Modus Pertanyaan)

Kedua, pola kutipan yang banyak ditemukan dalam data adalah kutipan bermodus pertanyaan. Dengan pola sebagai berikut.

a. Klausa Kutipan – Klausa Verbal

- (6) “Kak Grace masuk kuliah S-1 tahun berapa?” tanya salah seorang dari mereka.

- (7) “Memangnya tidak boleh?” tanyaku lirih.
- (8) “Kamu kerja di bimbingan belajar yang terkenal itu, ‘kan?” mereka bertanya antusias.
- (9) “Jumping monkey?” tanya saya kepada salah satu kawan asli Prancis yang berkunjung ke Australia.

Verba verbal yang digunakan dalam klausa verbal pola kutipan modus pertanyaan tidak beragam hanya ada verba verbal *tanya*, *bertanya*. Selain itu, preposisi *kepada* muncul jika terdapat partisipan lain, yaitu Sasaran pada nomor (9).

b. Klausa Verbal – Klausa Kutipan

- (10) Di satu sesi latihan malam, ia datang dan bertanya, “Miss Erel, boleh enggak latihannya dipotong jadi 20 menit?”

Pola kedua yang ditemukan dalam modus pertanyaan adalah pola klausa verbal diikuti pola klausa kutipan dengan verba verbalnya *bertanya*. Dengan demikian, verba verbal *bertanya* terdapat pada klausa verbal di awal dan akhir.

3.3. Verba Verbal Sirkumstansial pada Klausa Verbal

Dalam kutipan bermodus pernyataan banyak ditemukan verba verbal sirkumstansial pada klausa verbal. Sirkumstansial itu sendiri terkait dengan situasi dan keadaan ketika Partisipan berbahasa. Yuwono (2016) menjelaskan bahwa sirkumstansi mencakupi tingkat, lokasi, sebab, kontinjensi, kesetaraan, peran, perihal, dan titik pijar. Dalam bahasa Indonesia sirkumstansi dapat dinyatakan dengan grup adverbial, frasa preposisional, dan grup konjungsi. Dalam Halliday (2014:514), verba verbal sirkumstansi yang ditemukan dalam klausa verbal, yaitu *lanjut*, *sambung*, *jelas*, *tambah*, *balas*, *protes*, *keluh*, *paksa*, *elak*, *celoteh*, *bela*, *mengiyakan*, *merengek*.

- (11) “Gak lihat kak.” jawab mereka.
- (12) “I won, Mummy!” teriaknya.
- (13) Aku berbisik, “Tadi Acil dan Amang bawain buku dan pensil untuk sekolah.”

Misalnya pada contoh (12) dan (13) verba verbal *teriak* dan *berbisik* berkaitan dengan sirkumstansi lantang atau tidaknya suara partisipan ketika berujar.

4. Perluasan Klausa Verbal

Seperti telah dijelaskan pada ciri kutipan, seringkali verba verbal dalam teks narasi diikuti dengan fitur perilaku (Halliday dan Matthiessen, 2014:515). Pada narasi fiksi, verba verbal tidak digunakan sama sekali melainkan digunakan verba perilaku untuk menjelaskan sikap, emosi, dan gerakan ekspresif yang menemani tindakan berbicara. Dalam data, ditemukan hal yang sama untuk mengembangkan tindakan atau karakter tokoh seperti yang dikemukakan oleh Dirgeyasa (2016) sebelumnya. Bahkan dalam data bahasa Indonesia, bukan hanya verba perilaku saja yang berperan dalam

mengembangkan sikap, emosi, dan tindakan berujar.

a. Verba verbal didampingi perilaku atau hanya verba perilaku

(14) “Kenapa parkir di sini?” kataku, cemberut.

(15) “Ya, benar” Amih mengangguk dan bengong.

b. Verba verbal didampingi sikap, emosi (mental)

(16) “Jadi gimana, dong?” tanya Santi putus asa.

(17) Yah, Ocha gak ada, jangan-jangan terjebur ke sumur!,” kataku dengan panik.

Berdasarkan data di atas, pada klausa verbal, verba perilaku berdiri sendiri menggantikan verba verbal pada contoh (15). Sementara itu, pada contoh (14) dan (16) verba verbal didampingi oleh perilaku dan mental. Pada contoh (17) verba verbal diikuti preposisi dengan, lalu verba mental.

c. verba verbal didampingi verba material didahului sambil

(18) “Bagus enggak, Sal?” tanya Santi, sambil memperlihatkan behelnya.

(19) “Tapi ini gendut,” kataku, sambil menepuk perut.

(20) “Tapi aku takut Ocha terjebur ke sumur, bu,” jawabku sambil terus menangis.

Pada contoh (18), (19), dan (20), proses verbal dapat didampingi oleh proses material (memperlihatkan, menepuk, dan menangis) yang didahului oleh konjungsi sambil.

5. Pola Kutipan Proposal (Modus Imperatif-Meminta dan Menyuruh)

Dijelaskan pula oleh Halliday dan Matthiessen (2014: 523), verba-verba meminta dan menawarkan juga muncul dalam kutipan yang disebut proposal. Berikut contoh dengan modus meminta dan menyuruh (*offers and commands*). Dikatakan juga bahwa klausa kutipan biasanya dikenali dengan penggunaan tanda seru. Berikut uraiannya.

Pola Klausa Kutipan – Klausa Verbal

(21) “OK mbak, ini bus-nya. Hati-hati melangkah ya” seru petugas yang menuntun kami
sambil bergegas pergi dan meninggalkan kami di depan pintu bus.

(22) “Bun, beli cumi asin lagi, dong,” bujuk suami.

(23) “Udah jangan nangis terus, malu sama temen-temen yang lain!” bujukku.

Dari hasil analisis, tidak banyak ditemukan proposal dalam data. Verba verbal yang ditemukan dalam klausa verbal menyuruh, yaitu *seru*, sedangkan pada modus imperatif meminta ditemukan verba verbal *bujuk*. Selain itu, pada klausa kutipan juga terdapat tanda gramatikal seperti *hati-hati*, *jangan* yang menandai bahwa itu adalah modus imperatif. Halliday juga menjelaskan bahwa kutipan proposal juga dapat diwujudkan dalam modus pertanyaan dan pernyataan. Diperlukan penelitian lebih lanjut tentang hal ini.

6. Klausa Kutipan-Klausa Mental

Halliday dan Matthiessen (2014:522--523) menjelaskan bahwa pada kutipan juga ditemukan klausa mental dengan verba mental walaupun terbatas. Di dalam data juga ditemukan verba mental yang berimplikasi pada pemikiran ke dirinya sendiri atau “I said to myself ...”

(24) Masih mending daripada jalan tanah atau becek,” pikir saya saat itu.

(25) “Jangan-jangan dia itu orang jahat!” cetus Amih.

(26) “Pizza?” tebak abang kandungnya

Dalam data hanya ditemukan tiga kutipan yang mengantarkan ide dan terkait dengan pemikiran tokoh pada dirinya sendiri. Pada contoh (24) menggunakan verba mental *pikir*. Pada contoh (25) dan (26) menggunakan verba verbal *cetus* dan *tebak*.

7. Klausa Kutipan (klausa minor, seperti salam dan seruan)

Pada pembahasan terakhir, Halliday dan Matthiessen (2014:510) menjelaskan bahwa kutipan atau proyeksi parataksis mempunyai cakupan yang lebih luas dan lebih menjaga bentuk asli ujarannya. Kutipan tidak hanya mengutip proposisi dan proposal, tetapi juga klausa minor. Oleh karena itu, banyak terdapat klausa minor dalam data narasi, seperti wow, ah, dan bunyi nonlinguistik, seperti bunyi ban mobil mengerem. Klausa minor seperti ini tidak dapat diubah menjadi laporan (reported-kalimat tidak langsung). Berikut uraiannya.

(27) “Yesss!” teriak saya.

(28) “Hi...,” spanya.

(29) “PETOK!” pekik si ayam.

Oleh karena itu, kita tidak dapat mengatakan Laporan (*reported, indirect speech* atau kalimat tidak langsung) adalah ubahan dari kutipan atau kalimat langsung. Hal ini tentu berdampak luas terhadap pengajaran yang terjadi hingga saat ini. Kebiasaan mengubah atau mendikotomikan kalimat langsung dan tidak langsung perlu dipertimbangkan kembali.

8. Simpulan

Penelitian tentang kalimat langsung atau kutipan ini sangat diperlukan khususnya dalam konteks pengajaran bahasa Indonesia sebagai bahasa asing, bahkan juga pengajaran bahasa Indonesia umumnya. Sebab, pengajaran dan penelitian kalimat langsung yang menggunakan teknik ubahan hanya bersifat mekanik dan struktural, tanpa memperhatikan fungsi dari fitur linguistik kutipan atau kalimat langsung ini. Dari analisis GFS ini ditemukan pola-pola yang dapat merangkai kutipan sehingga pemelajar terampil menggunakannya ketika menulis teks narasi yang menjadi target pengajaran bahasa. Pemelajar diperkenalkan cara menulis kutipan yang berfungsi mengantarkan proposisi (modus pernyataan dan pertanyaan), proposal (imperatif meminta dan menyuruh), klausa mental (ide), dan pola-pola klausa yang

merangkainya (klausa verbal dan klausa kutipan). Verba verbal semantis pada klausa verbal juga harus diajarkan untuk menuliskan kutipan tersebut. Dengan demikian, pemelajar bahasa Indonesia cakap dan terampil dalam menulis atau membangun teks narasi dengan menggunakan kutipan.

Penelitian selanjutnya terkait ciri kutipan dalam jenis teks lain juga perlu dikembangkan. Dalam analisis, tanda baca bahasa Indonesia belum diatur secara sistematis, misalnya dalam GFS jika kutipan mengantarkan ujaran, digunakan tanda baca "...", sedangkan jika mengantarkan pemikiran tokoh digunakan tanda kutip satu '...' . Selain itu, terkadang tanda baca tidak mewakili pesan ujarannya, misalnya kutipan diakhiri tanda tanya (?), namun verba verbal yang digunakan dalam klausa verbal adalah *kata* yang berfungsi mengantarkan modus pernyataan. Walaupun dalam Halliday dan Matthiessen (2014) juga dinyatakan bahwa verba verbal *kata* dalam narasi lebih bebas penggunaannya. Terkait organisasi dalam wacana, pemelajar dalam kelas menulis di Universitas Osaka pernah menanyakan letak penulisan kutipan selain fungsi modusnya. Melihat dari data teks narasi di rubrik "Gado-Gado" ini, ditemukan kutipan yang dapat diletakkan pada paragraf orientasi, tegangan, konflik, dan penyelesaian, terkadang terdapat dalam koda. Dirgeyasa (2016) menjelaskan dalam paragraf orientasi, kutipan dapat digunakan dengan bentuk modus pertanyaan retorik. Selain itu, juga ditemukan modus mental ide terkait dengan koda atau akhir paragraf yang berupa pemikiran tokoh terkait pengalaman atau konflik budaya dan sosialnya di masyarakat. Hal ini juga dapat dihubungkan dengan penggunaan bahasa informal yang banyak dikutip dalam klausa kutipan. Hal-hal yang dijelaskan tersebut, masih membuka peluang pada penelitian kutipan selanjutnya.

Daftar Pustaka

- Chaer, Abdul. (2009). *Sintaksis Bahasa Indonesia Pendekatan Proses*. Jakarta: Rineka Cipta.
- Dirgeyasa, I Wy. (2016). *College Academic Writing. A Genre-Based Perspective*. Jakarta: Penerbit Kencana.
- Emilia, Emi. (2011) *Pendekatan Genre-Based dalam Pengajaran Bahasa Inggris: Petunjuk untuk Guru*. Bandung: Rizqi Prss.
- Halliday, M.A.K dan Christian M.I.M. Matthiessen. (2014). *Introduction to Functional Grammar*. New York : Routledge.
- Nurlaili. (2016). "Peningkatan Kemampuan Mengubah Kalimat Langsung Menjadi Kalimat Tidak Langsung dengan Model Pembelajaran Direct Instruction (DI) pada Siswa SD". *Jurnal Pendidikan Dasar (JUPENDAS)*, 3(1).
- Thompson, Geoff. (2014). *Introducing Functional Grammar*. New York: Routledge.
- Yuwono, Untung. (2016). "Gramatika Fungsional Sistemik Dan Penerapannya Dalam Pemerian Bahasa". *Seminar Nasional Fungsionalisme*.

The Role of Indonesian Women Writers as Propaganda Agents During the Japanese Occupation in Indonesia

日本占領下のインドネシアにおけるプロパガンダ活動家としての

インドネシア女性作家の役割

Alifia Masitha Dewi (Darma Persada University)

アリフィア・マシタ・デウィ (ダルマプルサダ大学)

Abstract

During the Japanese occupation of Indonesia, the Japanese military government utilized propaganda newspapers and magazines to disseminate Japanese ideology among Indonesian women. These publications featured sections specifically targeted at Indonesian female readers, such as “Roeangan Poeteri (Girls’ Room)” and “Taman Isteri (Wife’s Garden).” To enhance their influence, the Japanese authorities enlisted Indonesian female writers, including S.K. Trimurty and Siti Soemandari, to contribute to these media outlets. Their writings predominantly emphasized traditional gender roles, highlighting women’s conduct during wartime, motherhood, and other related themes. This study examines how Japan sought to construct the image of ‘new women’ and mobilize Indonesian women through articles authored by these Indonesian female writers. The findings reveal that Indonesian women writers, serving as agents of propaganda, played a crucial role in educating Indonesian women about Japanese ideologies, as well as women’s roles as wives, mothers, and participants on the home front.

Keywords: Japanese occupation, propaganda, Indonesian women writers, Japanese ideologies, gender roles

1. Introduction

After the Japanese military government took control of Indonesia in 1942, they sought to mobilize Indonesian society on a large scale to propagate the ideology of the Greater East Asian Co-Prosperity Sphere. This propaganda campaign aimed to win the hearts and minds of the Indonesian people while instilling Japanese ideological values (Kurasawa, 2015). To achieve this, the Japanese authorities recognized the need for effective communication channels. In August 1942, they established the Propaganda Department (Sendenbu) in Jakarta to oversee these efforts. Through various media platforms, including newspapers, magazines, films, and songs, the Japanese military government strategically approached different segments of Indonesian society, including women.

To extend their influence among Indonesian women, the Japanese military government recruited Indonesian women writers to contribute to propaganda newspapers and magazines. These publications featured dedicated sections tailored to female readers, such as *Roeangan Poeteri* (Girls’ Room) in the *Asia Raya* newspaper, *Taman Isteri* (Wife’s Garden) in the *Pandji Poestaka* magazine, and *Roeangan Wanita* (Women’s Room) in the *Sinar Baroe* newspaper. By involving influential Indonesian women writers, the Japanese military government sought to establish a persuasive narrative that resonated with

Indonesian women.

Interestingly, the articles produced by these Indonesian women writers did not discuss issues related to gender equality, women's rights, or other gender-related concerns. Instead, they primarily conveyed ideological propaganda that emphasized traditional gender roles, such as women's responsibilities during wartime, motherhood, and Japan's vision of creating an ideal 'new woman' among Indonesian women. To carry out this agenda, the Japanese military government strategically engaged prominent Indonesian women writers, including S.K. Trimurti (1912–2008), Siti Sukaptinah Sunaryo Mangunpuspito (1907–1991), and Siti Sumandari (1908–1994). These writers were chosen because they were influential figures who had actively contributed to discussions about women's rights and were involved in the Indonesian women's movement before the Japanese occupation. Their established credibility made them effective propagandists capable of influencing Indonesian women readers.

This research examines the role of Indonesian women writers as propaganda agents during the Japanese occupation of Indonesia. It explores how these writers served as 'partners' of the Japanese military government in disseminating ideological narratives, educating, and mobilizing Indonesian women through their writings. By analyzing these articles, the study seeks to understand how the Japanese military government aimed to shape the ideal image of Indonesian women to align with their wartime objectives.

The primary sources for this research are articles written by Indonesian women writers, including S.K. Trimurti, Siti Sukaptinah Sunaryo Mangunpuspito, and Siti Sumandari, published in *Asia Raya* (newspaper), *Sinar Baroe* (newspaper), and *Djawa Baroe* (magazine). This study examines six selected articles that explore the roles, values, and expected behaviors of Indonesian women during the Japanese occupation. These articles were chosen because they strategically incorporated narratives of 'women empowerment' to align with propaganda goals, promoted Fujinkai (Women's Association) to create an impression that the Japanese military government supported Indonesian women's public involvement, and emphasized traditional gender roles to educate, 'enlighten,' and control Indonesian women's behavior. Through this analysis, the study reveals how propaganda was systematically used to influence Indonesian women during the Japanese occupation and highlights the significant role of Indonesian women writers in disseminating ideological narratives.

2. Indonesian Women Writing about Women within the Framework of Japanese Occupation Propaganda in Indonesia

The Japanese military government deliberately allocated special sections in propaganda newspapers and magazines in Indonesia to provide a platform for Indonesian women writers. However, the content produced within these spaces was carefully controlled to align with the propaganda agenda. The Japanese military authorities recognized that achieving their occupation objectives in Indonesia required the involvement and cooperation of Indonesian women. To fulfill this need, they recruited influential Indonesian women writers, such as S.K. Trimurti, Siti Sukaptinah Sunaryo Mangunpuspito, and Siti Sumandari, to contribute to these publications. By utilizing the voices of respected local women writers, the Japanese military government aimed to persuade Indonesian women readers to support and collaborate with the occupying forces. These writings were strategically designed to inspire loyalty and

foster a sense of solidarity with Japan's wartime goals.

3. S.K. Trimurti and the Propaganda of 'Women's Empowerment'

Surasti Karma Trimurti, known as S.K. Trimurti (1912—2008), was an influential Indonesian journalist recognized for her outspoken criticism of the Dutch colonial government and her advocacy for women's rights in Indonesia. During the Japanese occupation, she contributed to organizations established by the Japanese military government, such as Poetera (Poesat Tenaga Rakjat, or Center of the People's Power) and Jawa Hōkōkai (Javanese Service Society) (Jazimah, 2016). Following Indonesia's independence in 1945, S.K. Trimurti became the country's first Minister of Manpower, serving from 1947 to 1948 under Prime Minister Amir Sjarifuddin.

This section examines two of S.K. Trimurti's articles that illustrate how she navigated the constraints of Japanese propaganda while subtly addressing women's empowerment. The first article, *Mempertegoeh Batin dalam mengenangkan R.A. Kartini* (Strengthening the Mind in Remembering R.A. Kartini), was published in the *Roeangan Poeteri* (Girls' Room) column of Asia Raya on September 18, 1943. The second, *Wanita Diwaktoe Perang* (Women in Time of War), appeared in *Pembangoen* on December 2, 1943. In these articles, S.K. Trimurti strategically addressed women's empowerment by framing it within the context of wartime propaganda, thereby advising Indonesian women on how to fulfill their roles during the Japanese occupation.

In *Mempertegoeh Batin dalam mengenangkan R.A. Kartini*, S.K. Trimurti used the commemoration of R.A. Kartini—a national hero who championed women's emancipation—as a strategic moment to discuss the important role of Indonesian women during wartime. She argued that this role aligned with Kartini's vision of empowering women to contribute positively to society. According to S.K. Trimurti, Indonesian women needed to cultivate *kekoeatan batin* (inner strength) to fulfill their duties on the home front. This inner strength encompassed the emotional resilience required to make sacrifices, including the possibility of losing possessions, husbands, children, relatives, or even their own lives during the war.

She further explained that inner strength was crucial for women to fulfill their responsibilities on the home front, such as *mempertegoeh kekoeatan ra'jat* (protecting national unity), *toeroet mengamankan masjarakat* (helping maintain public safety), *toeroet tjampoer dalam pengatoeran makanan ra'jat* (assisting in food distribution), and safeguarding public health. Women who demonstrated this inner strength were portrayed as successful and valuable contributors to society. For instance, she encouraged women to establish small home-based industries to promote self-sufficiency, actively participate in distributing goods to the community, assist accident victims (including those affected by wartime events), and educate others on affordable nutrition to ensure public health.

S.K. Trimurti also emphasized the significance of inner strength in *Wanita Diwaktoe Perang*, published on December 2, 1943, in *Pembangoen*. In this article, she argued that inner strength enabled women to effectively manage their household responsibilities and serve as positive role models for their children. She also urged women to view their contributions to the war effort as part of a *perang suci* (holy war).

Moreover, S.K. Trimurti acknowledged that although women were capable of performing various tasks, their primary duty—particularly when men were present—was to care for their children and support

the home front. She concluded by asserting that women needed to accomplish two key objectives. First, they must strengthen their inner selves, maintain faith in God, and accept the impermanence of worldly possessions. Second, they were expected to contribute to society by actively participating in the war effort to achieve the shared prosperity of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere and promote world peace.

Through these articles, S.K. Trimurti subtly introduced the notion of women's empowerment, encouraging Indonesian women to participate in public life and contribute to their nation during wartime. Additionally, she promoted the idea of independence, encouraging women to express themselves in public spaces. However, within the constraints of Japanese propaganda, openly discussing women's empowerment, gender equality, and women's rights was considered taboo. To navigate this limitation, S.K. Trimurti strategically framed her arguments as patriotic propaganda. Consequently, her depiction of women's empowerment was not aimed at fostering individual autonomy but rather at mobilizing women to serve the interests of the Japanese military government.

4. Siti Sukaptinah Sunaryo Mangunpuspito and Fujinkai Propaganda

Siti Sukaptinah Sunaryo Mangunpuspito (1907–1991), also known by her pen name Ny. Soenarjo Mangoenpoespito, was a prominent figure in the Indonesian women's movement during the Dutch colonial era. She was actively involved in the Islamic nationalist group Jong Islaminten Bond Dames Afdeling (JIBDA) and was one of the key committee members at the First Indonesian Women's Congress in 1928 (Amini, 2017). During the Japanese occupation of Indonesia, she assumed the role of Head of Fujinkai (Women's Association) within the Jawa Hōkōkai (Javanese Service Society) in Jakarta. Additionally, in 1944, she became a member of BPUPKI (Badan Penyelidik Usaha-usaha Persiapan Kemerdekaan Indonesia, Investigating Committee for Preparatory Work for Independence).

Throughout the Japanese occupation, Siti Sukaptinah wrote numerous articles on women's roles in the context of wartime propaganda. This paper focuses on two of her significant works: "Soempah Bakti Kaoem Wanita" (Women's Oath), published in *Asia Raya* on 29 May 1944, and "Perempoean dalam Masa Perang" (Women in Wartime), published in *Djawa Baroe* on 15 April 1944. Both articles serve as propaganda that reflects the roles of Indonesian women, particularly in relation to the activities of Fujinkai during the Japanese occupation.

Fujinkai, which was established in August 1943, played a dual role during this period. Suryochondro (1984) notes that women were engaged in both front-line and home-front activities. On the front lines, their roles included training for the Red Cross, learning to use weapons, organizing public kitchens, and producing socks for soldiers. On the home front, women contributed by growing cotton for clothing, tending to crops and animals for food, boosting the morale of soldiers, and other similar efforts.

In her article *Soempah Bakti Kaoem Wanita*, Siti Sukaptinah positioned herself as the representative of Indonesian women in an oath of loyalty to the Japanese military government. This article suggested that, under Japanese rule, Indonesian women were seen as more liberated, free from the constraints of 'Western slavery.' The article also emphasized the success of Fujinkai in providing a space for Indonesian women to engage in discussions concerning societal matters, especially during wartime. Furthermore, it highlighted the domestic roles of women, which were primarily focused on raising children, supporting their husbands, and guiding the family. The article referred to women as the 'left wing of men,' a phrase

that underscored the belief that women's contributions were complementary to men's roles, rather than emphasizing women's active involvement in the public sphere.

In *Perempoean dalam Masa Perang*, Siti Sukaptinah elaborated further on the roles women played during the war, particularly as companions to men on the home front while men fought at the front. She also outlined three main objectives of Fujinkai in this article. The first goal was to 'build efforts among women during the war,' urging women to understand the reasons behind the war, which she referred to as the 'holy war' (*perang soetji*). This included encouraging mothers to educate themselves and adapt their behavior in response to the wartime circumstances, while also resisting the influence of Western customs, which were seen as detrimental to Indonesian women.

The second goal was to 'ensure conditions to strengthen people's livelihood,' calling on women to economize by saving food, money, and clothing, while also increasing agricultural production. This response was in line with the Japanese government's realization of resource limitations. The third objective was to 'prepare for the new society,' which placed an emphasis on the importance of women's roles as mothers and leaders of the family. Women were encouraged to focus on the health and education of their children as part of preparing for the future society. At the same time, Fujinkai worked to educate and empower women, including efforts to combat illiteracy.

The propaganda promoted by Fujinkai, as seen in the writings of Siti Sukaptinah, emphasized women's ability to play multiple roles. On one hand, women were expected to contribute to the public sphere, but on the other hand, their primary responsibility remained within the domestic sphere, particularly as mothers. It is important to note that while women were given space to work and express themselves in the public domain, their roles were largely viewed as complementary to men, rather than indicative of gender equality or empowerment. Programs such as leadership training and literacy eradication, while providing education, were ultimately aimed at making women more useful to the Japanese military government's mass mobilization plans, rather than promoting women's rights as independent individuals.

5. Siti Sumandari and Women's Traditional Gender Roles Propaganda

Siti Sumandari (1908–1994), an Indonesian journalist, played a significant role in shaping women's representation during the Japanese occupation, particularly through her written work. She wrote extensively from the Dutch colonial era, and during the Japanese occupation, she contributed articles to various propaganda outlets, including the *Asia Raya* and *Sinar Baroe* newspapers. Notably, she authored *Kartini: Sebuah Biografi* (Kartini: A Biography), further solidifying her presence as a prominent voice for women in Indonesia.

This paper focuses on two of her key articles: *Mengerahkan Kaoem Wanita* (Mobilizing Women), published in the *Roeangan Wanita* column of *Sinar Baroe* on 5 February 1944, and *Keselamatan Roemah Tangga* (Household Safety), published in the *Roeangan Poeteri* column of *Asia Raya* on 13 November 1943. These articles emphasize the importance of women and their traditional gender roles, particularly within the domestic sphere, while also discussing their contributions to the war effort.

In *Mengerahkan Kaoem Wanita* (Mobilizing Women), Siti Sumandari initially acknowledged the importance of involving women in public activities that would benefit the home front, but stressed that

such involvement should be “in moderation.” She emphasized that women should focus on domestic responsibilities, including managing the household and raising children with love and sincerity. These roles were deemed sufficient to strengthen the home front during the war. According to Sumandari, women’s sacrifices—such as sending their children to fight for the country, managing their homes, and contributing to the war effort—were critical to the success of the Japanese military campaign in Indonesia and the broader vision of the ‘New Order of Greater East Asia’ (*Soesoenan Baroe Asia Timoer Raya*).

In *Keselamatan Roemah Tangga* (Household Safety), Sumandari further developed the theme of women’s roles by linking them to the Javanese *wayang* character Srikandi, a skilled knight and archer. She portrayed women on the home front as analogous to Srikandi, standing shoulder-to-shoulder with men in the war effort. The use of Srikandi here symbolized gender equality, as she was considered equal to men in terms of strength and ability. However, Sumandari also referenced another *wayang* character, Sumbadra, the wife of Arjuna, who represented a more gentle, nurturing role. By invoking Sumbadra, Sumandari underscored the importance of maintaining traditional femininity and the balance between women’s public and private roles.

Sumandari also addressed the idea of resistance to feminism, which she saw as a threat to the traditional construction of women’s roles. She viewed feminism as an ideology that would disrupt the family structure, which she believed was the cornerstone of society. She argued that feminism, by challenging women’s domestic roles, was akin to “ropes that confine us to becoming slaves” and would ultimately lead to societal chaos. Thus, in her view, the proper role of women was to manage the household, ensure family safety, and preserve the welfare of the family, which she considered essential for the stability of society.

Through these articles, Siti Sumandari advocated for a vision of womanhood that reinforced traditional gender roles, where women were portrayed as both important contributors to the war effort and, more crucially, as the caregivers and stabilizers of the family. While these writings reflected the Japanese military’s propaganda efforts to mobilize women, they also highlighted the persistence of conventional gender norms, which sought to maintain women’s position primarily within the domestic sphere. Despite the call for women’s active participation in the public domain, their traditional roles as mothers, wives, and caretakers were still viewed as their most vital contributions to society.

6. *Ryōsai Kenbo* and *Jūgo*: Redefining ‘New Woman’ during Japanese Occupation in Indonesia

The Japanese military government aimed to reshape Indonesian women’s roles during the Japanese occupation, promoting the concepts of *jūgo* (home front) and *ryōsai kenbo* (good wife and wise mother) through various forms of propaganda. Writers like S.K. Trimurti, Siti Sukaptinah, and Siti Sumandari played a pivotal role in disseminating these ideas, which were framed as both empowering and aligning women with patriotic ideals.

Jūgo refers to individuals, particularly women, who contributed to the war effort from behind the scenes. While men were expected to fight on the battlefield, women were mobilized to support the war effort through domestic and public roles. This dual role positioned women both as caregivers in the home and as active participants in organizing or working outside the home to aid Japan’s war efforts. The concept of *jūgo* also framed women’s contributions as an essential form of patriotism, extending from the

household to the community and even to the nation. In some interpretations, *jūgo* was seen as promoting women's liberation and gender equality, as it enabled women to step out of the domestic sphere and contribute to broader societal goals. However, this was primarily framed within the context of supporting the Japanese military agenda.

At the same time, *ryōsai kenbo*, which translates to "good wife, wise mother," became a central theme in the Japanese military propaganda directed at Indonesian women. The ideal of *ryōsai kenbo* emphasized women's roles as mothers and wives, underscoring their duty to support the family and raise children who would serve the nation. This concept closely tied women's identity to their reproductive function, highlighting their importance in sustaining the household and, by extension, the state. It was used to justify the belief that the ultimate fulfillment of a woman's role was found in motherhood and wifeliness—values that were idealized as the highest commitment for women.

The notion of *ryōsai kenbo* was redefined during the war, particularly in the writings of figures like Yoshioka in his book *Josei no Shuppatsu* (1941). Yoshioka redefined the "good wife" as not merely a protector of the household but as a partner who could advise and support her husband, especially in wartime. The "wise mother," on the other hand, was a combination of the ideal "good mother" who instilled values such as frugality and discipline, and the "patriotic mother" who was willing to send her child to war for the nation. This redefinition complicated the earlier understanding of motherhood, as it required women to reconcile their nurturing roles with the patriotic duty of sacrificing their children for the war effort.

Although both *jūgo* and *ryōsai kenbo* have been described by some as forms of women's empowerment or liberation, this perspective is highly problematic, especially when viewed through the lens of colonial power dynamics. The Japanese military government, as the colonial authority, imposed these concepts on Indonesian women. These ideas were not rooted in genuine gender equality but rather served the goals of the occupiers. The glorification of women's roles as wives and mothers was not meant to advance women's autonomy but rather to position them as compliant supporters of the military regime. The rhetoric of women's liberation and equality in the propaganda was designed by the colonial powers to justify and reinforce their control, rather than to foster actual equality or independence for Indonesian women.

Ultimately, while *jūgo* and *ryōsai kenbo* may have been presented as liberating women from traditional gender restrictions by involving them in public and national life, they were also deeply entangled with the Japanese military's efforts to maintain control and manipulate gender roles for the sake of their war objectives.

7. Conclusions

Based on the description above, it is evident that the Japanese military government made efforts to redefine the concept of the "new woman" for Indonesian women, as reflected in the articles written by prominent Indonesian women writers such as S.K. Trimurti, Siti Sukaptinah Sunaryo Mangunpuspito, and Siti Sumandari. These three figures are recognized for their advocacy of women's rights. However, due to the Japanese military government's prohibition on the creation of independent Indonesian print media, such as newspapers and magazines, these writers used the available propaganda platforms as a

medium for expression, albeit under the strict censorship and restrictions imposed by the occupiers.

At the same time, the Japanese military government saw these women writers—experienced journalists who spoke on behalf of Indonesian women—as suitable agents for conveying its propaganda ideologies. The articles discussed above illustrate the military government's ambition to shape Indonesian women into the "new woman" concept. According to the Japanese military regime, the "new woman" was expected to uphold traditional gender roles while also contributing to the public sphere in the name of nationalism. The articles frequently emphasize traditional gender roles for women, but notably absent is any discussion on women's rights or empowerment as individuals. The rhetoric of women's equality and liberation, as presented in these articles, ultimately served the Japanese military government's agenda to control and limit the movement of Indonesian women during that period.

References

- Amini, M. (2017) Sukaptinah and Hajinah's Roles in the Nationalist Movement in Indonesia. *Patrawidya*, 18 (3), 273-282
- Djawa Sjinboen Sja. (1944) Barisan Srikandi (Srikandi Troops). *Djawa Baroe*, 15 April 1944, 8, 21. Leiden University Libraries Digital Collections Indonesian Serials (NIOD), Produced by NIOD Institute for War, Holocaust and Genocide Studies, Amsterdam, <http://hdl.handle.net/1887.1/item:3223949>. Accessed 21 February 2023
- Dewi, A. (2023) Propaganda Pendidikan Perempuan Indonesia dalam "Iboe dan Anak: Penghidoepan Wanita Di Zaman Baroe" Terbitan Djawa Shinbun Kai (1945) [Indonesian Women's Education Propaganda in Iboe dan Anak: Penghidoepan Wanita di Zaman Baroe Published by Djawa Shinbun Kai (1945)]. *Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang*, 29, 1-16
- Friedan, B. (2013) *The Feminine Mystique*. W.W. Norton & Company, New York & London
- Gunseikanbu. (1943) Anggaran Oentoek Menjoesoen Huzinkai (Perkoempoelan Wanita) [Guidelines for Organizing Fujinkai (Women's Association)]. *Kan Pō (Berita Pemerintah)*, 26, 34-35
- Jazimah, I. (2016) S.K. Trimurti: Pejuang Perempuan Indonesia. *Sejarah dan Budaya*, 1, 45-53
- Jones, T. (2013) *Culture, Power, and Authoritarianism in the Indonesian State: Cultural Policy across the Twentieth Century to the Reform Era*. Brill
- Kanō, M. (2019) *Onnatachi no Jūgo [Women Homefront]*. Inpakuto Shuppankai, Tokyo
- Kurasawa, A. (2015) *Kuasa Jepang di Jawa: Perubahan Sosial di Pedesaan 1942—1945 [Japanese Power in Java: A Study of Social Change in Rural Java 1942—1945]*. Komunitas Bambu, Depok
- Mangunpuspito, S. (1944) *Perempoean dalam Masa Perang (Women in Wartime)*. *Djawa Baroe*, 15 April 1944, 8, 5. Leiden University Libraries Digital Collections Indonesian Serials (NIOD), Produced by NIOD Institute for War, Holocaust and Genocide Studies, Amsterdam, <http://hdl.handle.net/1887.1/item:3223949>. Accessed 21 February 2023
- Mangunpuspito, S. (1944) *Soempah Bakti Kaoem Wanita [Women's Oath]*. *Asia Raya*, 29 Mei 1944, 2
- Sholikhah, N. and Masruroh, A. (2019) The Impementation of Feminist Values in Srikandi (Woman Figure on Wayang Story): A Concept to Develop Gender Equality in Java, Indonesia. *Proceeding Book 7th Asian Academic Society International Conference 2019*, 510-514
- Sumandari, S. (1943) *Keselamatan Roemah Tangga [Household Safety]*, *Asia Raya*, 13 November 1943,

Sumandari, S. (1944) Mengerahkan Kaoem Wanita [Mobilizing Women], Sinar Baroe, 5 February 1944,

Suryochondro, S. (1984) Potret Pergerakan Wanita di Indonesia [Portrait of Women's Movement in Indonesia]. CV. Rajawali, Jakarta

Trimurti, S.K. (1943) Mempertegoeh Batin dalam mengenangkan R.A. Kartini [Strengthening the Mind in Remembering R.A. Kartini]. Asia Raya, 18 September 1943, 4

Trimurti, S.K. (1943) Wanita Diwaktue Perang [Women in Time of War]. Pembangoen, 2 December 1943,

Yoshioka, Y. (1941) Josei no Shuppatsu [Departure of Woman]. Shigensha, Tokyo.

Kata Berfrekuensi Tinggi
Dalam Korpus Pemelajar Bahasa Indonesia Beranotasi Error
エラータグ付きインドネシア語学習者コーパスにおける高頻度語

David Moeljadi
ダヴィド・ムルヤディ

Abstract

This study aims to give a list of high frequency words in Indonesian used by Indonesian language learners at all levels in writing essays at seven universities in Japan. This study uses Koper (Korpus Pemelajar Bahasa Indonesia Beranotasi Error), the Error-Annotated Indonesian Language Learners Corpus. Koper contains a collection of essays written by students taking Indonesian language courses at seven universities in Japan: Kanda University of International Studies (KUIS), Ritsumeikan Asia Pacific University (APU), Tokyo University of Foreign Studies (TUFS), Osaka University, Chuo University, Keio University, and Sophia University. The essays used in this study were collected from April 2023 to March 2024. The result of this study will be useful for Indonesian language learners and teachers. The high frequency words in this corpus can be used in Indonesian language teaching, for example in determining the list of vocabulary that must be taught or targeted according to the level.

1. Pendahuluan

Kosakata memiliki peran sangat penting dalam pembelajaran bahasa asing, meliputi semua aspek keterampilan berbahasa, yaitu keterampilan membaca, mendengarkan, menulis, dan berbicara. Semakin banyak kosakata yang dikuasai oleh pemelajar, semakin tinggi tingkat kemampuan berbahasa asing pemelajar tersebut. Siagian (2020) menulis bahwa pembelajaran kosakata perlu mempertimbangkan konteks, kata-kata berfrekuensi tinggi (*high frequency words*), kata-kata akademis (*academic words*), dan kata-kata teknis (*technical words*) yang bergantung pada level dan tujuan pembelajaran. Kata berfrekuensi tinggi terutama menentukan keberhasilan pemelajar dalam penguasaan bahasa asing. Kata-kata yang lebih sering muncul dalam teks cenderung lebih mudah diingat oleh pemelajar. Berdasarkan penelitian Sanchez Gutierrez dkk. (2019), kata yang muncul sepuluh kali lebih mudah diingat dibandingkan kata yang hanya muncul lima kali. Selain itu, pengulangan dalam pembelajaran membantu memperkuat daya ingat pemelajar serta meningkatkan motivasi dan kepercayaan diri pemelajar dalam memproduksi kalimat (Siagian, 2020). Kamus kata berfrekuensi tinggi bahasa Prancis, Jepang, dan Mandarin berperan penting dalam pembelajaran bahasa asing tersebut (Purwiyanti dkk., 2017).

Dalam konteks pembelajaran Bahasa Indonesia bagi Penutur Asing (BIPA), penelitian tentang kata berfrekuensi tinggi dalam bahasa Indonesia belum banyak dilakukan, apalagi penyusunan kamus kata berfrekuensi tinggi BIPA. Muhadjir dkk. (1996) meneliti frekuensi kosakata bahasa Indonesia. Penelitian tersebut menghasilkan 3.800 kosakata dasar yang frekuensi penggunaannya 20 kali atau lebih dengan sumber data dari surat kabar Kompas tahun 1994, diambil secara acak sekali dalam seminggu. Hananto dkk. (2011) melakukan penelitian *Frequency-Based Indonesian Word List* dengan sumber data buku-buku

SMP, cerita fiksi anak-anak dan dewasa, serta artikel koran. Selain itu, daftar 50 kata berfrekuensi tinggi dalam bahasa Indonesia dapat diakses dari situs Corpora and Language Statistics (Eckart dan Quasthoff, 2013) dengan sumber data korpus Leipzig (Leipzig Corpora Collection) yang diambil dari artikel Wikipedia dan artikel daring bahasa Indonesia lainnya. Siagian (2020) meneliti kata berfrekuensi tinggi dalam BIPA pemula dengan sumber data materi percakapan dari 17 buku BIPA 1 dan 2 tingkat pemula. Penelitian tersebut menghasilkan 3.695 kata berfrekuensi tinggi.

Moeljadi (2023) mengembangkan korpus pemelajar bahasa Indonesia pertama yang bernama Koper (Korpus Pemelajar Bahasa Indonesia Beranotasi Error). Koper adalah koleksi tulisan pemelajar bahasa Indonesia yang dapat dibaca komputer dan berisi data pemelajar. Tulisan pemelajar bahasa Indonesia ini dikumpulkan sejak April 2023 dari tujuh universitas di Jepang. Keberadaan Koper ini sangat penting untuk memahami kecenderungan penggunaan kosakata bahasa Indonesia oleh pemelajar BIPA, terutama di Jepang. Penelitian ini berfokus pada kata berfrekuensi tinggi dalam Koper. Dengan menggunakan Koper, dapat dianalisis kecenderungan penggunaan kosakata dalam tulisan pemelajar BIPA. Hasil penelitian ini diharapkan dapat memberi manfaat bagi pemelajar, pengajar, penulis bahan ajar, dan pihak-pihak yang terkait dengan BIPA.

2. Sumber Data dan Pengolahan Data

Koper berisi tulisan pemelajar BIPA dari berbagai level yang dikumpulkan dari tujuh universitas di Jepang, yaitu Kanda University of International Studies, Ritsumeikan Asia Pacific University, Tokyo University of Foreign Studies, Chuo University, Keio University Shonan Fujisawa Campus, Sophia University, dan Osaka University.¹ Penulis meminta bantuan dosen bahasa Indonesia di tiap universitas tersebut untuk mengumpulkan tulisan atau karangan pemelajar. Tulisan pemelajar dikumpulkan baik dalam bentuk tulisan tangan maupun hasil ketikan. Selain karangan atau tulisan pemelajar, data pemelajar yang meliputi nama, umur, jenis kelamin, lama belajar bahasa Indonesia, pengalaman tinggal di Indonesia, dan sebagainya dikumpulkan beserta dengan formulir persetujuan. Tidak semua tulisan dari semua pemelajar dimasukkan sebagai data dalam Koper. Tulisan yang berhasil dikumpulkan adalah tulisan pemelajar yang bersedia menyumbangkan tulisannya.

Semua tulisan yang terkumpul diseragamkan ke dalam format teks (.txt). Informasi pribadi yang ada dalam tulisan pemelajar seperti nama, nomor telepon, dan alamat pos-el diganti dengan label [NAMA], [NOMOR], [POS-EL]. Tulisan atau karangan dikelompokkan menurut sumber data: kode nama penulis, nama universitas, level atau tingkat pemelajar, tema tulisan/karangan, dan tahun penulisan. Level atau tingkat pemelajar dibagi ke dalam empat level berdasarkan tingkat kuliah mahasiswa S-1 jurusan atau program studi bahasa Indonesia di KUIS, TUFS, dan OU. Pembagian level pemelajar di universitas yang tidak memiliki jurusan atau program studi bahasa Indonesia tetapi memiliki mata kuliah pilihan bahasa Indonesia, yaitu APU, CHU, SFC, dan SOP, adalah menurut level mata kuliah di tiap universitas tersebut. APU memiliki empat level kelas bahasa Indonesia yang bisa disamakan dengan empat tingkat kuliah.

¹ Dalam makalah ini, Kanda University of International Studies disingkat menjadi KUIS, Ritsumeikan Asia Pacific University disingkat menjadi APU, Tokyo University of Foreign Studies disingkat menjadi TUFS, Chuo University disingkat menjadi CHU, Keio University Shonan Fujisawa Campus disingkat menjadi SFC, Sophia University disingkat menjadi SOP, dan Osaka University disingkat menjadi OU.

CHU hanya memiliki satu level, yaitu level dasar (*shokyu*) yang bisa disamakan dengan tingkat satu. SOP memiliki dua level, yaitu level dasar (*shokyu*) dan level menengah (*chukyu*) yang bisa disamakan dengan tingkat satu dan tingkat dua. SFC memiliki lima kelas bahasa Indonesia, yaitu Basic 1 (*kisokyu*), Basic 2 (*shokyu*), Intensif 1 (*kiso shokyu*), Intensif 2 (*shochukyu*), dan Skill (*chukyu*). Basic 1, Basic 2, dan Intensif 1 dapat disamakan dengan tingkat satu, Intensif 2 dapat disamakan dengan tingkat dua, dan Skill dapat disamakan dengan tingkat tiga.

Penulis menggunakan program pemisah kata dan penghitung frekuensi, alih-alih perangkat lunak AntConc (Anthony, 2024) yang biasanya digunakan untuk memproses dan menganalisis korpus. AntConc mengelompokkan kata berdasarkan spasi dan tanda hubung. Perangkat lunak ini tidak mengenal kata majemuk, jadi kata majemuk seperti ‘rumah sakit’ dan ‘air mata’ akan dipisah menjadi ‘rumah’, ‘sakit’, ‘air’, dan ‘mata’ berdasarkan penanda spasi. Selain itu, AntConc tidak mengenal kata ulang, jadi kata ulang seperti ‘laki-laki’ akan dipisah menjadi ‘laki’ dan ‘laki’ tanpa tanda hubung. Berbeda dengan AntConc, program pemisah kata dan penghitung frekuensi yang digunakan dalam penelitian ini mengelompokkan kata berdasarkan penanda spasi dan karakter atau tanda baca lainnya seperti tanda kurung buka, tanda titik dua, dan tanda tanya. Huruf kapital di awal kalimat dinormalisasi menjadi huruf kecil. Program tersebut juga menggunakan data kata majemuk dari KBBI sehingga kata-kata majemuk dapat dikenali dan unsur-unsur pembentuknya tidak dipisah. Selain itu, unsur pembentuk kata ulang juga tidak dipisah. Kata-kata yang berhasil diekstrak kemudian diurutkan berdasarkan kemunculannya di dalam korpus. Setelah itu, kata-kata berfrekuensi tinggi yang berhasil diperoleh tersebut dikelompokkan berdasarkan kelas kata.

3. Hasil Penelitian dan Analisis

Penulis berhasil mengumpulkan 1.427 tulisan yang berisi 177.705 kata dari 351 mahasiswa yang merupakan pemelajar BIPA di 7 universitas di Jepang selama April 2023 hingga Maret 2024.² Tabel 1 menunjukkan rincian jumlah tulisan, kata, dan pemelajar per tingkat.

Tabel 1. Jumlah Tulisan Pemelajar BIPA yang Berkumpul April 2023—Maret 2024

Tingkat	Teks		Kata		Pemelajar	
	Jumlah	Persentase	Jumlah	Persentase	Jumlah	Persentase
1	600	42%	36.551	21%	216	62%
2	608	43%	101.575	57%	95	27%
3	180	13%	33.008	19%	33	9%
4	39	3%	6.571	4%	7	2%
Total	1.427	100%	177.705	100%	351	100%

Jika dilihat dari jumlah pemelajar, dapat dilihat bahwa pemelajar tingkat satu yang terbanyak, yaitu sebanyak 62%. Namun, jika dilihat dari jumlah tulisan dan kata, dapat dilihat bahwa jumlah tulisan pemelajar tingkat dua yang terbanyak dengan jumlah kata (57% dari keseluruhan) hampir tiga kali lebih

² Tahun perkuliahan di Jepang dimulai pada bulan April dan selesai pada bulan Maret.

banyak daripada tulisan pemelajar tingkat satu (21%) dan tingkat tiga (19%).

Tabel 2. Jumlah Tulisan Pemelajar BIPA di KUIS, OU, dan TUFS April 2023—Maret 2024

Tingkat	KUIS			OU			TUFS		
	Teks	Kata	Pemelajar	Teks	Kata	Pemelajar	Teks	Kata	Pemelajar
1	49	5.405	17	0	0	0	0	0	0
2	26	1.673	25	32	13.096	16	399	72.782	22
3	32	5.678	5	0	0	0	120	23.991	16
4	35	6.225	5	0	0	0	0	0	0
Total	142	18.981	52	32	13.096	16	519	96.773	38

Tabel 2 menunjukkan rincian jumlah tulisan, kata, dan pemelajar per tingkat di KUIS, OU, dan TUFS. Ketiga universitas ini memiliki jurusan atau program studi bahasa Indonesia tingkat S-1. Mahasiswa atau pemelajar BIPA di universitas tersebut belajar bahasa Indonesia selama empat tahun. Penulis berhasil mengumpulkan tulisan pemelajar di KUIS dari tingkat satu hingga empat. Tema tulisan pemelajar tiap tingkat berbeda-beda. Pemelajar tingkat satu menulis karangan tentang pengenalan diri, keluarga, rumah, dan cerita lucu. Pemelajar tingkat dua menulis surat cinta. Pemelajar tingkat tiga dan empat menulis karangan tentang tokoh, tempat, perjalanan, pos-el, paragraf perbandingan, opini, dan pendahuluan makalah. Dari pemelajar di OU, penulis hanya dapat mengumpulkan tulisan pemelajar tingkat dua yang menulis tentang tokoh dan tempat wisata. Dari pemelajar di TUFS, penulis berhasil mengumpulkan tulisan pemelajar tingkat dua dan tiga. Pemelajar tingkat dua menulis tentang tokoh, teman, tempat, budaya, cerita rakyat, hobi, keluarga, liburan, pidato, dan rumah. Pemelajar tingkat tiga menulis naskah pidato, surat formal, undangan, tokoh, tempat, perjalanan, hobi, cerita rakyat, dan pengalaman.

Tabel 3. Jumlah Tulisan Pemelajar BIPA di APU, CHU, SFC, dan SOP April 2023—Maret 2024

Tingkat	APU			CHU			SFC			SOP		
	Teks	Kata	Pljar	Teks	Kata	Pljar	Teks	Kata	Pljar	Teks	Kata	Pljar
1	91	6.238	46	157	9.874	51	205	8.500	83	98	6.534	19
2	12	1.843	5	0	0	0	75	4.700	15	64	7.481	12
3	14	1.924	5	0	0	0	14	1.415	7	0	0	0
4	4	346	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Total	121	10.351	58	157	9.874	51	294	14.615	105	162	14.015	31

Tabel 3 menunjukkan rincian jumlah tulisan, kata, dan pemelajar per tingkat di APU, CHU, SFC, dan SOP. Keempat universitas ini memiliki kelas bahasa Indonesia sebagai mata kuliah pilihan bagi mahasiswa S-1. Penulis berhasil mengumpulkan tulisan pemelajar di APU dari level satu hingga level empat. Pemelajar tingkat satu menulis tentang keluarga, teman, tempat, makanan, dan film. Pemelajar tingkat dua menulis tentang teman, tempat, dan keluarga. Pemelajar tingkat tiga menulis tentang kesan wawancara, keluarga, dan rumah. Pemelajar tingkat empat menulis pos-el formal dan karangan tentang

gempa dan kegiatan selama liburan. Dari pemelajar BIPA di CHU, penulis mengumpulkan tulisan pemelajar kelas dasar (*shokyu*) bertemakan keluarga, teman, tempat, tokoh, makanan, dan Indonesia.

Dari pemelajar BIPA di SFC, penulis mengumpulkan tulisan pemelajar tingkat satu tentang pengenalan diri, rumah, teman, dan hobi; tulisan pemelajar tingkat dua tentang perjalanan, tradisi, dan makanan; serta tulisan pemelajar tingkat tiga tentang liburan, tempat, dan film. Penulis juga mengumpulkan tulisan pemelajar tingkat satu dan dua di SOP. Tulisan pemelajar tingkat satu tentang tokoh, tempat, keluarga, makanan, aktivitas, dan liburan. Tulisan pemelajar tingkat dua tentang perjalanan, rumah idaman, sahabat, dan masa kecil.³ Setelah semua data tulisan pemelajar ini terkumpul, penulis menggunakan program pemisah kata dan penghitung frekuensi untuk memperoleh daftar kata berfrekuensi tinggi secara keseluruhan dan per tingkat pemelajar.

Tabel 4. Sepuluh Kata Berfrekuensi Tertinggi

	Muhadjir dkk. (1996)	Hananto dkk. (2011)	Eckart dan Quasthoff (2013)	Siagian (2020)
1	yang	yang	yang	saya
2	dan	dan	dan	di
3	di	di	di	ya
4	itu	dengan	dengan	dan
5	dengan	itu	ini	Anda
6	ini	ini	untuk	ini
7	dari	dari	dari	apa
8	dalam	tidak	itu	ada
9	untuk	untuk	dalam	ke
10	tidak	dalam	tidak	selamat

Tabel 4 berisi sepuluh kata berfrekuensi tertinggi yang diperoleh dari penelitian sebelumnya, yaitu Muhadjir dkk. (1996), Hananto dkk. (2011), Corpora and Language Statistics (Eckart dan Quasthoff, 2013) dengan sumber data korpus Leipzig (Leipzig Corpora Collection), dan Siagian (2020). Penelitian Muhadjir dkk. (1996), Hananto dkk. (2011), dan Eckart dan Quasthoff (2013) menggunakan korpus yang datanya berupa sumber tertulis beragam formal, yaitu artikel surat kabar Kompas, buku teks SMP, cerita anak, novel, artikel Wikipedia, dan artikel daring lainnya. Sebaliknya, penelitian Siagian (2020) menggunakan korpus yang datanya berupa materi percakapan buku teks BIPA pemula yang cenderung beragam informal.

Dari Tabel 4 di atas dapat dilihat bahwa tiga kata berfrekuensi tertinggi dalam bahasa Indonesia ragam tulis formal adalah pronomina relatif ‘yang’, konjungsi ‘dan’, dan preposisi ‘di’. Berikutnya, pronominal penunjuk (demonstrativa) ‘itu’, ‘ini’, dan preposisi ‘dengan’ menduduki peringkat keempat hingga keenam dari hasil penelitian Muhadjir dkk. (1996) dan Hananto dkk. (2011). Preposisi ‘dari’, ‘dalam’, ‘untuk’, dan kata negasi ‘tidak’ menduduki peringkat keenam hingga kesepuluh dari hasil penelitian Muhadjir dkk. (1996), Hananto dkk. (2011), dan Eckart dan Quasthoff (2013) walaupun urutannya

³ Tulisan-tulisan pemelajar ini dapat diunduh di <https://github.com/davidmoeljadi/Koper/tree/main>

berbeda.

Sebaliknya, sepuluh kata berfrekuensi tertinggi bahasa Indonesia ragam percakapan (informal) dari hasil penelitian Siagian (2020) adalah sebagai berikut: pronomina persona ‘saya’, preposisi ‘di’, partikel ‘ya’, konjungsi ‘dan’, pronomina persona ‘Anda’, pronomina penunjuk (demonstrativa) ‘ini’, kata tanya ‘apa’, verba ‘ada’, preposisi ‘ke’, dan kata ‘selamat’. Hasil penelitian ini menunjukkan bahwa pronomina persona ‘saya’ dan ‘Anda’ banyak digunakan dalam percakapan. Dalam konteks BIPA pemula, memang pronomina persona ‘saya’ dan ‘Anda’ lebih banyak digunakan daripada ‘aku’ dan ‘kamu’. Selain itu, kata tanya ‘apa’, partikel ‘ya’ dalam jawaban, dan kata ‘selamat’ dalam ucapan salam sering digunakan dalam percakapan. Baik dalam ragam tulis formal maupun dalam ragam percakapan, preposisi ‘di’, konjungsi ‘dan’, dan pronomina penunjuk ‘ini’ menduduki peringkat atas kata berfrekuensi tinggi.

Tabel 5. Sepuluh Kata Berfrekuensi Tertinggi dalam Koper April 2023—Maret 2024

	Kata	Kelas Kata	Jumlah	Persentase
1	saya	pronomina	8.079	4,63%
2	di	preposisi	6.572	3,77%
3	dan	konjungsi	5.501	3,15%
4	dia	pronomina	3.667	2,10%
5	yang	pronomina	3.608	2,07%
6	itu	pronomina	2.471	1,42%
7	ke	preposisi	2.254	1,29%
8	ini	pronomina	1.956	1,12%
9	ada	verba	1.870	1,07%
10	dengan	preposisi	1.847	1,06%

Tabel 5 memuat sepuluh kata berfrekuensi tertinggi secara keseluruhan yang diperoleh penulis dari Koper dari April 2023 hingga Maret 2024.⁴ Dapat dilihat bahwa ada kesamaan dengan hasil penelitian Siagian (2020), yaitu pronomina persona ‘saya’ dan preposisi ‘di’ menduduki peringkat pertama dan kedua. Selain itu, preposisi ‘ke’ dan verba ‘ada’ juga ada dalam daftar sepuluh kata berfrekuensi tertinggi. Selain itu, ada juga kesamaan dengan hasil penelitian Muhadjir dkk. (1996), Hananto dkk. (2011), dan Eckart dan Quasthoff (2013), yaitu penggunaan pronomina relatif ‘yang’, pronomina penunjuk ‘itu’, dan preposisi ‘dengan’. Hal ini menunjukkan bahwa tulisan pemelajar BIPA memiliki ciri khas ragam tulis formal dan berfokus pada diri sendiri yang dapat dilihat dari banyaknya penggunaan pronomina persona pertama tunggal ‘saya’. Hal ini tidak lepas dari tema atau topik tulisan pemelajar BIPA yang kebanyakan mengenai pengenalan diri, keluarga, hobi, kesan dan opini pribadi, dan sebagainya. Perbedaan dengan penelitian sebelumnya adalah pada pronomina persona ketiga tunggal ‘dia’ yang terutama digunakan ketika menulis tentang teman dan tokoh. Berbeda dengan ragam percakapan, pronomina persona kedua tunggal ‘Anda’ hanya digunakan dalam penulisan pos-el, undangan, surat formal, dan naskah pidato.

⁴ Daftar selengkapnya dapat diunduh di <https://github.com/davidmoeljadi/Koper/tree/main/HFW>

Tabel 6. Kata Berfrekuensi Tinggi dalam Koper April 2023—Maret 2024 berdasarkan Tingkat Pemelajar

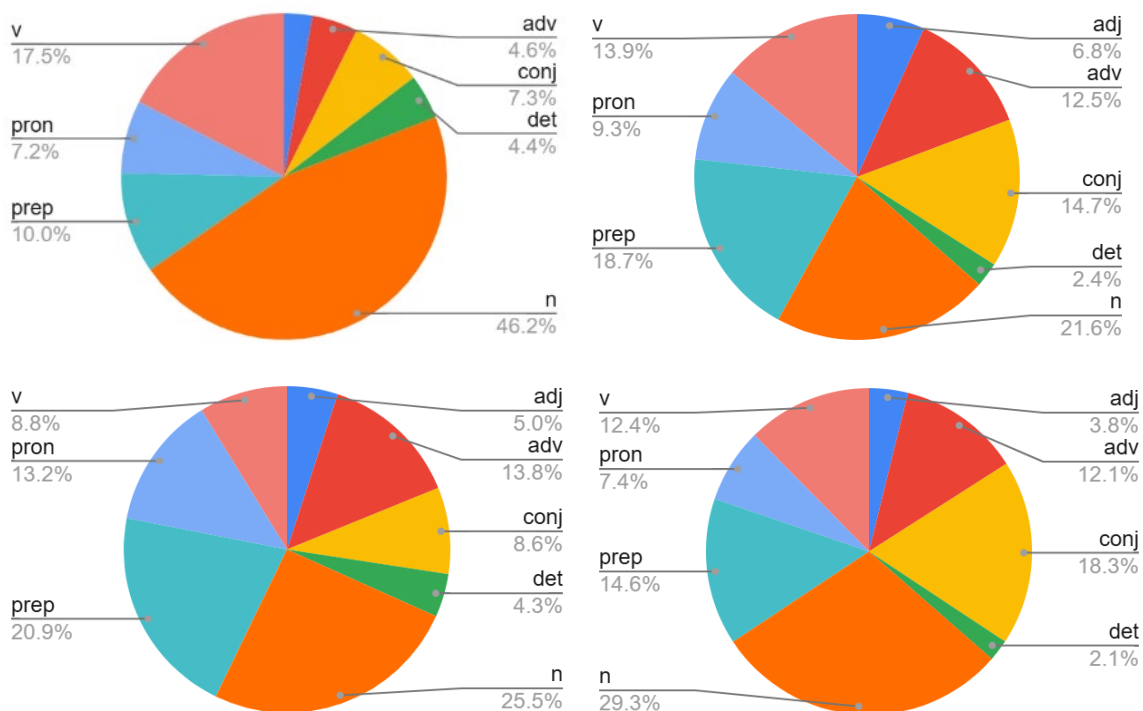
	Tingkat 1			Tingkat 2			Tingkat 3			Tingkat 4		
	Kata	Frek.	%	Kata	Frek.	%	Kata	Frek.	%	Kata	Frek.	%
1	saya	2.565	6,98	saya	3.930	3,96	saya	1.270	3,95	saya	314	5,01
2	di	1.716	4,67	di	3.547	3,58	dan	1.099	3,42	di	234	3,73
3	dia	1.599	4,35	dan	3.135	3,16	di	1.075	3,34	dan	188	3,00
4	dan	1.079	2,94	yang	2.561	2,58	yang	743	2,31	yang	105	1,67
5	jam	685	1,86	dia	1.807	1,82	itu	556	1,73	itu	101	1,61
6	ada	628	1,71	itu	1.655	1,67	ke	376	1,17	Indonesia	94	1,50
7	ke	505	1,37	ke	1.302	1,31	ada	370	1,15	dengan	91	1,45
8	dari	497	1,35	ini	1.166	1,18	ini	365	1,13	karena	83	1,32
9	[NAMA]	490	1,33	dengan	1.101	1,11	kami	362	1,13	tidak	73	1,16
10	nama	489	1,33	adalah	1.037	1,05	dengan	353	1,10	ke	71	1,13
11	tinggal	444	1,21	dari	830	0,84	untuk	329	1,02	Jepang	67	1,07
12	ini	370	1,01	ada	822	0,83	karena	280	0,87	adalah	57	0,91
13	makan	338	0,92	untuk	802	0,81	tidak	276	0,86	ini	55	0,88
14	pergi	336	0,91	banyak	782	0,79	adalah	274	0,85	untuk	55	0,88
15	ibu	306	0,83	Jepang	782	0,79	pada	260	0,81	orang	52	0,83
16	dengan	302	0,82	karena	776	0,78	sangat	251	0,78	ada	50	0,80

Tabel 6 berisi daftar kata berfrekuensi tinggi yang dikelompokkan menurut tingkat pemelajar. Kata yang paling banyak digunakan oleh pemelajar dari tingkat satu hingga empat adalah pronomina persona pertama tunggal ‘saya’. Tabel 6 menunjukkan perbedaan penggunaan kosakata dalam tulisan pemelajar tingkat satu dan pemelajar tingkat dua hingga empat. Pemelajar tingkat satu masih jarang menggunakan pronomina relatif ‘yang’. Sebaliknya, pemelajar tingkat dua hingga empat banyak menggunakan kata tersebut. Dapat dilihat dari Tabel 6 bahwa kata ‘yang’ menduduki peringkat keempat. Selain itu, kata ‘itu’ juga banyak digunakan oleh pemelajar tingkat dua hingga empat, tetapi jarang digunakan oleh pemelajar tingkat satu. Perbedaan lain yang dapat dilihat adalah penggunaan verba kopula ‘adalah’ dan konjungsi subordinatif ‘karena’. Verba ‘adalah’ dan konjungsi ‘karena’ mulai banyak digunakan dalam tulisan oleh pemelajar tingkat dua.

Pemelajar tingkat satu cenderung menggunakan banyak nomina dan verba dasar dalam tulisan mereka, misalnya ‘jam’, ‘nama’, ‘ibu’, ‘ada’, ‘tinggal’, ‘makan’, dan ‘pergi’. Pemelajar tingkat dua hingga empat lebih bervariasi dalam penggunaan nomina dan verba. Hal ini berhubungan dengan topik atau tema tulisan pemelajar. Tulisan pemelajar tingkat satu kebanyakan tentang pengenalan diri dan keluarga, sedangkan tulisan pemelajar tingkat dua ke atas topiknya lebih bervariasi. Kecenderungan pemilihan verba dan nomina ini juga dapat dilihat dari Gambar 1. Persentase kelas kata nomina (46,2%) dan verba (17,5%) pemelajar tingkat satu lebih besar daripada persentase kelas kata nomina dan verba pemelajar tingkat dua ke atas. Pemelajar tingkat dua ke atas lebih banyak menggunakan preposisi dan konjungsi, serta adjektiva

dan adverbial dibandingkan pemelajar tingkat satu. Mengenai penggunaan pronomina dan determinina, tidak ada perubahan yang signifikan antara pemelajar tingkat satu, dua, tiga, dan empat.

Pemilihan kata dan kelas kata dalam tulisan pemelajar ini tidak lepas dari topik tulisan pemelajar. Pemelajar tingkat satu yang topik tulisannya kebanyakan tentang pengenalan diri, keluarga, teman, rumah cenderung menggunakan banyak nomina, seperti nama orang, nama tempat, kata ‘nama’, dan kata-kata yang berhubungan dengan anggota keluarga, misalnya ‘ibu’, ‘ayah’, ‘kakak’, dan ‘adik’. Pemelajar tingkat dua ke atas yang tulisannya mengenai kesan dan pendapat pribadi, naskah pidato, dan pendahuluan makalah cenderung menggunakan lebih banyak preposisi dan konjungsi serta adjektiva dan adverbial. Selain itu, pemilihan nomina dan verba pun lebih bervariasi.



Gambar 1. Persentase Kelas Kata 100 Kata Berfrekuensi Tinggi Pemelajar Tingkat Satu (kiri atas), Tingkat Dua (kanan atas), Tingkat Tiga (kiri bawah), dan Tingkat Empat (kanan bawah) (v=verba, n=nomina, adj=adjektiva, adv=adverbial, pron=pronomina, prep=preposisi, det=determinina, conj=konjungsi)

4. Simpulan

Penulis menggunakan Korpus Pemelajar Bahasa Indonesia Beranotasi Error (Koper) untuk menganalisis kecenderungan penggunaan kosakata dalam tulisan pemelajar BIPA di tujuh universitas di Jepang selama April 2023 hingga Maret 2024. Kata berfrekuensi tinggi dalam tulisan pemelajar BIPA memiliki kesamaan dengan kata berfrekuensi tinggi dalam korpus bahasa Indonesia secara umum dan korpus percakapan BIPA. Tulisan pemelajar BIPA memiliki ciri khas ragam tulis formal dan banyak menggunakan pronomina persona pertama tunggal ‘saya’. Hal ini tidak lepas dari tema atau topik tulisan pemelajar BIPA yang kebanyakan mengenai pengenalan diri, keluarga, kesan dan opini pribadi, dan sebagainya. Pemelajar BIPA pemula (tingkat satu) lebih banyak menggunakan nomina dan verba dasar

dalam tulisannya, sedangkan pemelajar BIPA tingkat menengah hingga lanjut (tingkat dua ke atas) menggunakan lebih banyak variasi nomina dan verba, serta lebih banyak konjungsi (terutama konjungsi subordinatif ‘karena’), preposisi, pronomina relatif ‘yang’, pronomina/determina ‘itu’, dan verba kopula ‘adalah’. Selain karena meningkatnya jumlah dan variasi kosakata yang dipelajari oleh pemelajar BIPA tingkat dua ke atas, tema atau topik tulisan juga memengaruhi penggunaan kosakata dalam tulisan pemelajar. Pemelajar tingkat satu lebih banyak menulis tentang pengenalan diri, keluarga, teman, dan rumah yang cenderung lebih banyak menggunakan nomina seperti nama orang dan tempat serta kosakata yang berhubungan dengan anggota keluarga. Pemelajar tingkat dua ke atas lebih banyak menulis tentang kesan dan opini pribadi sehingga konjungsi dan preposisi serta variasi nomina, verba, adjektiva, dan adverbial lebih banyak digunakan. Hasil penelitian ini diharapkan dapat berguna bagi pengajaran BIPA dan pengembangan materi ajar BIPA.

Ucapan Terima Kasih

Terima kasih kepada semua kontributor data, anotator, penginput data, dan tim teknis yang telah membantu dalam penelitian ini. Penelitian ini didanai oleh JSPS Kakenhi Nomor 23K12235 (April 2023—Maret 2026).

Daftar Pustaka

- Anthony, L. (2024). AntConc (Versi 4.3.1) [Perangkat lunak].
<https://www.laurenceanthony.net/software/antconc/>
- Eckart, T. dan U. Quasthoff. (2013) Statistical Corpus and Language Comparison on Comparable Corpora. Dalam *Building and Using Comparable Corpora*. Springer-Verlag Berlin Heidelberg.
- Markus, I.M., Hananto, dan Kurnia, N. (2011). *Vocabulary in BIPA course-books and the frequency-based Indonesian word lists*. Atma Jaya Conference on Corpus Studies (Concorps). Jakarta: Unika Atma Jaya.
- Muhadjir dkk. (1996). *Frekuensi Kosakata Bahasa Indonesia*. Depok: Fakultas Sastra Universitas Indonesia.
- Purwiyanti, Y., Suwandi, S., dan Andayani, N. (2017). Strategi Komunikasi Pemelajar Bahasa Indonesia bagi Penutur Asing Asal Filipina. *Ranah: Jurnal Kajian Bahasa*, 6(2), 160.
- Sánchez Gutiérrez, C. H., Serrano, M. P., dan García, P. R. (2019). The effects of word frequency and typographical enhancement on incidental vocabulary learning in reading. *Journal of Spanish Language Teaching*, 6(1), 14-31.
- Siagian, E. N. (2020). Kata Berfrekuensi Tinggi dalam Pembelajaran BIPA Pemula. *Ranah: Jurnal Kajian Bahasa*, 9(2), 188-201.

インドネシアにおけるカルティニ批判の原因の考察
An Analysis of the Causes of Criticism Against Kartini in Indonesia
ミヤ・ドウイ・ロスティカ（大東文化大学）
Mya Dwi Rostika (Daito Bunka University)

Abstract

Raden Ajeng Kartini was recognized as the first female National Hero in 1964, and her birthday has been celebrated as “Kartini Day”. However, in recent years, her heroism has been subject to criticism, with divided opinions regarding her legacy. Some argue that Kartini lacked significant achievements compared to other female figures who actively resisted Dutch colonial rule.

However, this perspective ignores the fact that the criteria for hero recognition have evolved over time. Additionally, a major factor contributing to the misunderstanding of Kartini’s character is the fragmentation of information during the editing process of her collected letters. The Indonesian translations largely omitted these crucial aspects, making it difficult for many Indonesians to fully understand her original thoughts and intentions. This editorial process caused widespread misconceptions about Kartini.

The aim of this paper is to explore the origin of ongoing criticism of Kartini as a national hero, as well as its background, focusing on the shortcomings in information on true value and legacy. It is expected this paper will contribute to reconstruction of her full image and a precise evaluation of her contributions.

1. はじめに

インドネシアでは国民統合を目的に国家の独立と発展に貢献する者に対して英雄制度が設けられている。この英雄制度は 1959 年に始まったが、それ以前の 1950 年に「英雄の日」(Hari Pahlawan) が制定されている。本稿で取り上げるカルティニ (R.A Kartini) は、他の 2 人の女性英雄と共に女性として初めて、1964 年に「国家独立英雄」(Pahlawan Kemerdekaan Nasional) として認定された。

さらに、カルティニの誕生日である 4 月 21 日は「カルティニの日」(女性解放の日) として祝われており、彼女がインドネシアの英雄の中でも特別な存在であることを示している。カルティニの日を祝うため、学校や政府機関、会社などではさまざまな行事が行われてきた。

しかし、近年のインドネシアでは、カルティニの日が近づくたびに、彼女の英雄としての評価をめぐって賛否両論が噴出する。2010 年 4 月 21 日付の『ジャカルタ・ポスト (Jakarta Post)』紙では、高校生が「カルティニはクバヤを着た伝統的な女性の象徴にすぎない」と発言したことが紹介された。さらに、同紙では「カルティニは悲劇的な人生を歩んだ R.M.A.A. ソスロニングラトの娘であり、一夫多妻制を批判していたものの、最終的には父の意向に従い結婚した」との指摘も掲載された [Yulianto 2010]。

特に批判的な意見として、「カルティニよりも独立戦争で戦った女性たちは多くいたため、オランダ支配を終わらせるという観点から見ると、カルティニの役割はそれほど大きくなかった

のではないか」との疑問が提起された¹。

インドネシア大学の社会学者 ハルシャ・バフティアル (Harsja W. Bachtiar) は「カルティニと我が社会における女性の役割 (Kartini dan Peran Wanita dalam Masyarakat Kita)」において、カルティニが生きた時代以前にオランダに対抗したアチェのスルタナ・サフィアトゥディン (Sultanah Safiatuddin) と、南スラウェシのシティ・アイシャ・ウェ・テリオレ (Siti Aisyah We Tenriolle) の二人を例に挙げ、カルティニの「英雄」性に疑問を投げかけた [Bachtiar 1979: 72-76]。これ以降、この論文を参考にしたカルティニ批判が展開されることとなる。

本稿では、インターネット記事や文献を中心に、インドネシアにおけるカルティニ批判の内容とその背景を探る。本研究は筆者のカルティニ研究の一部であり、カルティニとその思想のより完全な像を探る試みの端緒となる。

2. インドネシアにおけるカルティニの「英雄」性の問題

2.1. 英雄の概念の変容

1945 年に独立を宣言した多民族国家インドネシアにとって、国民形成 (Nation Building) は重要な課題であった。国家を支えるためには、国家誕生以前から存在していた多様な民族を統合する必要があった。そのため、国民統合の一手段として、国家に貢献した人物を「英雄」として称える制度が確立された。

1959 年、初代大統領スカルノは、インドネシアの独立運動に貢献した人物を「国家独立英雄 (Pahlawan Kemerdekaan Nasional)」として公式に顕彰する制度を制定した。国家独立英雄に関する規定に関しては「大統領決定 1957 年第 217 号 (Keputusan Presiden No. 217 Tahun 1957)」に定め、またその国家独立英雄の定義や認定方法などについては「大統領決定 1958 年第 241 号 (Keputusan Presiden No. 241 Tahun 1958)」に定めた。前者によれば、英雄認定方法としては閣僚会議で決定した提案を基に大統領が決定するという。また後者による国家独立英雄の定義は以下の通りである。

国家独立英雄とは生前、祖国愛に突き動かされ、インドネシアにおける植民地支配に抵抗し、国外からの敵に対抗する組織的活動を主導した者、あるいはインドネシアの独立闘争や発展に深く関わる政治、国政、社会経済、文化ないし科学の分野で顕著な功績があるものを意味する (訳文は山口他 [2017: 18] に従った。)

1959 年の最初に認定された英雄はアブドゥル・ムイス (Abdoel Moeis、1883-1959)、キ・ハジャール・デワントロ (Ki Hadjar Dewantoro、1889-1959)、スルヨプラノト (Surjopranoto、1871-1959) の 3 人であり、上記の国家独立英雄の定義通りいずれもインドネシアの独立に貢献した人物であった。

この時期にインドネシアは大統領に強い権限を与える指導民主主義 (Demokrasi Terpimpin、1959-1964) を採用し、英雄認定に対する大統領の決定権も強くなった。後に、「大統領決定 1958 年第 241 号」に代わり、国家独立英雄の認定方法に関する法律「大統領決定 1963 年第 228 号」が発令された。

¹ Manado Post 2012 年 4 月 22 日 “Seharusnya Maramis Bukan Kartini”

「大統領決定 1963 年第 228 号」1 章第 2 条において「国家独立英雄の認定はインドネシア共和国の大統領によって決定される」、つまり今までの閣僚会議で決定した提案を基に大統領が決定するという認定方法から大統領が決定する認定方法となった。第 2 章第 3 条では、国家独立英雄を決定するために、当該人物の調査を「提案委員会 (Panitia Pengusul)」が行うことが定められた。

1964 年、英雄の決定、表彰、育成に関する「大統領規則 1964 年第 33 号 (Peraturan Presiden No. 33 Tahun 1964)」が発令された。この大統領規則により、「国家独立英雄 (Pahlawan Kemerdekaan Nasional)」という名称は「英雄 (Pahlawan)」へと変更された²。第 1 章 1 条では英雄という概念はこう規定されている。

- a. 国家と国民を守るための闘争に尽力し、十分な質と価値を持った英雄的な行動により殉死または逝去したインドネシア共和国の国民。
- b. 国家と国民を守る闘争において、自らの貢献と犠牲を十分に証明する英雄的行為を遂行し、その後の生涯においても闘争の価値を損なうようないかなる行為によっても汚されていない、現在も生存しているインドネシア共和国の国民。

つまり、1964 年からは「英雄」の対象は、「植民地支配に抵抗する」あるいは「インドネシアの独立闘争」に貢献した者に限らず、「国民国家を守る」ために貢献があった者へと広げられた³。

スカルノ政権下 (1945-1967)⁴ではジャワ出身の英雄が多かったが、スハルト政権下 (1968-1998)⁵に代わると他地域からの英雄が多く選出された⁶。スハルト政権下において英雄に認定されたのは 55 人であり、うち 27 人がジャワ人出身の英雄であった。

1998 年以降のポストスハルト期では、「英雄の日」の前後に英雄が認定されるようになった。この時期に「法律 2009 年第 20 号 (Undang-undang No. 20 Tahun 2009)」、その後「政府規則 2010 年第 35 号 (Peraturan Pemerintah No. 35 Tahun 2010)」が発令された。前者の第 3 章 1 部 4 条、及び後者の第 2 章 1 部 2 条で、英雄の称号が「国家英雄 (Pahlawan Nasional)」と定められた。また、ポストスハルト政権下における民主化とそれに伴う脱中央集権化により、地方が英雄候補を決定する権限を持つようになり、より多様な地域から英雄が認定されるようになった。

² Keputusan Presiden Republik Indonesia 108 Tahun 1964 (大統領規則 1964 年第 33 号) の第 1 章 1 条参照。

³ Peraturan Menteri Sosial Nomor 15 Tahun 2012 (社会大臣規則 2012 年第 15 号) によると、現在は「生存者」は対象になっていない。

⁴ スカルノ政権下における英雄認定は 1956～1966 年に行われた。1966 年 12 月 1 日付 Keputusan Presiden Nomor 252 Tahun 1966 (大統領決定 1966 年第 252 号) によるデウィ・サルティカの英雄認定が、スカルノが最後に認定したことを確認できた。ただし、同年 3 月にはスカルノは実権を失っており、実際の英雄認定過程については不明である。

⁵ スハルト政権下における英雄認定は 1968～1997 年に行われた。

⁶ スカルノ政権では、49 人の英雄が認定され、うち 37 人がジャワ出身の英雄であった。他の 12 名の英雄の出身はスマトラ 10 人、マルクとスラウェシ出身がそれぞれ 1 人。インドネシア国家英雄一覧 [山口ほか 2017:50-51] 参照。

1959 年最初に「英雄」が決定されて以来、2023 年⁷までに 206 人⁸の英雄が決定された。スカルノ政権時代に認定された英雄は 49 人であり、そのうち 37 人（約 4 分の 3）がジャワ人であった。一方、スハルト政権では 55 人の英雄が認定されたが、そのうちジャワ人は 27 人に減少し、割合としては半数程度にまで下がった。2012 年以降、新しく設立された州⁹を除き、すべての州から少なくとも 1 人の英雄が認定されている。特に、にジョコ・ウィドド政権（2014～2024 年）において、それまで英雄がなかった州からも英雄が認定された。これは、地方建設を重視するジョコ・ウィドド大統領の方針の現れと考えられる。それでも、206 人の英雄の出身を見ると、ジャワ島出身の英雄は 103 人と半分を占めており、スハルト政権の時代と同様に依然として多い。

表 1 インドネシアにおける英雄の数

政権	認定年	ジャワ島出身			ジャワ島外出身			合計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
スカルノ	1959-1966	35	2	37	10	2	12	45	4	49
スハルト	1968-1997	24	3	27	25	3	28	49	6	55
ポストスハルト	1998-2004	38	1	39	58	5	63	96	6	102
		97	6	103	93	10	103	190	16	206

出典：山口ほか [2017: 46-50]、Kuswantoro [2023] を参考に作成。

2.2. カルティニの英雄化とインドネシアにおける位置づけ

スカルノが最初の英雄を認定してから 5 年後の 1964 年 5 月 2 日付の「大統領決定第 108 号（Keputusan Presiden No. 108 Tahun 1964）」によって、カルティニを「国家独立英雄」¹⁰として認定した。インドネシアでは、カルティニは「女性解放英雄（Pahlawan Emansipasi Wanita）」としても知られている [Lahitani, 2024]。

同年 8 月 3 日には、スマランでカルティニを国家独立英雄に列する式典が開催された。しかし、カルティニの息子である R.M.スサリット（R.M. Soesalit）はすでに 1962 年に死去していたため、唯一の孫である R.M.ブディ・スティア・スサリット（R.M. Boedhy Setia Soesalit, 1933-1990）と、カルティニの妹であるカルディナー（Kardinah）に決定書が授与された [Soeroto 2001: 394, スロト 1982 : 357]。

一方で、カルティニが英雄に認定される以前から、すでに彼女の評価が確立されていたことは様々な面から確認できる。例えば、1950 年代には彼女のポスターが販売され¹¹、また、1953

⁷ 本論文執筆時点では、2024 年度の英雄はまだ報告されていない。

⁸ 山口ほか 2017: 46-50、および Kuswantoro, 2023 を参照。

⁹ 2012 年に北カリマンタン州、2022 年には中パプア州、南パプア州、山岳パプア州、南西パプア州が設立された。

¹⁰ 大統領規則 1964 年第 33 号は 1964 年 9 月の発令であるため、それ以前に英雄に認定されたカルティニカルティニはまだ「国家独立英雄」として認定されている。

¹¹ Tempo 1950 年 4 月 21 日 22 ページの広告では、国家英雄（まだ公式の称号ではない）のポスターが販売されているが、唯一の女性としてカルティニとして取り上げられている。

年には英雄の日の祝賀式典で唯一の女性英雄としても紹介された [Lombard 2005: 243]。また 1929 年 12 月 22 日行われた第 1 回のインドネシア女性会議の際には「我が母カルティニ (Ibu Kita Kartini)」という歌が、カルティニのムラユ訳の書簡集 (後述) を読んだインドネシア国歌の作曲者 W.R.スプラットマンによって作られ [Benjamin 2024]、後に学校や少年団などで必ず歌われるものとなった [Soeroto 2001: 394, スロト 1982 : 357]。さらに、彼女の肖像は、カルティニが英雄に認定される前の 1952 年に発行された 5 ルピア紙幣 (Rp 5) や、1985 年発行の 1 万ルピア紙幣 (Rp 10.000) にも描かれた。

彼女の誕生日である 4 月 21 日は「カルティニの日」として祝日とされ、全国各地で記念行事が開催されている。このカルティニの日もカルティニが英雄に認定されてから祝されたわけではなかった。

Novena dan Dewi [2022] によれば、カルティニの記念日 (*Kartinidag*、カルティニの日) は、インドネシア独立前からすでに祝われていた。初めて実施されたのは 1918 年であり、カルティニ財団が全カルティニ学校の管理者を招待して開催した。その後、オランダ植民地時代が終わるまで、毎年カルティニの記念日は継続して実施されていた。同記事は、独立後 1947 年 4 月 21 日に再び大規模に開催されたカルティニの記念日は、日本軍政下では一時的に中止されていた、と記している。しかし、筆者の調査¹²では日本軍政下においてもカルティニの日の祝賀行事が、継続され、婦人会などの社会的貢献活動と結びつけられていたことが明らかになった。

1980 年代後半から 90 年代にかけて小中高の教育を受けた筆者自身の経験でも、カルティニの日には学校で授業はなく、伝統衣装を着て登校し、料理大会などのイベントが開催され、多くのプレゼントが用意されたりした。このような行事の開催はオランダ植民地時代から、日本軍政期、独立後、そして現在まで連綿と受け継がれてきている。

2.3. カルティニの英雄論争とその原因

第 1 節で概観したように、植民地からその貢献を認められ、スカルノ政権下では国家独立英雄に認定されたカルティニではあったが、既述のように近年ではその英雄性に疑問が投げ掛けられることも多い。実際には、カルティニへの批判は 1970 年代にまで遡ることができる。

2.3.1. ハルシャ・バフティアルによるカルティニ批判

現在まで続く、英雄としてのカルティニへの批判の先鞭を付けたのは、社会史を専門とするインドネシア大学教授ハルシャ・バフティアル (Harsja W. Bachtiar)¹³だった。

カルティニ生誕百周年を記念して出版された『カルティニの一世紀』の一章「カルティニと我が社会における女性の役割 (*Kartini dan Peran Wanita dalam Masyarakat Kita*)」と題する論考で、彼はカルティニが生きた時代以前もリーダーとして最高の地位や権威、権力を得た女性はいたという。具体的には、オランダに対抗したアチェのスルタナ・サフィアトゥディン (*Sultanah Safiatuddin*)¹⁴と、南スラウェシのシティ・アイシャ・ウェ・テリオレ (*Siti Aisyah We Tenriolle*)

¹² 「「カルティニの日」の起源—日本軍政下におけるカルティニ像の利用と流布—」『大東アジア学論集』第 25 号に掲載予定。

¹³ 引用書が出版された 1983 年 (第 3 版) にはインドネシア大学の歴史学科長であった。

¹⁴ スルタナ・サフィアトゥディンは 17 世紀のアチェ王国の女王 (在位 1641~1675) であった。彼女の治世

¹⁵である [Bachtiar 1983: 60]。

さらに、バフティアルは、カルティニを原住民女性の代表として、そして進歩的な女性として選出したのはオランダ人だったと指摘している。つまり、カルティニに与えられた女性解放者としての評価は、インドネシア自身が自発的に作り出したものではなく、オランダから継承されたものでしかないということだ [Bachtiar 1983: 67]。

バフティアルによれば、一般的にオランダの著作に頻繁に登場するインドネシア女性像がよく知られている。その一つは、当時のオランダが目指した価値観に沿った考え方や活動を展開した女性である。例えば、カルティニと並んで、オランダから注目された女性として挙げられているのは、西ジャワ出身のデウィ・サルティカ (Dewi Sartika, 1884–1947 年) や、北スマトラのミナハサ出身のマリア・ワランダ (Maria Walanda Maramis, 1872–1924 年) である。第二に、アチェ出身のチュ・ニャ・ディンおよびチュ・ニャ・ムティア、さらに中ジャワのニヤイ・アゲン・セラシ (R.A Nyai Ageng Serang) やマルクのマルタ・クリスティナ・ティアハフ (Martha Christina Tiahahu) といった、オランダに抵抗し戦った女性についても言及している [Bachtiar 1983: 67–68]。ちなみに、これらの女性たちは、1971 年までに女性英雄として認定されたという共通点がある (表 2 参照)。

このように、バフティアルは、これらの女性像がオランダの著作に登場して以来、インドネシア人が彼女たちに注目し、インドネシアの女性像として称賛するようになったと論じている。

さらに、バフティアルは前述のように、アチェ出身のスルタナ・スリ・ラトゥ・タジュル・アラム・サフィアトゥディン・ジョハン・ブルダウラット (Sultanah Seri Ratu Tajul Alam Safiatuddin Johan Berdaulat) や、南スラウェシ出身のシティ・アイシャ・ウェ・テンリオレ (Siti Aisyah We Tenriolle) という二人の偉大な女性を例に挙げ、「なぜカルティニがインドネシア女性の進歩の象徴とされなければならないのか」と穏やかに疑問を投げた。

2.3.2. ティアル・アンワル・バフティアルによるカルティニ批判

ハルシャ・バフティアルの論文は、他の研究者によって引用され、同工異曲のカルティニ批判が繰り返されることになる。

ティアル・アンワル・バクティアル (Tiar Anwar Bachtiar) ¹⁶も、カルティニの英雄認定に対して批判的な立場を取る人物の一人である。彼は、2009 年 4 月 9 日付の *Islamia* ジャーナル ¹⁷において、ハルシャ・バフティアルの論文を引用しながら、オランダ人であるアベンダノンが編集したカルティニの書簡集によって、カルティニがその時代の進歩的な思想家として位置づけられたと指摘している。

下で法律、文学、及び科学が発展した。また、彼女の働きにより、オランダ東インド会社はアチェにおける錫取引の独占権を獲得できなかった。[Bachtiar 1983: 61]

¹⁵ シティ・アイシャ・ウェ・テリオレは南スラウェシのタネテ (Tanete) 王国の女王 (在位 1855-1910) である。政治分野だけでなく文学の分野でも優秀な女性指導者であった。彼女の治世下で 1908 年ではテナテで初の学校が開かれた。[Bachtiar 1983: 62-63]

¹⁶ イスラム歴史の研究者で、2014 年からペルシスガルトイスラム科学大学 (Sekolah Tinggi Agama Islam PERSIS Garut) に教員として在籍している。

¹⁷ Jurnal Islamia edisi 9 April 2009 “Mengapa Harus Kartini?”

さらに彼は、インドネシアの歴史において重要な役割を果たした女性は他にも多く存在すると述べ、カルティニは思想の面で貢献したものの、デウィ・サルティカやロハナ・クドゥス（Rohana Kuddus、1884-1972）は、実際に行動し、それぞれ女子学校を設立したことを強調した。

2.3.3. カルティニ批判の特徴と根拠

インドネシアにおけるカルティニ批判の多くは、上記の2名、ハルシャ・バフティアルとティアル・アンワル・バフティアルによるものであった。二人が展開したカルティニ批判の特徴と根拠は以下のように整理できる。

1. カルティニにおける英雄認定理由について

英雄としてのカルティニの功績は、しばしば他の女性英雄と比較され、貢献が少ないと指摘される。この問題の背景には、インドネシアにおける英雄認定の基準の変遷にあると考えられる。1959年に制定された「国家独立英雄」は、主に独立運動に貢献した人物を対象としていた。しかし、カルティニが英雄に認定された1964年以降、その対象は独立運動に限定されず、より広範な分野で功績を残した人物も英雄として認定されるようになった。

したがって、冒頭で指摘した問題に関しても、英雄とは必ずしもオランダと戦った人物に限られるものではなく、さまざまな功績を持つ人物が英雄と認められることは、決して不自然ではない。

カルティニが英雄として認定されたのは、オランダに対して武器を持って戦ったからではなく、当時まだ文章を書くという習慣が広まっていなかったインドネシアにおいて、彼女がジャワのさまざまな問題、特に女性に関する問題について伝統の枠を越えて考え、その思想を書き残したことによるものである。そして、そのカルティニの書簡集は翻訳され、多くの人々に影響を与えたからに他ならない〔Soebandio 1983:12-13〕。

また、ワルディマン・ジョヨヌゴロ〔Djojonegoro 2024a: 6, 10〕はカルティニを女性運動の先駆者と評価した。彼女はフェミニズムに関する文献を読み、ヨーロッパのフェミニズム思想に影響されたフェミニストであるという見方もある。

2. インドネシアにおけるジャワ島外の女性英雄の認定について

2023年までに認定された206人の英雄のうち、女性英雄は16人である。そのうち、ジャワ出身の女性英雄は6人（表2参照）であり、全体の半数以下にとどまる。カルティニは、アチェ出身の女性英雄であるチュッ・ニャッ・ディン（Cut Nyak Dhien、1850-1908年）およびチュッ・ニャッ・ムティア（Cut Nyak Meutia、1870-1910年）とともに、初めて認定された女性英雄である。

バフティアルがジャワ島外出身のスルタナ・サフィアトゥディンや、南スラウェシ出身のシティ・アイシャ・ウェ・テンリオレーという二人の偉大な女性を例に挙げた背景には、国家と国民に貢献したジャワ以外の地域の女性の役割を強調したいという考え方があるようだ。実際、彼はアチェ、タバヌリ、西ジャワ、南スラウェシ、北スラウェシ、マルク、東ヌサトゥンガラなど、あらゆる地域で貢献した女性を研究する必要があると指摘している〔Bachtiar 1983: 69〕。

しかし、表2に示されるように、1979年、つまりバフティアルの論文が掲載されたカルティニの100周年の本が出版されるまでに、9人の女性英雄のうちジャワ出身の女性英雄は4人

であり、半数以下であったことがわかる。これは、インドネシアにおける女性英雄の選定が必ずしもジャワ人中心主義によるものではないことを示している。さらに、バフティアルが挙げた上記の地域名からも、ほぼ全ての地域の女性英雄が選定されていることもわかる。例えば、アチェからは2名、西ジャワから1名、北スラウェシから1名、そしてマルクから1名が選ばれている。

表 2 インドネシアにおける女性英雄

	名前	認定年	出身地
1	Raden Ajeng Kartini	1964	中ジャワ
2	Cut Nyak Dhien	1964	アチェ
3	Cut Nyak Meutia	1964	アチェ
4	Raden Dewi Sartika	1966	西ジャワ
5	Maria Walanda Maramis	1969	北スラウェシ
6	Martha Christina Tiahahu	1969	マルク
7	Siti Walidah (Nyai Ahmad Dahlan)	1971	ジョグジャカルタ
8	Nyi Ageng Serang	1974	ジョグジャカルタ
9	Hj. Rangkayo Rasuna Said	1974	西スマトラ
10	Fatmawati Soekarno	1980	ブンクル
11	Fatimah Siti Hartinah Soeharto	1996	中ジャワ
12	Opu Daeng Risadju	2006	南スラウェシ
13	Malahayati	2017	アチェ
14	Andi Depu Maraddia Balanipa	2018	西スラウェシ
15	Rohana Kudus	2019	西スマトラ
16	Ratu Kalinyamat	2023	中ジャワ

以上のように、ハルシャ・バフティアルとティアル・アンワル・バフティアルのカルティニ批判は的を射ないものである。しかし、同様の批判が現在まで繰り返される一因は、カルティニに対するイメージが歪んでいる、あるいは彼女についての知識が一般に不足しているからと考えられる。プラムディヤ・アナンタ・トゥール [Toer 2003: 12] が指摘するように、インドネシア人のカルティニに対する知識不足により、彼女に関する誤ったイメージが生み出されているのだ。

3. インドネシアにおけるカルティニのインドネシア語書簡集問題

インドネシアにおけるカルティニ像がどのように形成されたのかについては、インドネシア人が読むカルティニの書簡集が大きく関わっていると考えられる。カルティニの考えや思想が書簡として残されているため、どのようなインドネシア語の書簡集が国内に流通し、インドネシア人に参照されてきたかによって、カルティニ像は変化していくと考えられる。

3.1. 言語（オランダ語）による書簡集の問題

カルティニは、1899年から1904年に亡くなる直前までの約6年間にわたり、13名の個人お

よび3組のオランダ人夫妻と文通を重ねた。これらの書簡は、彼女の死後、カルティニ学校の設立の資金のために出版された [Kartini 1912: X]。こうして *Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini*（闇を通して光へー故ラデン・アジェン・カルティニのジャワ人についての、ジャワ人のための思想）と題されたカルティニの書簡集は1911年に原文のオランダ語で出版された（以降はこれを1911年版と表記する）。この版はオランダ植民地時代に4版、独立後の1976年に第5版が出版された。また、1987年には後述するように、より多くの書簡を収録した書簡集が出版された（表3）。

表3 言語（オランダ語）版書簡集

1911年	<i>Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini</i>（闇を通して光へー故ラデン・アジェン・カルティニのジャワ人についての、ジャワ人のための思想） 初版（1911年、583ページ）1000部刊行 第2版（1912年、371ページ）3000部刊行 第3版（1912年、371ページ）4000部刊行 第4版（1923年、410ページ）3000部刊行 第5版（1976年、468ページ）部数不明 以降は1911年版と称する。
1987年	<i>Kartini: Brieven aan mevrouw R.M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot met andere documenten</i>（カルティニ：R.M. アベンダノン-マンドゥリ夫妻との書簡および他の資料集） 以降は1987年版と称する。

出典：[Kartini 1987: IX, XIV; 富永 2019: 302; Kartini 2024: 12-13]

1911年版のカルティニの書簡集には、1899年から1904年にかけて10人に宛てた95通の書簡が収録された。しかし、この1911年版にはすべてのカルティニの書簡が掲載されたわけではなく、アベンダノンによる編集を経た書簡の引用であった [Kartini. 2022: XI, 2024: XI]。

この点についてプラムディヤ [Toer 2003: 231-233] は、アベンダノンによる編集を「単独の仕事 (one man business)」と呼び、インドネシア側からの助言や配慮を求めることなく行われたと指摘している。また、1911年版の内容は主に教育・教え・女性・道徳に限定されていた。アベンダノンは、重要かつ適切と判断した部分のみを選び、特定のタイトルのもとにまとめた。つまり、1911年版はアベンダノンによって作られたカルティニの思考の枠組みであるといえる

スロト [Soeroto 2001: 377] は、1911年版の書簡集の出版目的がカルティニ学校の建設資金を集めることであったため、意図的に省略された部分があったと理解している。アベンダノンはオランダ人から寄付金を集めるため、オランダ人が関心を持ちやすい項目を強調し、同情を得る必要があった。そのため、オランダ人はカルティニを、自国の植民地における教育の成功例と見なした [Toer 2003: 12, 237]。

一方、1987年版の書簡集には新たに発見された書簡を含め、合計150通の書簡が収録された。その内訳は、カルティニの書簡が108通（うち3通は姉妹との連名）、その他の書簡が42通で

ある¹⁸ [Kartini 1987: XIII]。1987 年版には、1900 年から 1904 年にかけてアベンダノン一家に宛てたカルティニ、姉妹、父、主人が含まれている [Kartini 2022: XI, 2024: XI]。

1987 年版が出版されるまでは、どの部分が省略されたのかはオリジナルの書簡を読んだ人物にしか分からなかった。1978 年にインドネシア語版を翻訳したストリスノ [Sutrisno 2000: X-XII] によれば、1911 年版ではカルティニとアベンダノン家との親密な関係を示す表現や、アヘン独占問題のようなオランダ政府の政治政策に関する記述が省略されていた。

富永 [2019: 16-17] は、1911 年版と 1987 年版の書簡を比較し、アベンダノンによる「切り貼り」編集が行われていたことを詳細に記述している。1987 年版では、カルティニのプライベートな書簡や、彼女が見た社会の矛盾、個人的な経験に関する記述が省略されることなく全文掲載された。また、アベンダノン夫人およびアベンダノン氏の両方に宛てた書簡について、1911 年版で削除された比率は 7 割以上であると富永は述べている。

表 4 カルティニ書簡集におけるオリジナルからの削除率

1900 年分書簡 (8 月から)	削除比率 6 割
1901 年分書簡	削除比率 8 割
1902 年分書簡	削除比率 8 割
1903 年分書簡	削除比率 8 割
1904 年分書簡 (9 月まで)	削除比率 7 割

出典：富永泰代 [2019:17]

3.2. 書簡集の翻訳

上記で述べたように、オランダ語の原文によるカルティニの書簡集は、オランダ人読者向けに作られたものであった。当時のインドネシア（オランダ領東インド）における読者は、オランダ語を理解するごく少数の知識人、エリートに限られていた。

一方で、カルティニの書簡集は次第にオランダから様々な言語に翻訳された。特に、より広い読者に向けた現地語の翻訳書はかなり早くから出版されていた。以下は、インドネシア国内に流通しているカルティニの書簡集である（表 5；表 6）。

表 5 1911 年版を基に翻訳された書簡集

1922 年	ムラユ語 Saudara, Empat, trans. 1922. <i>Habis Gelap Terbitlah Terang; Boeah Pikiran</i> . Weltevreden: Balai Pustaka.
1930 年	スンダ語 Satjadibrata, R, trans. 1930. <i>Ti noe poek ka noe tjaang; Sesehatan Raden Ajeng Kartini</i> . Weltevreden: Balai Poestaka.
1938 年	ジャワ語

¹⁸ カルティニによる書簡はアベンダノン夫人宛ての書簡が 95 通、アベンダノン宛ては 8 通及び両方に宛てたのは 5 通である。他の書簡（カードを含む）は 40 通の姉妹による書簡、カルティニの父と夫による書簡はそれぞれ 1 通である。[Kartini 1987: XIII]

	Sasrasoegonda, R, trans. 1938. <i>Mboekak Pepeteng; Isi Pethikan saking serat-seratipun Raden Adjeng Kartini</i> . Soerabaja.
1938 年	インドネシア語 Pane, Armijn, trans. 1938. <i>Habis Gelap Terbitlah Terang</i> . Djakarta: Balai Poestaka, 1938. (2 版 : 1949 年、3 版 : 1951 年、4 版 : 1962 年、5 版 : 1963 年、6 版 : 1968 年 7 版 : 1972 年、8 版 : 1978 年、9 版 : 1979 年、10 版 : 1983 年、11 版 : 1985 年...、27 版 : 2009 年)
1979 年	インドネシア語 Sutrisno, Sulatin, trans. 1979. <i>Surat-surat Kartini; Renungan tentang dan untuk Bangsanya</i> . Jakarta: Djambatan. (2 版 : 1981 年、3 版 : 1985 年) 1911 年 4 版より翻訳された。

表 6 1987 年版を基に、あるいは 1911 年と 1987 年版書簡が収録された書簡集

1989 年	Sutrisno, Sulatin, trans. 1989. <i>Kartini: Surat-surat kepada Ny. R.M. Abendanon-Mandri dan suaminya</i> . Jakarta: Djambatan. (2 版 : 1992 年、3 版 : 2000 年)。 この書簡集は 1987 年版の Jacquet, F.G.P., ed. <i>Kartini: Brieven aan mevrouw R.M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot met andere documenten</i> より翻訳された。
1995 年	Yulianto, Ita Vissia (trans). 1995. <i>Aku Mau: Feminisme dan Nasionalisme</i> . Kompas. この書簡集はステラ宛ての書簡集であり、Cote, Joost (ed.trans). 1992. <i>Letters from Kartini, an Indonesia Feminist 1900-1904</i> より翻訳されている。
2022 年	Cote, Joost, trans. 2022. <i>Kartini: Surat-surat Lengkap dan Berbagai Catatan</i> . Jakarta: Elex Media Komputindo. この書簡集は 2014 年版の Cote, Joost, trans. <i>Kartini; The Complete Writings 1898-1904</i> より翻訳された。この書簡集は 1911 年版と 1987 年版の書簡が収容され、完全版と言ってよい。
2024 年	Djojonegoro, Wardiman, trans. 2024. <i>Kartini; Kumpulan Surat-surat 1899-1904</i> . Yayasan Pustaka Obor Indonesia. 以上の書簡集は 1911 年版と 1987 年版の両方の書簡が収録され、インドネシア人による翻訳の完全版である。

現在の主流なインドネシア語翻訳版が出版される前の 1922 年には、すでにムラユ語版が出版されている¹⁹。先述のスプラットマンが読んだのはこの版であろう。この書簡集は一度完売したものの、再販されず、需要も高かったため、1938 年にはパネ (Armijn Pane) による翻訳版が出版された。しかし、高価になりすぎないように、ムラユ語訳版よりも薄い冊子として出版された [Kartini. 1973: 5]。

¹⁹ インドネシア語は、1928 年 10 月 28 日の第 2 回青年会議で統一言語として認識され、1945 年憲法第 36 章によって正式に国語となる。

パネ翻訳版は、1911年版のカルティニの書簡集に基づいている。富永〔2019: 339-340〕はパネの翻訳版における問題を指摘している。先述のように、1987年版と比較すると、1911年版ではアベンダノン家宛ての手紙の約7割が削除されていた。しかし、パネ抄訳版では1911年版の内容からさらに3分の2が削除されており、1987年版と比較すると9割もの内容が省かれていることになる。また、原文にはない文が追加されたり、主語が変化したりするなど、原文の意味が異なる形に書き換えられた箇所もあった。

ムラユ語翻訳版は一度しか出版されなかったため、多くのインドネシア人はカルティニについて、主にこのパネ抄訳版を通じて知ることになった。つまり、カルティニの書簡集を読んだとしても、インドネシア人は彼女の書簡全体の、ひいては彼女の思想のわずか1割しか知ることができなかったのである。

3.3. カルティニの評伝

カルティニに言及する際、書簡集に並んでしばしば参照されるのが、彼女の評伝である。最後にカルティニの評伝について概観する。

表 7 主なカルティニの評伝

1962 年	Toer, Pramodya Ananta. 1962. <i>Panggil Aku Kartini Saja</i> . Nusantara. 第1版は2冊で、1962年に出版された。その後、2003年に Lentera Dipantara によって再版された。
1977 年	Soeroto, Sitisomandari. 1977. <i>Kartini Sebuah Biografi</i> . Gunung Agung. 第6版は新しく出版された書簡集を参考しながら、編集されたものである。

土屋〔2008: 152〕によれば、表7に挙げた2冊はインドネシアにおけるカルティ研究においてもっともすぐれて、現代においても最も多く引用されているカルティニの評伝である。プラムディヤによるカルティニの評伝は、80枚に及ぶ第一資料であるカルティニの書簡や彼女に係る資料によって作られた〔Toer 2003: 15〕。当初、伝記は4冊あったが、1965年の9月30日事件後、共産党支持者とみなされたプラムディヤは逮捕され、彼の自宅の破壊とともに第3巻と第4巻の原稿が失われた。そのため、出版されたのは1962年の第1巻と第2巻のみであった²⁰〔Toer 2003: 6〕。

二つ目は、スロトが執筆した伝記である。彼女は1964年にカルティニの妹であるカルディナーにインタビュー調査をし、1911年3版のカルティニ書簡集を引用していた。2001年第6版は1987年版の書簡集を参考に改訂された。スロトは、評伝において意図的にカルティニの書簡から多くの引用をした。その理由は、スロトが「カルティニの手紙を実際に読んだインドネシア人はほとんどいない」ことを知っていたためであった〔Soeroto 2001: VI-VIII〕。

スロトが指摘したことから推察されるように、パネ抄訳版は現代に至るまで、カルティニに対する誤った解釈を生み出す要因の一つとなっている。実際、21世紀の現在においても、カルティニの書簡に言及する際、パネによる翻訳に依拠されることがほとんどである。

また、プラムディヤ著の評伝は、優れているとはいえ、4冊内の2冊のみのため完全なもの

²⁰ 現本論文では1冊にまとめられて再版された Lentera Dipantara 出版の初版を参照している。

ではない。スロトによるカルティニの伝記はインドネシア人による国家独立英雄の伝記のため、少なからず主観的な部分があると彼女自身が述べている [Soeroto 2001: VIII]。そのような点で、これら評伝もカルティニの実像に近付くには、十分なものとは言えないだろう。

4. まとめ

インドネシアの女性として初めて 1964 年に「国家独立英雄」に列せられ、その誕生日が現在まで祝われているカルティニは、近年では、彼女の英雄性に対して異議が唱えられている。その批判は、ハルシャ・バフティアルによる論評を走りとし、以降、その論考が参照され、彼の議論が繰り返されることとなった。彼の提示した批判の根拠は十分な説得力を持つものではなかった。

彼の提示した第一の根拠は、独立闘争に実際に参加した他の地域の女性英雄たちと比較して、カルティニの功績が十分でなかったとする彼女の英雄としての資質への疑念だった。しかし、この疑念は英雄認定の基準の変遷を無視したものである。1959 年に制定された「国家独立英雄」は主に独立闘争に貢献した人物を対象としていたが、1964 年には英雄の対象はより広範な分野で国家と国民のために功績を残した人物も対象となったのである。

第二の根拠として、英雄認定におけるジャワ人あるいはジャワ出身者への偏重を挙げている。しかし、実際にその人数を確認すると、バフティアルの論文が出た 1979 年までで英雄として認定された女性のうちジャワ人は半数以下であり、ジャワ外の地域出身者が軽んぜられている訳ではなかった。

こうしたカルティニ批判が続く理由に、彼女の人物像がインドネシア社会で十分に理解されていないことが考えられ、その大きな原因が、彼女を知るための重要な手掛りである書簡集が抱える問題である。アベンダノンが編集し出版した 1911 年版では、大幅な編集が行われ、重要な思想や政治的見解が省略され、その結果、オリジナルの内容が十分に伝わらなくなった。さらに、インドネシア語翻訳版のパネ抄訳版は 1911 年版の内容からさらに 3 分の 2 が削除されており、つまり 1987 年版の 1 割しか収録していない。結果、インドネシア人によって良く引用されるパネ抄訳版は重要な部分が欠落しており、これが彼女の本来の意図や功績を正確に評価することを困難にしている。

インドネシア語のカルティニ伝記に関しても、プラムディヤやスロトによる伝記が存在するが、完全な形で出版されなかったり、または主観的な視点が含まれたりしているため、カルティニの全体像を正確に把握することが難しい。

こうしたカルティニに関する十分な情報が参照されないままになっていることが、誤った、あるいは一面的なカルティニ像を生み出す一因となっている。すなわち、インドネシアにおけるカルティニ批判の根底には、英雄認定制度の変容とともに、書簡集の編集・翻訳過程による情報の断片化があり、これがカルティニの真の功績や意義の伝達を妨げている。

今後は、既に入手可能となっている書簡など十分な資料や情報からカルティニという英雄の全体像を再構築し、それに基づいて彼女に対して正確な評価をすることが求められる。そして、その作業が筆者にとって、今後の課題である。

参考文献・資料

日本語文献

- 小林寧子 2018「国家・英雄・ジェンダー—カルティニ像の変遷」小泉順子（編）『歴史の生成—上叙述と沈黙のヒストリオグラフィー』 pp. 23-73。
- シテイスマンダリ・スロト、舟知恵・松田まゆみ訳 1982『民族意識の母カルティニ伝』井村文化事業社。
- 姫本由美子 2018「日本占領下インドネシアで読まれた刊行物—知識人とその他に分断された社会を映し出した鏡—」『アジア太平洋討究』 No. 34、pp. 167-212.
- 土屋健治 2008『カルティニの風景』 めこん。
- 富永泰代 2019『9『小さな学校—カルティニによるオランダ語書簡集—』教頭大学学術出版会。
- 山口裕子、金子正徳、津田浩司 2017「英雄大国インドネシア」山口裕子、金子正徳、津田浩司（編）『「国家英雄」が映すインドネシア』木犀社、pp. 8-50。

外国語文献

- Bachtiar, Harsja W. 1983 (1979). “Kartini dan Peran Wanita Masyarakat Kita” In *Satu Abad Kartini*, edited by Aristides Katoppo (ed.). 3rd ed. Jakarta: Sinar Harapan.
- Dennys Lombard. 2005. *Nusa Jawa Silang Budaya Bagian I: Batas-batas Pembaratan*. Gramedia Pustaka.
- Djojonegoro, Wardiman. 2024a. *Inspirasi Kartini dan Kesetaraan Gender Indonesia Jilid III*. Yayasan Pustaka Obor Indonesia.
- Kartini, R.A. 1912 (1911). *Door Duisternis Tot Licht: Gedachten Over en Voor Het Javaansche Volk van Wiljen Raden Adjeng Kartini*, Abendanon (ed.). 2nd ed. ‘s-Gravenhage.
- Kartini, R.A. 1972 (1938). *Habis Gelap Terbitlah Terang*,. Armyn Pane (trans.). 6th ed. Jakarta: Balai Pustaka.
- Kartini, R.A. 1978. *Kartini: Brieven aan mevrouw R.M. Abendanon-Mandri en haar echtgenoot met andere documenten*,. F.G.P.Jacquet (ed.). Foris Publications.
- Kartini, R.A. 1985 (1979). *Surat-surat Kartini Renungan Tentang dan untuk Bangsaanya*, Sulastin Sutrisno (trans.). 3rd ed. Penerbit Jambatan.
- Kartini, R.A. 1995. *Aku Mau: Feminisme dan Nasionalisme*. Ita Vissia Yulianto (trans.). Kompas.
- Kartini, R.A. 2014. *Kartini The Complete Writings 1898-1904*, Joost Cote (ed. and trans). Monash University Publishing.
- Kartini, R.A. 2000 (1989). *Kartini: Surat-surat kepada Ny. R.M. Abendanon-Mandri dan Suaminya*,. Sutrisno, Sulatin (trans.). 3rd ed. Djambatan.
- Kartini, R.A. 2022. *Kartini Surat-surat Lengkap dan Berbagai Catatan 1898-1904*, Amri Mahbub Alfathon (trans.). Kompas Gramedia.
- Kartini, R.A. 2024. *Kartini: Kumpulan Surat-surat 1899-1904 Jilid I*, Wardiman Djojonegoro, (ed. and trans.). Jilid I. Yayasan Pustaka Obor Indonesia.
- Soebadio, Haryati. 1983 (1979). “Peran Kartini untuk Masa Depan” In *Satu Abad Kartini*, edited by Aristides Katoppo (ed.). 3rd ed. Jakarta: Sinar Harapan.
- Soeroto, Sitisomandari. 2001. *Kartini Sebuah Biografi*. Penerbit Djambatan.
- Toer, Pramodya Ananta. 2003. *Panggil Aku Kartini Saja*. 1st ed. Lentera Dipantara.

新聞・雑誌記事

- Benjamin, Albert dan Febrian Purba. 2024. “Lirik dan Sejarah Lagu Ibu Kita Kartini Ciptaan WR Supratman.” *detikjatim*, 18 April 2024, <https://www.detik.com/jatim/berita/d-7297881/lirik-dan-sejarah-lagu-ibu-kita-kartini-ciptaan-wr-supratman> (viewed on 23 October 2024)
- Kuswantoro, Dimas. 2023. “47 Pahlawan Nasional Ditetapkan Jokowi Sejak 2014, Termasuk Kakek Anies Baswedan hingga Ratu Kalinyamat” *Tempo*. 13 November 2023. <https://www.tempo.co/politik/47-pahlawan-nasional-ditetapkan-jokowi-sejak-2014-termasuk-kakek-anies-baswedan-hingga-ratu-kalinyamat-121467> (viewed on 23 October 2024)
- Lahitani, Sulung. 2024. “Sejarah Hari Kartini, Pentingnya Mengenang Pahlawan Emansipasi Wanita Indonesia” *Liputan 6.com*, 21 April 2024, <https://www.liputan6.com/citizen6/read/5577755/sejarah-hari-kartini-pentingnya-mengenang-pahlawan-emansipasi-wanita-indonesia> (viewed on 23 October 2024)
- Novena, Monika dan Bestari Kumala Dewi. 2022. “Peringatan Kartini Usai Kepergiannya, dari Masa Kolonial ke Era Kemerdekaan.” *Kompas.com*, 21 April 2022, <https://www.kompas.com/sains/read/2022/04/21/193000823/peringatan-kartini-usai-kepergiannya-dari-masa-kolonial-ke-era-kemerdekaan?page=all> (viewed on 23 October 2024)
- Sofyan, Angga. 2011. “Mengapa Harus Kartini” *Kompasiana*. 20 Desember 2011, <https://www.kompasiana.com/anggasofyan/550b0dc3a33311bb102e3cbe/mengapa-harus-kartini> (viewed on 23 October 2024)
- Tempo No. 34 (21 April 1950)
- Yulianto, Vissia Ita. 2010. “Is celebrating Kartini’s Day still relevant today?” *Jakarta Post*. 21 April 2010.
- Waworundeng, Tommy. 2008. “Seharusnya Maramis, Bukan Kartini” *Manado Post*. 22 April 2008.

法令

- Keputusan Presiden Republik Indonesia Nomor 217 Tahun 1957 Tentang Pahlawan Kemerdekaan Nasional
- Keputusan Presiden Republik Indonesia Nomor 241 Tahun 1958 Tentang Tata Cara Penetapan Pahlawan Kemerdekaan Nasional
- Keputusan Presiden Republik Indonesia Nomor 228 Tahun 1963 tentang Peraturan Tata Cara Penetapan Pahlawan Kemerdekaan Nasional
- Keputusan Presiden Republik Indonesia Nomor 108 Tahun 1964 tentang Penetapan R.A. Kartini Sebagai Pahlawan Kemerdekaan Nasional
- Keputusan Presiden Nomor 252 Tahun 1966 tentang Penghargaan Kepada Saudari Raden Dewi Sartika Sebagai Pahlawan Kemerdekaan Nasional
- Peraturan Menteri Sosial Nomor 15 Tahun 2012 tentang Pengusulan Gelar Pahlawan Nasional
- Peraturan Pemerintah Nomor 35 Tahun 2010 tentang Pelaksanaan Undang-Undang Nomor 20 Tahun 2009 tentang Penerimaan Gelar Tanda Jasa dan Tanda Kehormatan
- Peraturan Presiden Republik Indonesia Nomor 33 Tahun 1964 Tentang Penetapan, Penghargaan dan Pembinaan Terhadap Pahlawan

Undang-undang Nomor 20 Tahun 2009 tentang Gelar, Tanda Jasa, dan Tanda Kehormatan

原オーストロネシア語のシュワーとスラウエシの諸語群における反映

**Pepet Protobahasa Austronesia dan Perwujudannya
dalam Kelompok Bahasa di Sulawesi**

山口真佐夫（摂南大学名誉教授）

Masao Yamaguchi (Profesor Emeritus Universitas Setsunan)

Abstrak

Di Pulau Sulawesi dan pulau-pulau sekitarnya (selanjutnya Sulawesi) terdapat sepuluh kelompok bahasa yang tergolong ke dalam cabang bahasa Melayu-Polinesia dari keluarga bahasa Austronesia. Di antara sepuluh kelompok bahasa tersebut, tiga kelompok bahasa berkaitan dengan bahasa di Filipina secara genealogis, yaitu kelompok bahasa Gorontalo-Mongondow, Sangir, dan Minahasa. Selain itu, kelompok bahasa Tomini-Tolitoli, Saluan-Banggai, Kaili-Pamona, Bungku-Tolaki, Muna-Buton, dan Wotu-Wolio tergolong ke dalam kelompok bahasa atas Selebes (*Celebic*). Dan ada lagi kelompok bahasa (atas) Sulawesi Selatan.

Penelitian ini diadakan berdasarkan metode komparatif untuk mendapatkan korespondensi fonem, yang dianggap pokok teori linguistik historis komparatif. Walaupun begitu, kekurangan data yang meliputi seluruh bahasa daerah di Sulawesi, sebagai tahap awal digunakan ketiga kata bilangan yang berasal dari protobahasa Austronesia yang terdapat *ə (pepet/*Schwa*) dalam bentuk rekonstruksinya, yaitu *təlu ‘tiga’, *(ə(m)pat ‘empat’, dan *(ə)nəm ‘enam’.

Perwujudan protofonem *ə dalam bahasa modern berbeda tergantung pada kelompok bahasanya. Dalam kelompok bahasa Sangir dan Minahasa diwujudkan sebagai ə/a. Dalam kelompok bahasa Gorontalo-Mongondow diwujudkan sebagai o. Dalam kelompok bahasa atas Selebes, pada dasarnya diwujudkan sebagai o. Akan tetapi, dalam kelompok bahasa Wotu-Wolio diwujudkan sebagai a. Dalam kelompok bahasa (atas) Sulawesi Selatan diwujudkan sebagai a. Hanya dalam bahasa Bugis saja, sebagian besar *ə diwujudkan sebagai ə.

Ada beberapa fenomena yang menonjol seperti dwipurwa pada bentuk rekonstruksi kata bilangan ‘tiga’, perwujudan tidak teratur pada bentuk rekonstruksi kata bilangan *(ə(m)pat ‘empat’, dan perwujudan *ə > u. Hal yang seperti itu dapat diterangkan berdasarkan proses analogi, asimilasi, metatesis, dan pematahan (*breaking*).

Menurut penelitian ini, dapat diterangkan silsilah genealogis kelompok bahasa di Sulawesi (kecuali ketiga kelompok bahasa yang berkaitan dengan bahasa di Filipina) secara historis. Yang pertama terpisah dengan induk adalah kelompok bahasa (atas) Sulawesi Selatan. Setelah itu, terpisah kelompok bahasa Wotu-Wolio dari protobahasa Selebes yang memperlihatkan perwujudan *ə > a. Setelah perpisahan itu, terjadi *ə > *a > *o dalam protobahasa Selebes. Oleh karena itu, pada dasarnya kelompok bahasa yang lain memperlihatkan *ə > a dan *ə > o.

1. はじめに

インドネシア共和国、スラウエシ島およびその周辺（以下：スラウエシ）には、外来の言語

を除いてオーストロネシア語族 (Austronesian) マレー・ポリネシア語派 (Malayo-Polynesian) に属する 10 語群の言語が分布している。

スラウェシに存在する言語の中で、ゴロンタロ・モンゴンドウ (Gorontalo-Mongondow) 語群を除くフィリピン系の語群には原オーストロネシア語の*ə に遡る ə が存在する。一方、非フィリピン系の諸語群に属する言語では、基本的に他の母音として現れている。

本稿は原オーストロネシア語の*ə が、現代語においてはどのような過程を経てどのように反映されているかを考察したものである。

2. スラウェシに存在する上位語群、語群の系統

ここでは、研究対象の語群がどのような系統になっているのかを概観した後に、スラウェシに存在する上位語群、語群について説明する。

2.1. スラウェシに存在する語群の系統

SIL による分類では次のようになる (SIL, 2025) ¹。1257 言語が含まれるオーストロネシア語族は、未分類を除いて 10 語派に分かれる。そして、その中に 1235 言語が含まれるマレー・ポリネシア語派が存在する ²。そして、上位語群に属さない 1 言語と未分類以外に 27 上位語群が存在する。その中のスラウェシにすべてまたは一部の言語が分布する上位語群としてセレベス (Celebic) (64)、ゴロンタロ・モンゴンドウ語群が含まれる大中央フィリピン語群 (Greater Central Philippine) (100)、ミナハサ (Minahasa) (5)、サンギル (Sangir) (5)、南スラウェシ (South Sulawesi) (30) がある ³。

2.2. スラウェシに存在する語群

スラウェシには上述のように概ね北からサンギル上位語群、ミナハサ上位語群、大中央フィリピン上位語群、セレベス上位語群、南スラウェシ (上位) 語群が分布している。本稿ではこれまでの研究に基づいて、スラウェシに存在する語群を、サンギル語群、ミナハサ語群、(大中央フィリピン上位語群に属する) ゴロンタロ・モンゴンドウ語群 (以上 3 語群はフィリピン系とする)、トミニ・トリトリ (Tomini-Tolitoli) 語群、サルアン・バンガイ (Saluan-Banggai) 語群、カイリ・パモナ (Kaili-Pamona) 語群、ブンク・トラキ (Bungku-Tolaki) 語群、ムナ・ブトン (Muna-Buton) 語群、ウォトゥ・ウォリオ (Wotu-Wolio) 語群 (以上 6 語群はセレベス上位語群に属する)、南スラウェシ (上位) 語群として扱う ⁴。

3. シュワー (Schwa) について

原オーストロネシア語のシュワー*ə は、Dempwolff によって再構された 4 個の単母音 (*i, *a, *ə, *u) の内の一つである。さらに Dempwolff は*-ai̯、*-au̯、*-ui̯ という語末に現れる二重母音を再構している。基本的に現代語の母音はこれらの単母音、二重母音に遡ることになる。

¹ 以下の説明中のカッコ内の数字は含まれる言語数である。

² ここでは伝統的な分類に従い、語族の下の段階を語派とする。

³ 言語、方言の綴りについては、「言語・方言名表」を参照。

⁴ スラウェシの語群の分類については山口, 2024: 46 を参照。また、「南スラウェシ (上位) 語群」とする理由については、山口, 2024: 46 の脚注 3 を参照。

一般的な歴史的変化は、*i > i, *a > a, *u > u であり、*ə については ə で現れる（通常 6 個以上の母音音素を持つ）言語と ə 以外の母音で現れる（通常 5 個以下の母音音素を持つ）言語がある。二重母音に関しては、もし単母音化するなら、*-ai > -e, *-au > -o である⁵。

シュワー（Schwa）は日本語で「あいまい母音」と呼ばれる（日本音聲學會, 1976:5-6; 文部省, 1998: 369）。この非円唇中舌半開（半閉）母音は、インドネシア語を初めとして多くの地方語に存在する。ただし、スラウェシの言語に関しては/a/を持っている言語は少ない。原オーストロネシア語の*ə は、スラウェシにおいては祖語の*ə を維持した一部の言語と祖語*ə を他の母音に変えた多くの言語が存在することになる。

4. 研究資料について

比較言語学においては、より古い資料がより祖語に近いために重要視される。スラウェシの言語においては、オランダ人研究者等によって研究された大言語や一部の言語を除いて、他の多くの言語資料はインドネシア独立後、それも国立の研究機関による研究が本格化してからのものになる⁶。

近年の系統研究には言語年代学（glottochronology）から派生した語彙統計学（lexicostatistics）、計量方言学（Dialectometry）によるものが目立つ。それらの研究に用いられる語彙数は 100～200 単語程度である。用いられた語例が挙げてあったとしても、比較研究を行うためには不足している。

語彙集や現地調査での収集資料等では、基礎（的な）語彙が選ばれる以上、ある程度共通した語彙が選ばれることが多い。本研究では比較的採録されることが多い数詞が重要な資料になる。原オーストロネシア語の数詞の再構形中「一」～「九」の中に*əを含む再構形が 4 語ある。*ət'a'「一つの、数える」⁷、*təlu'「三」、*(ə(m)pat「四」、*ənəm「六」である。本研究では重要な語彙である。

本稿には「付表 スラウェシの言語の「三」「四」「六」（以下「付表」）を附している。「付表」は 170 の言語、方言等よりなるが、必要な場合でかつ資料がある場合は「付表」に掲載されていない言語、方言の語例や他の*əを持つ再構形に遡る語例も用いる。

また、当然ながら「付表」以外のすべての言語、方言の資料があるわけではないので、使うことができなかった（資料がなかった）言語、方言の中に本稿で述べていることとの間で相違が存在する可能性も否定はできない。

5. 研究方法と目的

比較言語学の目的は祖語の再構である。中間祖語の再構により祖語から現代語間の系統関係も明らかになる。しかし、上述のように近年の系統研究には語彙統計学、計量方言学が用いら

⁵ *-ui に関しては Dempwolff による再構形 2,212 個中の 7 例に存在するに過ぎないので、はっきりしたことはいえない。例えば、インドネシア語では、*[<]an[D]uy > m|andi「風呂にはいる、水浴びする」、*apuy > api「火」、*babuy > babi「ブタ」、*baluy > kem|bali「帰って来る・再現する」等である。

⁶ インドネシアの言語（および文学）研究所については山口, 2021 を参照。また、資料については山口, 2024: 48-49 を参照。

⁷ 母音始まりあるいは母音終わりの再構形の最初と最後に現れる（「柔らかい声立て音」は再構形を KVKVK（K=子音、V=母音）に統一するために Dempwolff が機械的に付加したものである（崎山, 1974: 5）。「一」には*(it'a' という再構形もある。

れることが多い。対象となる言語の語彙に対しての一致率によって系統関係を決めようとする量的研究である。一方、比較言語学における基本は、音韻対応を求め、元の言語（音韻体系、語彙）を再構するという方法を用いる。比較言語学の基本である、比較の方法（comparative method）に基づき、音韻対応を求める質的研究である。

本研究では、祖語の語形に含まれる**a*が現代語でどのように反映されているかを確認する。スラウェシにおいては5母音体系の言語がほとんどである。すなわち、**a*は他の母音に合流していることになる。なお、対象としては先ず数詞「三」「四」「六」を確認する。そして、可能な場合は他の語彙も用いる。

現代語において**a*が維持されるか、他の母音に合流したか。また合流した場合は、どの母音に合流したのかを考察することにより中間祖語を推定するための指標を得られることになる。

なお、本研究は筆者自身がフィリピンの言語が専門ではないこともあり、フィリピン系の語群については深い考察を行うことができないという制約があることを、ここであきらかにしておく。

6. スラウェシの言語の母音について

原オーストロネシア語の**a*が、スラウェシの現代語にどのように反映されているかを考察するために、先ずスラウェシに存在する各語群の母音体系を概観しておく。

6.1. フィリピン系の語群

サンギル語群、ミナハサ語群の言語はすべて/*a*/を持っている（Sneddon, 1978: 20-25, 38; 1984: 23-24）⁸。しかし、ゴロンタロ・モンゴンドウ語群は確認できた言語において/*a*/は存在しなかった（Danie, 1991: 32-33, 1996: 18-20; Garancang, 1986: 6-7; Kasim, 1981: 15-16, 1993: 15-17; Usup, 1999: xvi）。

6.2. セレベス上位語群

セレベス上位語群に属する言語については、すべての言語についての資料があるわけではないが、これまでに確認できた限りは、5母音体系である（山口, 2016: 87; 2022: 149-150）。また、Meadの再構した原ブンク・トラキ語の単母音も4母音である（Mead, 1998: 66-67）。

6.3. 南スラウェシ（上位）語群

南スラウェシ（上位）語群のブギス語は/*a*/を持つ6母音体系の言語である。ブギス語では基本的に**a* > *a*である。ただし、**bəyat* ‘米’ > *wərra*のように**a* > *a*も起こっている。

Campbellはピトゥ・ウルンナ・サル語バンバン方言に/*æ*/が存在し、アラッレ・タブラハン語マンビ方言にも存在するとしている（Campbell, 1989: 13, 1991: 5, 48-51）。アラッレ・タブラハン語を研究したMcKenzieもアラッレ・タブラハン語に/*æ*/の存在を認めている（McKenzie, 1991: 108-108）。しかし、南スラウェシの諸言語を包括的に調査・研究したGrimesの語彙表では/*a*/とされている（Grimes, 1987: 98-199）。例を挙げると以下ようになる。

⁸ Bawoleはタラウド語は5母音体系としている（Bawole, 1981: 1）。

出典	Campbell, 1991		Grimes, 1987	
言語 方言	ピトゥ・ウルナ・サル語 バンバン方言	アラッレ・タブラハン語 タブラハン方言	ピトゥ・ウルナ・サル語 バンバン方言	アラッレ・タブラハン方言 ⁹
子供	ænæ?	ænæ?	ana?	beluha
髪	beluæ?	beluhæ?	belua?	beluha

「山口真佐夫（研究代表者），1999 – 2001. 科学研究費補助金・基盤研究（C）「インドネシア南スラウェシ地域諸言語の分類に関する研究」により収集した資料では、ピトゥ・ウルナ・サル語バンバン方言とアラッレ・タブラハン語タブラハン方言に/æ/を認めている¹⁰。アラッレ・タブラハン語に関しては*a あるいは*a に由来すると思われる（Campbell, 1991: 48-50）。また、ピトゥ・ウルナ・サル語の æ に関しても*a か*a に由来すると思われる（Campbell, 1991: 48-50）。しかし、現代語において音素とするか/a/の異音とするかははっきりしない。Campbell も McKenzie も最小対立ペアを挙げていない。

7. 各語群・上位語群の数詞「三」「四」「六」に見られる*aの反映

ここでは、*a がどのように反映されているかを*təlu(「三」、*(ə(m)pat「四」、*(ənəm「六」に基づいて確認する。なお、*təlu(「三」は第1音節に*aを持っている。*(ə(m)pat「四」の*-(m)-は語中に鼻音-m-を再構できるかどうかははっきり決められないことを表している。本稿の対象言語の多くでは、*-(m)-は現れていない。「六」には語頭の*a-と語中の*a-が含まれている。ここでは*a-と*a-の双方について説明する。さらに資料がある場合は、数詞以外の*aを含む語例も分析する。

7.1. フィリピン系の語群

フィリピン系諸語群の*təlu(「三」では、ゴロンタロ・モンゴンドウ語群とサンギル語群、ミナハサ語群間で大きく異なった反映を見せている。ゴロンタロ・モンゴンドウ語群では、*a > o である。ゴロンタロ語では o|tolu, to|tolu の二形が確認できる。前者は語頭音添加、後者は語頭音重複形と考えられる。ただし、前者は totolu の語頭音脱落も語形的には考えられる。また、語頭音重複形に関してはゴロンタロ・モンゴンドウ語群と同じ大中央フィリピン上位語群に属するタガログ語の tatlo「三」を思い起こさせる。Dempwolff は tatlo は語頭音重複形*ta|talulu の語中音消失に由来する、としている（Dempwolff, 1934: 75）¹¹。サンギル語群は*a > a/ə である。サンギル L 語にも/a/が存在するが、「三」の場合は a で現れている（Reid, 1971: 36）¹²。ミナハサ語群は*a > ə である。また、語頭音重複形はサンギル L 語、サンギル R 語、タラウド語にも存在する。

フィリピン系諸語群の*(ə(m)pat「四」は、ゴロンタロ・モンゴンドウ語群が*a > o、サンギ

⁹ Grimes は "Aralle-Taburahan" としている（Grimes, 1987: 16）。また、Grimes は Aralle-Taburahan と Mambi をピトゥ・ウルナ・サル語の方言としている（Grimes, 1987: 16）。つまり、ピトゥ・ウルナ・サル語アラッレ・タブラハン方言とマンビ方言となる。

¹⁰ 現地調査は南スラウェシの言語研究所の研究者チームによって行われた。

¹¹ タガログの語末の*-u > -o は規則的变化である。

¹² 例えば、サンギル L 語には*bəli(「買う」> bəli のように*a > ə の例がある（Reid, 1971: 57）。[l] は反り舌側面接近音である。なお、本稿では Sarangani 諸島の Sangil 語をサンギル L 語、Sangihe 諸島の Sangir 語をサンギル R 語と表す。

ル語群が*ə > ə/a、ミナハサ語群が*ə > əである。ゴロンタロ語 wopato「四」の wo は < *u^wo < *uo のような変化が考えられる。*u と *o の間にわたり音-^w-が生じた変化である。

フィリピン系諸語群の*(ə)nəm「六」は、ゴロンタロ・モンゴンドウ語群では*ə-, *-ə- > o-, -o-, サンギル R 語*ə-, *-ə- > ə-, -u-, タラウド語*ə-, *-ə- > a-, -u-である。サンギル L 語は*-ə- > u-である。サンギル L 語では頭音節脱落が起きている¹³。そして、*ə > u は上位語群を越えて散発的に起きている。ミナハサ語群では > ə-, -ə-である。

フィリピン系の諸語群においては、ゴロンタロ・モンゴンドウ語群が他の語群と異なった反映を見せている。ゴロンタロ・モンゴンドウ語群では*ə > o であるのに対して、サンギル語群では*ə > ə/a である。ゴロンタロ・モンゴンドウ語群は他のフィリピン系の語群と異なった特徴を持っている(山口, 2017: 322-323)。ただし、5 母音体系であること自体は他の系統関係の近い言語にも 5 母音体系があることで特別問題はないといえる。フィリピン中部から南部に広く分布するセブアノ語も 5 母音体系である(Bunye, 1971: 8-10)。SIL によれば、セブアノ語の系統は Austronesian, Malayo-Polynesian, Greater Central Philippine, Central Philippine, Bisayan, Cebuan→セブアノ語となる(SIL, 2025)。ゴロンタロ語は Greater Central Philippine までは同じで、その後が Gorontalo-Mongondow, Gorontalic→ゴロンタロ語となる(SIL, 2025)。いずれにしても、Greater Central Philippine(大中央フィリピン上位語群)は多様な 100 の言語を擁する上位語群である(SIL, 2025)。語群間の差異も大きいと思われる。

ミナハサ語群の「夜」では*bəŋi(がトンサワン語 bəŋi、トンテンボアン語 wəŋi、トンセア語 bəŋi と原オーストロネシア語の*ə を維持している(原ミナハサ語*bəŋi「夜、暗い」(Sneddon, 1978: 135))¹⁴。一方、サンギル語群では、*ɣabi(「夕方、夜」がサンギル L 語 rəbi「夜」、サンギル R 語 həŋi「夜」、タラウド語 zabbi「夜」となっている(原サンギル語*Rəbi「夜」(Sneddon, 1984: 81))。この例からは、ミナハサ語群*ə > ə、サンギル語群*a > ə と異なっている。ブギス語にもみられる*a > ə については、アクセントがない音節に含まれる*a が*ə になる可能性も考えられるが、原オーストロネシア語のアクセントについては祖語の再構に資するかどうかは判らない¹⁵。ミナハサ語群はサンギル語群に比べて祖語の*ə をよく維持している。一方、サンギル語群には*a > ə も存在していることになる。

7.2. セレベス上位語群

セレベス上位語群の*təlu(「三」はトミニ・トリトリ語群、サルアン・バンガイ語群では*ə > o である。また、語頭音重複形も頻出している。カイリ・パモナ語群は*ə > o であるが、一部に*ə > a が見られる。そして、*ə > a は主に語頭音重複部分に存在する¹⁶。ブンク・トラキ語群では*ə > o であり、この語群においても語頭に o-が現れる。ムナ・ブトン語群は*ə > o、ウォトゥ・ウォリオ語群は*ə > a である。

カイリ・パモナ語群のトポイヨ語 tallu は語中に重子音がある点で、ランピ語 tullu は語中に重子音がある点で、また*ə > u という二つの点で不規則な形である。語中の重子音に関しては、

¹³ Sneddon の再構形に用いられたサンギル L の例でも頭音節脱落が起きている(Sneddon, J.N. 1978: 63-64)。

¹⁴ 原オーストロネシア語には*maləm, *(ə)ləm, *bəŋi(「夜」; *ɣabi(「夕方、夜」が再構されている。

¹⁵ フィリピン、インドネシアの言語とアクセントの問題については、崎山の論文が詳しい(崎山, 1974:189-195)。

¹⁶ パモナ語 togo の -g- は *-l- に遡るとは思えない。パモナ語においては *-l- > -l-/-y- である。例えば *hiliy「流れ出る」> ili「流れ」、*[t]əluɣ「卵」> toyo である。

周辺の南スラウェシ（上位）語群の言語の影響と思われる。トポイヨ語周辺にはマムジュ語シニョニョイ方言、タンコウ語等が分布している（Valkama, 1987: 115）。そして、それぞれシニョニョイ方言 *tallu* タンコウ語 *tallu* である。そして、第一音節の *u* が、逆行同化によるものとするよりは、**ə- > u-* という変化があったと考えるべきであろう。後述するように、多くはないが **ə > u* の例は他の上位語群の言語にも散発的に起きている。

セレベス上位語群の **(ə(m)pat* 「四」については、二様の変化があるように思われる。**ə > o* と **ə > a* である。そして、この二様の変化があるという現象は、ウオトゥ・ウォリオ語群を除いて他のすべての語群に見られる。

ブンク・トラキ語群の *opaa* は **apa* のような語形からのメタテーゼ形のようにも思えるが、語頭の *o-* の説明ができない。ここで注目されるのがカイリ・パモナ語群パモナ語の *aopo* である。ブンク・トラキ語群の *opaa* は、**(ə(m)pat > (1)*əpa > (2)*aopa > (3)opaa* とは考えられないだろうか。変化は、祖語形 *> (1)*ə- > *ə-*、*(2)*ə- > ao-*（折れ）¹⁷、*(3)*メタテーゼという変化である。（非円唇中舌半開（半閉）の）**ə* が半狭の *o*（あるいは半広の *ɔ*）と中舌寄りの前舌の *a* に折れた（割れた）とは考えられないであろうか。そして、「四」についてはムナ・ブトン語群、ウオトゥ・ウォリオ語群においては折れは見られない。すべての **ə > o* を折れで説明できるわけではないが、一部の変化を説明することができる。なお、ムナ・ブトン語群のパンチャナ語 *Lambusango* の *wapa* は **oa- > *o^wa > wa-* のような変化が想定される。

ウオトゥ・ウォリオ語群は、東南スラウェシ州のブトン島に（離れて）ウォリオ語とカマル語が分布、南スラウェシ州のスラヤル島南部にライヨロ語、同州南東部の島嶼地域にカラオ語、ボネ湾奥部にウオトゥ語とスラウェシ島南部に広く分散して分布している。しかし、分布地域が分散していても **(ə(m)pat* 「四」の現代語形をみる限り、言語的には語群としての統一性が高い。

セレベス上位語群の **(ənəm* 「六」は、**ə > o* であるが、サルアン・バンガイ語群のバトゥイ語、サルアン語で **ə- > a-*、カイリ・パモナ語群のトポイヨ語で **ə- > a-*、ムナ語の一部、パンチャナ語 *Kalende* でも **ə > a* である。また、ウオトゥ・ウォリオ語群では **ə > a-*、*-a* である。ブンク・トラキ語群とウオトゥ・ウォリオ語群ではその反映は異なっているが、語群内は均一である。そして、**ə > a* である原ウオトゥ・ウォリオ語は原カイリ・パモナ語や原ムナ・ブトン語よりも先に分離したことになる。その後 **ə > o* が起きている。

レド・カイリ語にも、パモナ語の *aopo* 「四」の折れと同様に *aono* 「六」がある（Evans, 2003: 6）。語頭の折れである。「六」について、ムナ・ブトン語群でも、折れが影響している可能性があると思われる。しかし、現時点ではっきりした経過は判らない。ムナ語のいくつかの方言（採録地）、パンチャナ語 *Kalende* で、長母音がみられるのは、語末で連続した同母音が長母音化したものと思われる。

セレベス上位語群においてはウオトゥ・ウォリオ語群が **ə > a* であることを除いて **ə > o* が基本である。ウオトゥ・ウォリオ語群以外でも、いくつかの言語、方言で **ə > a* が起きている。その中でいくつかの例を説明しておく。

トミニ・トリトリ語群では「四」で **ə > a* が起きている。そして、いくつかの言語の語頭の

¹⁷ *breaking* → 「母音の割れ」、「折れ」（文部省, 1998: 222）。本稿では「折れ」とする。本来の折れは、一つの母音が二重母音になることである（Trask, 2000: 46）。しかし、セレベス上位語群の言語は二重母音を持たない言語なので、現代語では母音連続として現れていると考えられる。

r-、h-に関しては、*ɣ のような軟口蓋摩擦音の存在が考えられる。このような場合は、機能・意味は不明だが*-ay-のような接中辞の可能性もある¹⁸。トミニ語の apate「四」の-eは開音節化するためのものである（山口, 2022: 150）。トミニ・トリトリ語群の「星」は*bi[t]uhənに遡る¹⁹。バラエサン語 betuən、ダンペラス語 betuan、ペンダウ語 betuən、トミニ語 bituoneである。バラエサン語、ペンダウ語、トミニ語では*-ə- > -o-である。ダンペラス語は*-ə- > -a-である。数詞「三」「六」では-o-、「四」では-a-であるが、「星」では-o-と-a-が混在している。

サルアン・バンガイ語群でも「四」では、*ə- > o-/a-、*-ə- > -a-が起きている。アンディオ語、バランタック語の paat はメタテーゼ形である。語頭の*ə が*o に変化する前にメタテーゼが起きたことを示している。このことから*ə > aの方が*ə > oよりも古い変化であることが判る。

カイリ・パモナ語群も基本的には、*ə > oであるが、レド・カイリ語、ナブ語、パモナ語、トポイヨ語等に*ə > aが見られる。そして、パモナ語以外は「六」でも*ə > aである。一方、パモナ語の語形で*təlu(に遡るのは tou である。*təlu(> *tolu > *toyu > tou という変化である。パモナ語の「六」は*ə- > o-である。パモナ語の tatogo は語頭音重複形と思われるが、現代パモナ語の語頭音重複とは異なる。現代語の語頭音重複では第一音節と同じ母音が現れる（Hente, 1991: 18-19）²⁰。このことから、この tatogo の重複は古い段階で起きたものと思われる。また、*bəsa[l]「大きい」ではレド・カイリ語 mbaso、クラウィ語 na|bohe、トポイヨ語 na|bohe、ピピコロ語 bohe、セドア語 ma|bose 等と尾音節の*a は不規則だが、*ə についてはレド・カイリ語が a、それ以外が o となっている。ただし、レド・カイリ語には*bəŋji(「夜」> boŋji のように*ə > o もある。

ブンク・トラキ語群は*ə > oである。「四」に現れる a は*ə > ao の折れによるものである。

やや複雑なのが、ムナ・ブトン語群である。「四」では*ə > a になっている。*ə > o と思われるのはラサリム語、ムナ語 Lombe 等である。また、「六」に関してはムナ語とパンチャナ語のいくつかの採録地で*ə > a になっている。原ムナ・パンチャナ語は*noo と*ə > o で再構されている（Berg, 1991: 49）²¹。

ウオトゥ・ウオリオ語群は*ə > a である。なお、ウオトゥ語「三」「四」の語末の-əŋo について、語源は判らないが数詞の「一」から「四」に現れる語末音添加である。ウオトゥ語の「一」から「四」は saŋo, duəŋo, taluaŋo, patəŋo である（Salombe, 1987: 52-53）。それぞれ sa-(*sə「一」) + *-əŋo > saŋo、*duwa(「二」) + *-əŋo > duəŋo、*təlu(「三」) + *-əŋo > taluaŋo、*(ə(m)pat > *apat > pata（メタテーゼ）) + *-əŋo > patəŋo である。尾音節が a で終わっている場合は、重音脱落（haplology）が起きている。重音脱落が起きていることから「一」「二」「四」の語末は*-əŋo が付加された時点では、それぞれ*-a であったことが判る。

7.3. 南スラウエシ（上位）語群

南スラウエシ（上位）語群の*təlu(「三」は、ブギス語で*ə > ə、それ以外の言語では*ə > a

¹⁸ 接中辞は第一子音と第一母音の間に挿入される。もし母音始まりの単語なら接頭される。

¹⁹ 原オーストロネシア語の「星」の再構形には*bi[t]uhən、*bintaŋ、*bintaŋ、*[t]ala[h]がある。

²⁰ 同「研究報告」では、語頭音重複に対して Dwipurwa という用語を使っている（Hente, 1991: 18）。duana「舟」→duduana「色々な舟」のように第一音節の du が母音は変わらず語頭に付加されている。

²¹ 原ムナ・パンチャナ語「三」は*tolu、「四」は*paat と再構されている（Berg, 1991: 49）。

である。注目すべきことは、トラジャ語マカレ方言の *tattalu* である (Veen, 1940: 696)。**təlu* に対して南スラウエシ (上位) 語群の言語においても語頭音重複の可能性のある語形が存在することになる。

南スラウエシ (上位) 語群の **ə(m)pat* 「四」は、ブギス語で **ə* > *ə*、それ以外の言語では **ə* > *a* である。セコ下位語群の 4 言語中、「付表」にあるセコ・トゥング語 ?*upa?*、セコ・パダン語ホノ方言 *upa?*、タンコウ語 *uppa* は **ə* > *u* である。「付表」以外の例ではセコ・パダン語ロダン方言は *uppa*、パナスアン語は *apa?* となっている。パナスアン語を除いて **ə* > *u* である。セコ下位語群以外では「付表」以外の例でウルマンダ語のソンドアン方言 *uppa?*、マムジュ語パダン方言 *uppa?* がある (Yamaguchi, 1999: 128)。

南スラウエシ (上位) 語群の **ənəm* 「六」は、**ə* > *ə*、**ə* > *a*、**ə* > *u* の言語が存在する。**ə* > *u* が起こる言語はアラッレ・タブラハン語、ウルマンダ語、チャンパラギアン語およびマムジュ語の一部方言である。さらに、セコ下位語群にも見られる。

マムジュ語は、マムジュ方言 ?*anaŋ*、シニョニョイ方言 ?*unuŋ* である (Grimes, 1987: 113)。「付表」にない他の方言ではスマレ方言 ?*annaŋ*、パダン方言 ?*unnuŋ* である (Grimes, 1987: 113)。マムジュ語の場合は一言語内に **ə* > *a* と **ə* > *u* がある。「付表」にないウルマンダ語ソンドアン方言は *unnuŋ* である (Yamaguchi, 1999: 128)。

セコ下位語群ではセコ・トゥング語で *unuŋ*、セコ・パダン語ホノ方言は *unuŋ* である。「付表」にないセコ・パダン語ロダン方言は *unuŋ*、パナスアン語は *anaŋ* となっている。「四」の場合と同様にパナスアン語のみは **ə* > *a* である。セコ下位語群の 4 言語中、パナスアン語はやや他の言語と系統的な距離があると考えられる²²。

これらの **ə* > *u* の現象が見られる言語の中で、アラッレ・タブラハン語、ウルマンダ語、マムジュ語は南スラウエシ (上位) 語群中の北方下位語群に含まれている (SIL, 2025)²³。しかし、セコ下位語群は北方下位語群とは別の下位語群である。

南スラウエシ (上位) 語群においては、ブギス語では (すべてではないが) **ə* > *ə* を除いて **ə* > *a* である。やや特異なのが「四」において一部の言語、方言に見られる **ə* > *u* である。この **ə* > *u* という例外的な変化は「六」においても起きている。この現象は北方下位語群、セコ下位語群という南スラウエシ (上位) 語群内の下位語群の境界線を越えて起こっている。そして、第一音節と第二音節の両方で起きている。

8. スラウエシの諸言語にみられる特異な現象

ここまでの考察を通して、不規則なあるいは例外的な変化を起こしている現象がみられた。ここで、印欧比較言語学者のアントワヌ・メイエが 1925 年の著書の中で述べているように「二つの言語の間に一致する事実がより特異であるほど、その一致が持つ証明の力は大きい。従って異常な例外形は「共通原語」の樹立に、本来、最も適合する形である。」という言葉を引き起こしたい (メイエ, 1977: 54)。

²² SIL はセコ下位語群をセコ・パダン語、中央セコ語、パナスアン下位・下位語群に分け、パナスアン下位・下位語群に属する言語としてブドン・ブドン語 (=タンコウ語)、パナスアン語の二言語を挙げている (SIL, 2025)。

²³ 北方下位語群と他の下位語群との弁別、下位語群内の分類について山口, 2005、2016 を参照。南スラウエシ (上位) 語群中、北方下位語群に属さないグループは、ブギス下位語群、マカッサル下位語群、セコ下位語群である。

不規則なあるいは例外的な現象が複数の語群、言語、方言に現れる場合、共通の源に遡る証拠となる場合がある。以下で、検討したい。

8.1. 「三」にみられる語頭音重複

「三」には語頭音重複と思われる語形が散在する。大フィリピン上位語群のタガログ語、サンギル語群、トミニ・トリトリ語群の一部、サルアン・バンガイ語群の一部、カイリ・パモナ語群の一部、ムナ・ブトン語群の一部と南スラウェシ（上位）語群のトラジャ語マカレ方言に存在している。

この現象はミナハサ語群、ブンク・トラキ語群、ウォトウ・ウォリオ語群にはみられない。また、南スラウェシ（上位）語群、ムナ・ブトン語群では非常に限られている。ただし、語頭の *o*-が語頭音重複後の語頭音脱落の可能性もある点に注意が必要である。

「三」に対する語頭音重複については Dempwolff が **təlu* 「三」を再構する際に用いた語例で、インドネシア語派のタガログ語 *tatlo* 以外にポリネシア語派のトンガ語、フトゥナ語、サモア語の *ta|tou* 「私達三人」を用いている (Dempwolff, 1938: 134) ²⁴。これらのことから、「三」にみられる語頭音重複は広く原オーストロネシア語の言語に存在した現象であろう。

8.2. **ə > u*

**ə* (非円唇中舌半開 (半閉) 母音) が *u* (円唇後舌狭母音) になるという変化は一般的とはいえない。「四」におけるこの変化は、大中央フィリピン上位語群のセブアノ語、南スラウェシ（上位）語群のアラッレ・タブラハンのタブラハン方言、「付表」にはないがマムジュ語のパダン方言 *uppa?* (Yamaguchi, 1999: 128)、「付表」にはないがウルマンダ語のソンドアン方言 *uppa?* (Yamaguchi, 1999: 128)、そしてパナスアン語を除くセコ下位語群にみられる ²⁵。

「六」におけるこの変化は大中央フィリピン上位語群のセブアノ語、サンギル語群、南スラウェシ（上位）語群のアラッレ・タブラハンの一部方言、マムジュ語の一部方言、ウルマンダ語（「付表」にはないソンドアン方言 *unnuŋ* (Yamaguchi, 1999: 128)）、パナスアン語を除くセコ下位語群にみられる。そして、**ənəm* 「六」の第一音節と第二音節の **ə* が、セブアノ語を除いて両方が *u* になっている。セブアノ語の第二音節では **ə > o* である。

「三」についての **ə > u* は非常に例が限られている。現時点で確認できたのはランビ語の *tullu* のみである ²⁶。

8.3. **ə(m)pat* における **ə*-の反映

ə(m)pat* については、上で既に説明したように、非フィリピン系の語群では、ə > ə* のブギス語を除けば、上で説明した **ə > u* 以外に、**ə > a* と **ə > o* がある。そして、トミニ・トリトリ語群、サルアン・バンガイ語群、カイリ・パモナ語群、ムナ・ブトン語群では、その双方が起きている。

²⁴ Dempwolff はオーストロネシア語族に対してインドネシア語派、メラネシア語派、ポリネシア語派の三語派という立場である。

²⁵ ムナ・ブトン語群のムナ語 *Lakudo* の *nomu'ahu* も **unom* のメタテーゼ形の可能性がある。

²⁶ フィリピンの言語ではセブアノ語以外に、例えば Reid が挙げたフィリピンの 43 の少数言語中（語形変化は詳しく判らないが）、10 言語に **ə > u* の可能性がある (Reid, 1971: 149)。

セレベス上位語群のウォトゥ・ウォリオ語群ではすべて $*ə > a$ 、南スラウェシ（上位）語群のブギス語は $*ə > ə/a$ である。他の言語は一部が $*ə > u$ である以外、 $*ə > a$ である。この現象は早い段階から継承されたものである。「四」の特殊性は、第二音節に $*a$ があるために第一音節の母音が逆行同化により a になったとも考えられる点である。

8.4. 折れ

パモナ語 *aopa* 「四」、レド・カイリ語 *aono* 「六」は語頭で折れを起こしたものと考えられる。ブク・トラキ語群の *opaa* 「四」、*onoo* 「六」等はメタテーゼだけでは説明できない。特に「四」については $*ə(m)pat$ 「四」 $> *əpa > *aopa$ （折れ） $> opaa$ （メタテーゼ）と考えられるが、初期の段階では、 $*ə > *ao$ だけではなく $*ə > *a$ が起きている。この折れが $*ə > *a$ の後に起き、その後類推等も起こり $*ə > *ao > o$ が定着した可能性が考えられる。 $*ə > o$ が直接起きたと考えるより、可能性が高い変化である。

ブク・トラキ語群の *otolu* 「三」は折れではなく語頭音添加である。 $*təlu$ （「三」で折れが起きた場合の語形は $*taolu$ である。メタテーゼ起きたとしても、期待される語形は *otolu* ではなく *otalu* か *atolu* になる。ブク・トラキ語群の *otolu* は $*təlu > *tolu > *o- + tolu$ である。

9. 結論

最初期の段階では $*ə > ə$ は維持されていた。スラウェシでこの状態を引き継いでいるのは、現代語に $ə$ を持つ言語である。スラウェシではフィリピン系のサンギル語群とミナハサ語群である。そして、最も初期の段階を維持しているスラウェシのフィリピン系の語群はミナハサ語群である。その後に起きた変化は $*ə > a$ である。この二様の変化 $*ə > ə/a$ はサンギル語群にみられる。また、サンギル語には $*a > ə$ も起きている。

ゴロンタロ・モンゴンドウ語群は $*ə > o$ であり、他のスラウェシに分布するフィリピン系の語群とは大きく異なる。それぞれ一上位語群を構成するサンギル語群やミナハサ語群とは異なり、9言語からなるゴロンタロ・モンゴンドウ語群は、他の91言語とともに100語からなる大中央フィリピン上位語群に属している。この問題はフィリピンに存在する大中央フィリピン上位語群の一語群であることも考慮した研究が必要である。

他の語群の中で重要な位置を占めているのが南スラウェシ（上位）語群である。語群を構成している一言語とはいえブギス語に $*ə > ə$ が現れる。しかし、そのブギス語にも $*a > ə$ 、 $*ə > a$ が存在している。南スラウェシ語群をセレベス上位語群と別の上位語群とするには、この $*ə > ə$ が重要となる。セレベス上位語群には $*ə > ə$ は存在していない。

原南スラウェシ・セレベス語から原南スラウェシ語と原セレベス語が分岐した際に、原セレベス語には例外的な場合を除いて $*ə > u$ は継承されなかった。このことも、南スラウェシ（上位）語群とセレベス上位語群の弁別点になる。

その原セレベス語から最初に分かれたのが原ウォトゥ・ウォリオ語で、原セレベス語から分離後も $*ə > a$ が続き、完了することになった。この反映を重要視するなら、この分岐の時点以降を原セレベス語とすることも否定できない。

セレベス上位語群の他の語群にも $*ə > a$ が起きている。多くの場合は $*ə(m)pat$ 「四」におきているが、この場合は逆行同化の可能性もある。 $*təlu$ 「三」、 $*ənəm$ 「六」における $*ə > a$ はカイリ・パモナ語群、ムナ・ブトン語群にもみられる。これは、一部の語群において残ってい

る初期の現象と考えられる。カイリ・パモナ語群の場合は、レド・カイリ語、トポイヨ語にみられる。ムナ・ブトン語群の場合はムナ語、パンチャナ語の一部に存在するが、この二言語間の系統上の近さを示している可能性がある。そして、ムナ語とパンチャナ語は早い段階で中間祖語から分離した可能性がある。

ウォトウ・ウォリオ語群以外のセレベス上位語群では $*ə > o$ という変化が起きている。しかし、限定的あるいは特定の単語（例えば $*(ə(m))pat$ 「四」）に対しては他の語群でも $*ə > a$ が起きている。 $*ə$ から直接 o に変化したと考えるよりも、間に $*ə$ に対する折れの結果としての $*ao$ の段階があったと考えるべきである。ただし、現代語に $ə$ を持たないセレベス上位語群に属する諸語群の中間祖語に $*ə$ を再構することはできない。原ウォトウ・ウォリオ語が原セレベス語から分岐した時点で $*ə > *a$ は進行していた。そして、原ウォトウ・ウォリオ語が分岐した後に折れが起こったことになる。

その後、現在のカイリ・パモナ語群のパモナ語の「四」やレド・カイリ語の「六」に痕跡をみることができる $*ə > ao$ という折れによって生じた o が基本的な反映として現れたことになる。もちろん $*ə > o$ が折れのみによって成立したとして、 $*ə > *a$ を残しつつ折れから類推した $*ə > o$ がこの段階で一般的なものとなった可能性はある。その場合は、メタテーゼと類推が重要な役割を果たしたことになる。

スラウェシの諸語群の分岐が始まる前に、「三」にみられる語頭音重複は一部の言語で起きていたものと思われる。サンギル語群にも存在する。また、南スラウェシ（上位）語群のトラジャ語マカレ方言にも存在していることである。

$*ə > u$ もセブアノ語にもみられるように上位語群を越えて起きている現象である。非フィリピン系の語群では、南スラウェシ（上位）語群のセコ下位語群と一部の北方下位語群の言語に現れている。他の非フィリピン系の語群には、カイリ・パモナ語群のランピ語を除いて存在しない。これらのことから考えられるのは、対象の上位語群が分岐する以前の中間祖語で起きた異例な変化が一部の語群の言語・方言に残ったと解釈できる。

以上の考察から非フィリピン系の語群は、原南スラウェシ語も含む共通祖語の時代があり、その後に原南スラウェシ語と原セレベス語が分離する。原セレベス語においては、先ず原ウォトウ・ウォリオ語が分岐する。その後の分岐については一音韻の変化のみではなく、他の現象も考慮し、構築することが課題となる。

言語・方言名表

本稿で用いた上位語群・語群・言語名を *Ethnologue* に従って、以下に示す (SIL, 2025)。スラウェシの言語名には多くの異称が多く存在することが多い (Yamaguchi, 2010)。ここでは *Ethnologue* の言語名見出しのみを挙げる。なお、言語分類、言語名には筆者と相違がある場合もこの表では *Ethnologue* の言語名を挙げてある。綴りに下線が引いてある場合は本稿の名称と *Ethnologue* の見出しになっている名称が異なる場合である。綴りがイタリックの場合は、筆者の資料と方言分類が異なった場合である。

フィリピンの言語：セブアノ語 Cebuano、タガログ語 Tagalog；フィリピン系の語群ゴロンタロ・モンゴンドウ語群：ゴロンタロ語 Gorontalo、モンゴンドウ語 Mongondow；サンギル語群：サンギル L 語 Sangil、サンギル R 語 Sangir、タラウド語 Talaud；ミナハサ語群：トンサワ

ン語 Tonsawang、トンテンボアン語 Tontemboan、トンセア語 Tonsea；セレベス上位語群トミニ・トリトリ語群：バラエサン語 Balaesang、ダンペラス語 Dampelas、ペンダウ語 Pendau、トミニ語 Tomini、トリトリ語 Totoli；サルアン・バンガイ語群：アンディオ語 Andio、バトゥイ語 Batui、ボボンコ語 Bobongko、サルアン語 Saluan、バランタック語 Balantak、バンガイ語 Banggai；カイリ・パモナ語群：レド・カイリ語 Kaili, Ledo、クラウィ語 Moma、ナプ語 Napu、パモナ語 Pamona、トポイヨ語 Topoiyo、ピピコロ語 Uma、ランピ語 Rampi、サルドウ語 Sarudu；ブンク・トラキ語群：バホンスイ語 Bahonsuai、ブンク語 Bungku、ブンク方言 Bungku、ランダウェ方言 Landawe、ロウタ方言 Routa、トレテ方言 Torete、トゥランバトゥ方言 Tulambatu、ワイア方言 Waia、コロニ語 Koroni、クリスス語 Kulisusu、モリ・バワ語 Mori Bawah、モロネネ語 Moronene、モロネネ方言 Moronene、トコトゥア方言 Tokotu'a、タロキ語 Taloki、ワウオニイ語 Wawinii、メヌイ方言 Menui

ワウオニイ方言 Wawonii、モリ・アタス語 Mori Atas、パドエ語 Padoe、トマディノ語 Tomadino、コデオハ語 Kodeoha、ラハンプ語 Rahambu、トラキ語 Tolaki、アセラ方言 Asera、コナウェ方言 Konawe、ライウイ方言 Laiwui、メコンガ方言 Makongga、ウィウィラノ方言 Wiwirano、ワル語 Waru、ラロメルイ方言 Lalomerui、ワル方言 Waru；ムナ・ブトン語群：チアチア語 Cia-Cia、ラサリム語 Lasalimu、北トゥカンブシ語 Tukang Besi North、南トゥカンブシ語 Tukang Besi South、ムナ語 Muna、パンチャナ語 Pancana；

ウオトウ・ウオリオ語群：ライヨロ語 Laiyolo、ウオトウ語 Wotu、カマル語 Kamaru、ウオリオ Wolio、ウオリオ語 Wolio；系統未決定：レモラン語 Lemola；南スラウェシ（上位）語群コンジョ海岸語 Konjo, Coastal、（現在の SIL の分類では海岸コンジョ語 Konjo, Castal）、マカッサル語 Makassar、ゴワ方言 Lakiung、スラヤル方言 Selayar（現在の SIL の分類ではスラヤル語）、ブギス語 Bugis、ルウ方言 Luwu、ボネ方言 Bone、チャンパラギアン語 Koneq-koneq、アラッレ・タブラハン語 Aralle-Tabulahan、アラッレ方言 Aralle、マンビ方言 Mambi、タブラハン方言 Tabulahan、マムジュ語 Mamuju、マムジュ方言 Mamuju、パダン方言 Padang、シニョニョイ方言 Sinyonyoi、スマレ方言 Sumare-Rangas、マンダル語 Mandar、バラニパ方言 Balanipa、マジェネ方言 Majene、マルンダ方言 Malunda、パンボアン方言 Pamboang、センダナ方言 Sendana、マッセンレンプル語 Enrekang、エンデカン方言 Enrekang、タエ語 Tae'、ロンコン・アタス方言 Rongkong Atas、ロンコン・バワ方言 Rongkong Bawah、トラジャ語 Toraja-Sa'dan、マカレ方言 Makale、ピトゥ・ウルンナ・サル語 Bambam、ランテ・ブラハン方言 Rantebulahan、バンバン方言 Bambam、メハラアン方言 Mehalaan、ウルマンダ語 Ulumanda'、ボッテン方言 Botteng、ソンドアン方言 Sondoang、タッパラン方言 Tappalang、パナスアン語 Panasuan、セコ・トゥンガ語 Seko Tengah、セコ・パダン 語 Seko Padang、ホノ方言 Hono'、ロダン方言 Lodang、タンコウ語 Budong-Budong

ポリネシア系の言語トンガ語 Tongan、フトゥナ語 Futuna、サモア語 Samoan

語形引用文献

0. 祖語・中間祖語形

Dempwolff, O. 1938. *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*. Berlin, Hamburg: Verlag von Dietrich Reimer (rep. ed. 1969. Nendeln: Kraus Reprint).

- Mead, D. 1998. *Proto-Bungku-Tolaki: Reconstruction of Its Phonology and Aspects of Its Morphosyntax*. Doctoral Thesis (Rice University).
- Sneddon, J.N. 1978. *Proto-Minahaasan: Phonology, Morphology and Wordlist*. Canberra: The Australian National University.
- 1984. *Proto-Sangiric and the Sangiric Languages*. Canberra: The Australian National University.
- Usup, H.T. 1986. *Rekonstruksi Protobahasda Gorontalo-Mongondow*. Jakarta: Disertasi Universitas Indonesia.

1. 地域別、州別

- Anceaux, J. C. (keyboarded and with an introduction by David Mead). 2016. *Southeast Sulawesi Word Lists*. Sulawesi Language Alliance.
- Barr, D.F., S.G. Barr and C. Salombe. [1979]. *Languages of Central Sulawesi*. Ujung Pandang: [SIL and Hasanuddin University].
- Grimes, C.E., B.D. Grimes. 1987. *Languages of South Sulawesi*. Canberra: The Australian University.
- Mills, R.F. 1975. *Proto South Sulawesi and Proto Austronesian Phonology*. Dissertation (The University of Michigan).
- Reid, L.A. 1971. *Philippine Minor Languages: Word Lists and Phonogies*. [Honolulu]: University of Hawaii Press.

2. 科研による収集資料（カッコ内はおもな資料収集言語）

- 山口真佐夫（研究代表者）. 1999-2001. 科学研究費補助金・基盤研究（C）「インドネシア南スラウェシ地域諸言語の分類に関する研究」による収集資料（アラッレ・タプラハン語、ウル・マンダ語、パンネイ語、ピトゥ・ウルンナ・サル語）。
- . 2000. 科学研究費補助金・特定領域研究（A）インドネシア共和国南スラウェシ州のトポイヨ語および周辺の少数言語の調査。（トポイヨ語）。
- . 2001-2002. 科学研究費補助金・基盤研究（C）「インドネシア共和国、南スラウェシ州の北西部・北部の少数言語の調査」による収集資料、（サルドゥ語、セコ・トゥンガ語、タンコウ語、トポイヨ語、バダ語、パナスアン語、バラス語、ベンガウル語、ランピ語、レモラン語、ロンコン語）。
- . 2003-2005 .科学研究費補助金・基盤研究（C）「南スラウェシ語群北方下位語群の研究」による収集資料、（パッタエ語、マッセンレンプル語、ママサ語）。

3. ゴロンタロ・モンゴンドウ語群

- Dunnebie. 1951. *Bolaang Mongondowsch-Nederlandsch Woordenboek met Nederlandsch-Bolaang Mongondwsh Register*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Pateda, M. [1987]. *Kamus Indonesia-Gorontalo*. Gorontalo: Viladan.
- Usup *op. cit.*

4. サンギル語群

- Sneddon *op. cit.* 1978.

Tim Redaksi Kamus Dwibahasa Bahasa Talaud-Bahasa Indonesia Balai Bahasa Sulawesi Utara. 2018.
Kamus Dwibahasa Bahasa Talaud-Bahasa Indonesia. Manado: Balai Bahasa Sulawesi Utara.

5. ミナハサ語群

Sneddon *op. cit.* 1984.

Sumarauw P, A. *et al.* 1996. *Kamus Bahasa Indonesia-Bahasa Tonsea I*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.

----- 1996. *Kamus Bahasa Indonesia-Bahasa Tonsea II*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.

6. トミニ・トリトリ語群

Koida, S., A. Rahim, Z. Mahmud. 1997. *Kamus Dwibahasa Totoli-Indonesia*. n.p. Bagian Proyek Penelitian Bahasa dan Sastra Indonesia dan Daerah Sulawesi Tengah.

Quick, P. 2007. *Pendau Language of Central Sulawesi, Indonesia*. Canberra: The Australian University.

7. サルアン・バンガイ語群

Bergh, J.D. van den. 1953. *Spraakkunst van het Banggais*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.

David Mead 氏より提供された未刊行資料

2001. *A Brief Bobongko Lexicon with Reverse English-Bobongko Finderlist (Draft Version)*.

All Saluan, Batui, Andio and Balantak Word Lists.

Saluan Word Lists.

8. カイリ・パモナ語群

Adriani, N. 1928. *Bare 'e-Nederlandsch Woordenboek met Nederlandsch-Bare 'e Register*. Leiden: E.J. Brill.

Esser, S.J. 1964. *De Uma-Taal (West Midden-Celebes) Spraakkunst en van een Woordenlijst*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.

Evans, D. 2003. *Kamus Kaili-Ledo-Indonesia-Inggris*. Palu: Dinas Kebudayaan dan Pariwisata, Pemerintah Daerah Propinsi Sulawesi Tengah.

Karsana, D., Tamrin, Wahidin. 2012. *Kamus Bahasa Indonesia-Kulawi*. Makassar: De Lamacca.

Martens, M.P. 2014. *Uma Dialect Word Lists*. Sulawesi Language Alliance.

Mondolu, Tr. *et al.* 2011. *Kamus Napu-Indonesia-Inggris*. Sulawesi Language Alliance.

Nurhayati, M. Yamaguchi, H. Nakashima,. 2002. Kosakata Dasar Bahasa Topoiyo serta Tata Bahasa Ringkas Bahasa Topoiyo. (*Endangered Languages of The Pacific Rim A3-009*).

9. ブンク・トラキ語群

Andersen, T. D. *et al.* 2010. *Kamus Torete-Indonesia-Inggris*. Sulawesi Language Alliance.

David Andersen 氏より提供された未刊行資料

English Wawonii Finderlist.

Kamus Wawonii-In-En.

Firman, A.D, Rahmawati, Sukmawati. 2018. *Kamus Culambacu-Indonesia*. Kendari: Kantor Bahasa Sulawesi Tenggara.

Mead, E.M. 1999. *The Bungku-Tolaki Languages of South-Eastern Sulawesi, Indonesia*. Canberra: The Australian University.

Muthalib, A. *et. al.* 1985. *Kamus Tolaki-Indonesia*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.

10. ムナ・ブトン語群

Berg, R. van den. 1996. *Muna-English Dictionary*. Leiden: KITLV Press.

Berg, R. van den, L.O.S. Marafad. 2000. *Kamus Muna-Indonesia*. Yogyakarta: Pustaka Puitika.

11. ウオトゥ・ウォリオ語群

Abas, H., Shaidy, L. Jaya. 1985. *Kamus Wolio-Indonesia*. Jakarta: Pusat Penelitian dan Pengembangan Bahasa.

Anceaux, J.C. 1987. *Wolio Dictionary (Wolio-English-Indonesian) Kamus Bahasa Wolio (Wolio-Inggris-Indonesia)*. Dordrecht, Providence: Foris Publication.

12. 南スラウェシ（上位）語群

Grimes, C.E., B.D. Grimes. 1990 (rep. ed). *Languages of South Sulawesi*. Canberra: The Australian National University.

Manda, M.L., M. Yamaguchi, H. Nakashima. 2002. *Kosakata Dasar Bahasa Panasuan serta Tata Bahasa Ringkas Bahasa Panasuan dan Kosakata Dasar Bahasa Tangkou serta Tata Bahasa Ringkas Bahasa Tangkou*. Endangered Languages of the Pacific Rim A3-010.

Veen, H.D. 1940. *Tae' (Zuid-Toradjasch) Nederlandsch Woordenboek met Register Nederlandsch-Tae'*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.

参考文献

Bawole, G., *et al.* 1981. *Struktur Bahasa Talaud*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.

Berg, R. van den. 1991. Muna Dialects and Munc Languages: Towards a Reconstruction. R. Harlow (ed). *VICAL 2: Westerrn Austronesian and Contact Languages: Papers from the Fifth International Conference on Austronesian Linguistics*. Auckland: Linguistic Society of New Zealand.

Bunye, M.V.R., E.P. Yap. 1971. *Cebuano Grammar Notes*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Campbell, P.J. 1989. *Some Aspects of Pitu Ulunna Salu Grammar: A Typological Approach*. Master Thesis The University of Texas at Arlington.

-----, 1991. Pitu Ulunna Salu., Berg, Van den B. (ed). *Sulawesi Phonologies*. Ujung Pandang, Dallas: The Summer Institute of Linguistics.

Danie, J.K., *et al.* 1991. *Fonologi Bahasa Ponosokan*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan

- Bahasa.
- Dempwolff, O. 1934, 1937. *Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes*. Berlin, Hamburg: Verlag von Dietrich Reimer (rep. ed. 1969. Nendeln: Kraus Reprint).
- Garancang, A., et al. 1986. *Struktur Bahasa Buol*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- Hente, A. Kadir, R. Bouti. 1991. *Sistem Perulangan Bahasa Pamona: Laporan Penelitian*. [n.p.]: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- , Anshari, M.P. Marhum. 1997. *Tata Bahasa Pamona: Laporan Hasil Penelitian*. [n.p.]: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- Kasim, M.M. et al. 1981. *Struktur Bahasa Suwawa*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- McKenzie, R. 1991. Phonology of Aralle-Tabulahan, Berg, Van den B. (ed). *Sulawesi Phonologies*. Ujung Pandang, Dallas: The Summer Institute of Linguistics.
- メイエ, アントワヌ. 泉井久之助訳. 1977. 『史的言語学における比較の方法』. みすず書房.
- 文部省, 日本言語学会, 日本英語学会. 1998. 『学術用語集 言語学編』. 丸善.
- 日本音聲學會 (編). 1976. 『音聲學大辞典』. 三修社.
- 崎山理, 1974. 『南島語研究の諸問題』. 弘文堂.
- Salombe, C. et al. 1987. *Struktur Bahasa Wotu*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- SIL. 2025. *Ethnologue: Languages of the World*. 28th ed.
<https://www.ethnologue.com/> (最終閲覧日: 2025 年 3 月 28 日)
- Trask, R.L. 2000. *The Dictionary of Historical and Comparative Linguistics*. Chicago, London: Fitzroy Dearborn.
- Usup, H.T., et al. 1999. *Kamus Bahasa Indonesia-Kaidipang (A-K)*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- , 2000. *Kamus Bahasa Indonesia-Kaidipang (L-Z)*. Jakarta: Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa.
- Valkama, K. 1987. Kabupaten Mamuju, Friberg, T. (ed). 1987. *South Sulawesi Sociolinguistic Surveys 1983-1987*. [n.p.]: The Summer Institute of Linguistics in cooperation with The Department of Education and Culture.
- Yamaguchi, M. 1999. *Kedudukan Bahasa Mamuju secara Genealogis dalam Kelompok Bahasa Sualwesi Selatran*. Makassar: Disertasi Universitas Hasanuddin.
- , 2010. Tentang Nama Bahasa dan Dialek di Sulawesi Selatan dan Sekitarnya. Collins, J.T., C. Sin (eds). 2010. *Bahasa di Selat Makassar dan Samudera Pasifik*. Bangi: Institut Alam dan Tamadun Melayu, Universitas Kebangsaan Malaysia. 47-63.
- 山口真佐夫. 2003. 「レモラン語の系統研究方法」. 『語文化学会論集』第 20 号: 165-182.
- . 2005. 「南スラウェシ語群北方下位語群の弁別基準」. 『言語文化学会論集』第 25 号: 115-144.
- . 2016. 「インドネシア、スラウェシ島のサルアン・バンガイ語群—系統上の位置づけ—」. 『言語文化学会論集』第 46 号: 77-90.
- . 2017. 「インドネシア、スラウェシ島のゴロンタロ・モンゴンドウ語群と他の語

- 群との関係」．『言語文化学会論集』第 48 号: 301-326.
- . 2021. 「インドネシアの言語・文学研究所における研究の分析」．『言語文化学会論集』第 56 号: 37-59.
- . 2022. 「インドネシア・スラウェシ島における原トミニ・トリトリ語の可能性」．『言語文化学会論集』第 58 号: 139-161.
- . 2024. 「セレベス上位語群における中核語群と他の語群との関係」．『インドネシア 言語と文化』第 30 号: 45-65.

付表 スラウェシの言語の「三」「四」「六」

(上位) 語群名	言語名	方言名 採録地等 ¹⁾	原オーストロネシア語再構形		
			*təlu(「三」	*ə(m)pat「四」	*ənəm「六」
フィリピンの語群					
大フィリピン・ 中央フィリピン	セブアノ語		tulo	upat	unom
	タガログ語		tatlo	apat	anim
フィリピン系の語群					
原ゴロンタロ・モンゴンドウ語			*tolu	*(w)opat	*(w)onom
ゴロンタロ・ モンゴンドウ語群	ゴロンタロ		otolu	wopato	(w)olomo
	モンゴンドウ		tolu	opat	onom
原サンギル語			*təlu	*əpat	*ənum
サンギル語群	サンギル L		taʔtau	apaʔ	nuŋ
	サンギル R		tatəlu	əpaʔ	ənuŋ
	タラウド		tatallu	appata	annuma
原ミナハサ語			*təlu	*əpat	*ənəm
ミナハサ語群	トンサワン		təlu	əpac ²⁾	ənəm
	トンテンボアン		təlu	əpat	ənəm
	トンセア		tədu	əpat	ənəm
1) 基本的に方言名はカタカナ、採録地はローマ字で表す。					
2) Sneddon は c について”voiceless dental affricate” 「無声歯破擦音」と説明している (Sneddon, 1978: 54)。					
セレベス上位語群					
トミニ・ トリトリ語群	バラエサン		totolu	rapat	ono
	ダンペラス		totolu	hapat	honon
	ペンダウ		tolu	(r)apa(t)	ono
	トミニ		totolu	apate	hononŋ
	トリトリ		tolu	opat	onom
サルアン・ バンガイ語群	アンディオ		tolu	paat	noom
	バトゥイ		totolu?	ʔopat	ʔanom
	ボボンコ		totolu	opat	onom
	サルアン		totolu?	(ʔ)opat	(ʔ)anom
	バラントック		tolu	paat	noom
	バンガイ		tolu	---	no:m

(上位) 語群名	言語名	方言名 採録地等 ¹⁾	原オーストロネシア語再構形		
			*təlu(「三」)	*ə(m)pat「四」	*ənəm「六」
カイリ・ パモナ語群	レド・カイリ		tatalu	ampa	aono
	クラウイ		tolu	opo	ono
	ナプ		talū	---	ini
	パモナ		togo tou togu tatogo	opo~ aopo ³⁾	ono
	トポイヨ		tallu	patta	anno
	ピピコロ		tolu	opo?	ono
	ランピ		tullu	---	eni, oni
	サルドウ		tolu	?opo?	XXX
3) Hente, 1997: 18					
原ブンク・トラキ語		独立形式	*tolu	*o- o(m)paQ	*o-onoN
		拘束形式	*o-tolu	*pato	*nomo
ブンク・ トラキ語群	バホンスアイ		otolu	opaa	onoo
	ブンク	ブンク	otolu	opaa	onoo
		ランダウエ	otolu	opaa	onoo
		ロウタ	otolu	opaa	onoo
		トレテ	otolu	opaa	onoo
		トウラハバトウ	otolu	opaa	onoo
		ワイア	otolu	opaa	onoo
	コロニ		otolu	opaa	onoo
	クリスス		otolu	opaa	onoo
	モリ・バワ		otolu	opaa	onoo
	モロネネ	モロネネ	otolu	opaa	onoo
		トコトウア	otolu	opaa	onoo
	タロキ		otolu	opaa	onoo
	ワウオニイ	メヌイ	otolu	opaa	onoo
		ワウオニイ	otolu	opaa	onoo
	モリ・アタス		otolu	o:mpa	o:no
	パドエ		otolu	opaa	onoo
	トマディノ		otolu	oompa	oono
	コデオハ		otolu	(ooba)	onoo
	ラハンプ		otolu	(o?oba)	o?ono
	トラキ	アセラ	tolu	(omba)	o?ono
		コナウエ	otolu	(o?omba)	onoo
		ライウイ	otolu	(ooba)	onoo
		メコンガ	otolu	(o?omba)	o?ono
		ウィウィラノ	tolu	(oomba)	onoo
	ワル	ラロメルイ	otolu	(omba)	o?ono
		ワル	otolu	(o?oba)	o?ono

(上位) 語群名	言語名	方言名 採録地等 ¹⁾	原オーストロネシア語再構形		
			*təlu(「三」)	*ə(m)pat「四」	*ənəm「六」
ムナ・ブトン語群	チアチア	Batuata	təlu	paʔa	noʔo
		Bola	təlu	paʔa	noʔo
		Mambulu	təlu	paʔa	noʔo
		Wabula	totolu	popaʔa	noʔo:
		Wali	totolu	paʔa	nonoʔo
	ラサリム		təlu	pata, paton	ʔoʔalu
	北トゥカンブシ	Wanci	təlu	---	noʔo
		Kaledupa	(to)to:lu	---	nonoʔo
	南トゥカンブシ	Tomia	təlu	paʔa	noʔo
		Binongko	təlu	paʔa	noʔo
	原ムナ・パンチャナ		*təlu	*paa	*noo
	ムナ	Bombonawulu	təlu	ʔapa	no:
		Kadatuang	təlu	paa	ʔana
		Katobengke	(tiga)	ampat	ʔanam
		Kolowa	talū	ʔapa	ana
		Lakudo	toluahu	patahu	nomuʔahu
		Lombe	toluahu	patoʔonu	nomoʔou
		Mawasangka	təlu	paa	no:
		Molona	təlu	ʔapa	no:
		Siompu	təlu	pa:	no:
		Siompu	təlu	pa:	no:
		Wasionata	təlu	pa:	noʔo
	パンチャナ	Kalende	totolu	ʔopa	noʔno:
		Lawe	tolu	ʔapa	ʔana
		Lambusango	tolu	wapa	ʔana
		Palewata	tolu	ʔampa	ʔana
ウオトウ・ウオリオ語群	ライヨロ	バランバラン	talū	apa	ana
	ウオトウ		talluango	patanjo	ana
	カマル		(tiga)	ʔampat	ʔana
	ウオリオ		talū	ʔapa(pata)	ʔana
系統未決定 ⁴⁾	レモラン		talū	apa	ʔini

4) SIL は南スラウェシ上位語群に属するとしている (SIL, 2025)。山口はブク・トラキ語群に属する可能性があるとしている (山口, 2003: 179-180)。

(上位) 語群名	言語名	方言名 採録地等 ¹⁾	原オーストロネシア語再構形		
			*təlu(「三」)	*ə(m)pat「四」	*ənəm「六」
原南スラウエシ語			*təllu	*əppa(t)	*ənnəm
南スラウエシ (上位) 語群	コンジョ	海岸	tallu	ʔaʔpaʔ	annaŋ
	マカッサル	ゴワ	tallu	appaʔ	annaŋ
	スラヤル		tallu	ʔappaʔ	anaŋ
	ブギス	ルウ	təllu	əppaʔ	ənnəŋ
		ボネ	təllu	ʔəppaʔ	ənnəŋ
	チャンパ ^ラ ギ ^ア ン		tallu	təllu	appaʔ
	アラッレ・タブ ^ラ ハン	アラッレ	tallu	appaʔ	unnuŋ
		マンビ	tallu	appaʔ	unnuŋ
		タブ ^ラ ハン	tallu	uppa	unnuŋ
	マムジュ	マムジュ	talū	pataʔ	ʔanaŋ
		シニョニョイ	tallu	pataʔ	ʔunuŋ
	マンダル	バラニパ	tallu	ʔapeʔ	ʔanaŋ
		マジエネ	talū	ʔape	ʔanaŋ
		マルンダ	tallu	ʔappeʔ	ʔanaŋ
		パンボアン	tallu	appeʔ	annaŋ
		センダナ	tallu	appeʔ	annaŋ
	マッセンレン ^ブ ル	エンデカン	tallu	ʔaʔpaʔ	anan
	タエ	ロンコン・アタス	tallu	ʔappaʔ	anan
		ロンコン・ハ ^リ	tallu	ʔaʔpaʔ	anan
	トラジャ	マカレ	tallu, tallo, tattallu	ʔaʔpaʔ	anan
	ピ ^ト ウ・ウル ^ナ ・サル	ランテ ^ブ ラハン	tallu	ʔappaʔ	ʔanan
		バンバン	tallu	ʔappaʔ	ʔanam
		メハラアン	tallu	ʔappaʔ	ʔanan
	ウルマンダ	ボッテン	tallu	ʔuppaʔ	ʔunuŋ
		タッパラン	tallu	ʔupaʔ	ʔunnuŋ
	セコ・トゥンガ		italu	ʔupaʔ	unuŋ
	セコ・パダン	ホノ	italu	upaʔ	unuŋ
	タンコウ		tallu	uppa	unnu

ジョグジャカルタの言語風景：ジャワ語とジャワ文字について

Linguistic landscapes of Jogjakarta and its vicinity: Javanese language and Javanese letters, Bahasa Indonesia, and English

三宅良美（秋田大学）

Yoshimi MIYAKE (Professor Emeritus, Akita University)

Abstract

This paper examines the current situation of the linguistic landscape of Jogjakarta and its vicinity, focusing on the use of Javanese in the context of public writing and announcements, where one might expect that only the national language Indonesian would be used. For example, public announcements in Adisutjipto Airport and Yogyakarta International Airport are not only in Indonesian and English but also in High Javanese (Krama). Aksara Java—traditional Javanese writing based on a script derived from Sanskrit—is observed on street signs, restaurant signs and shops. We will discuss how this is interpreted differently by Javanese and non-Javanese. This paper will also consider the usage of Low Javanese (Ngoko) in contexts such as Dagadu T-shirt shops, and the fact that only Indonesian and not Javanese is used in anti-government demonstrations. I argue that analysis of the linguistic landscape in Jogjakarta reflects various oppositions, that is, feudalism vs. democracy, tradition vs. modernity, and conservatism vs. radicalism.

イントロダクション

言語風景研究とは、言語と political/social/economic/psychological との間の関係、公的空間に現れる多様な形態の言語を考察するものである。誰が、どんな言語を、またその言語のどの側面を発信し、その背景は何か。受信者は誰か、そこから何を受信するのかを研究するものである(Shohany 2010)。この研究は言語と、政治、社会、経済、時事問題、文化間のダイナミックな関係を考察する通学的研究であり、政治学、社会学、文化人類学等のアプローチが必要とされる。本論は、従来の言語風景研究に一つの提言をするものである。言語風景の発信者と受信者との間の二次元的な言語コミュニケーションとしてみなすよりも、発信者には多様な意図があり、受信者もまた、出身地、階級、世代により、極めて多様で動的であることを、かつてオランダの植民地であり、日本も支配したことのある多民族、多言語、多宗教のスーパーダイバーシティの国インドネシアの観光地のひとつであるジョグジャカルタ特別区と周辺の地域を例に論じていく。

ジャワ人は、気高いジャワ語、ジャワ文化を持ち続けているプライドと使命をもって来た。しかし、この使命こそが、多くの現代のジャワ人にとっては重荷と感じられている。

本論は、ジャワ文化を代表する王家を背景にする観光都市であり、また、学園都市としても名高いジョグジャカルタで話されるジャワ語こそが正しい高貴なジャワ語としてみなされていること、ディアスポラ・ジャワ人にとっては、ジョグジャカルタのジャワ語はノスタルジアをかきたてるものであること、そして、そのジャワ語は、多くのジャワ人が「自分はうまく話せない」と恥ずかし気に語る、高ジャワ語である。エアポートや電車内アナウンスにはどのような言語形態があるのかを考察するために、音風景についても論じる。

また、近年増加したジャワ文字のレストランの看板や道路名についても論じたい。今日のジャワ人自身が日常使わなくなっているジャワ文字が何を意味するのかを考察する。

さらにまた、昨今の興味ある事象、1. 低ジャワ語 *Ngoko* の再評価 2. ファストフードに見られる英語のみの看板とメニューについても論じ、グローバル化や近代化だけでは説明できない、ポストコロニアルの状況、元植民者の言語、貴族言語、学生言語、観光向け言語、がジョグジャカルタではどのように現れているのか報告する。

2. メソッド

言語風景の調査法はその風景の記録を行う。ジョグジャカルタの目抜き通りである。マリオボロ通り (*Malioboro*) 通りの看板やサイン、宮廷やその境界にある通りのサイン、ファストフード・レストラン、多くの国際観光客が泊まるプラウィロタマン (*Prawirotaman*) 地域 (宮廷から南に 2 キロほどの地域にある、など、数多くの通りやレストランを記録し、2024 年 10 月および 2025 年 3 月ジョグジャカルタの人々にインタビューを行った。2025 年 3 月 19 日には、お土産品モール、バティックショップ、カフェ・レストラン・シアターをもつ *Hamzah Batik* の経営者 *Hamzah* 氏 にインタビューを行った。



図 1. 中部ジャワの観光地を示す地図 (Google より)

3. スピーチ・レベルのある言語：高ジャワ語と低ジャワ語

私が行ったジャワの人々へのインタビューやアンケート (2023, 2024) の結果によると、日常、年配の人や親に *Krama* でジャワ語を話す人はごく少数の人々となった。ジャワ語の場合、*Krama* は、インターロキューター同士の *kehormatan* ‘敬意、respect’ を表す言語 (Poedjosoedarmo 2019) であると認識されている。しかしながら、その使用法をほぼ完璧に習得していなければ、相手に失礼だと認識されやすい。空港や電車内など、公的なところでのアナウンスは、ジャワ語の場合、*Krama* が用いられる。結婚式などの式典における司会も同様である。

言語風景研究の対象にすると、高ジャワ語とサンスクリットを基盤としたジャワ文字が想像されるだろうが、本論は、広域にわたる言語現象を対象とする。観光客、ヴィジター向けの空港・電車のアナウンスメントの「音風景」や、道の標識、ポスター、看板、フェスティバル・テーマ、など、観察の対象は多岐に渡る。その中で、主に次の 3 項目について考察する。

3.1. 空港、電車内アナウンスで聞くジャワ語

宮廷地域、ジョグジャカルタ南部とのジョグジャカルタの言語はジャワ語である。言語風景として、観光者に提示されるのはジャワ語であるが、その観光客も、多くは、基本的にジャワ人、つまり、ディアスポラ・ジャワ人である。ディアスポラ・ジャワ人にとって、ジョグジャカルタに入って聞くジャワ語は、美しい故郷を具現するものである。おそらくは、すでに使うことが難しいこの気品あるジャワ語は、ジャワ人としてのアイデンティティやジャワ文化を再確認、再認識させるものである。

首都ジャカルタからの観光客には中国系やスンダ人、その他の人々も多い。「美しく美しい」高ジャワ語は、聞く者に、エキゾチックな、貴族文化の体験を提供してくれる。

3.2. 食生活に根付いたかと思われるファスト・フードやデリバリーのメニューにみられる言語

ここではジャワ語どころかインドネシア語もほとんど不在であり、メニューアイテムのほとんどは英語で書かれている。これらの英語メニューについて報告し、論じる。

3.3. 新カジュアルファッションブランドや村落のフェスティバルの言語

近年若者たちが、ファッションブランドやホステルを立ち上げるケースが目立ってきている。このような人たちの間で、ジャワ一般の言語文化を見直す傾向がある。アーティストや大学生らにより、Ngoko の再評価が始まったとみられる。フェスティバルのテーマ、若者ファッションのブランドなどを例に、この現象について報告、考察する。

ジョグジャカルタには、伝統的な宮廷文化と、道化のキャラクターにみられる大衆文化、階級言語に現れるフォーマリティーや封建主義が残る。一方で、数多くの大学がこの町にあるということから、若い学生たちの民主主義、平等主義意識もまた顕著である。性的マイノリティーやトランス・ジェンダーが活躍する場を提供してくれるのもジョグジャカルタである。このように、相対するものが複数の次元で常に共存しているのがジョグジャカルタであり、それが言語風景にダイナミックに変化を見せながら顕現する。

3.4. ジョグジャカルタ空港と、空港シャトル電車のアナウンスメント：高貴なるジャワ語、ノスタルジア、エキゾティズム

Jogjakarta 空港では、搭乗のアナウンスメントが三つの言語で行われる。インドネシア語、英語、ジャワ語の順で行われる。すべてのアナウンスメントは女性の声で、高ジャワ語（Krama）で話される。以下がジャワ語のアナウンスメントの例である。

(1) Para penumpang, penerbangan Garuda Satunggal Kalih Tiga dhateng Jakarta
sapunika sampun sedia dipuninggahi.

“ご搭乗の皆様、ガルダ航空ジャカルタ行 GA 123 号便が只今ご搭乗の準備が整いました。

このジャワ語のアナウンスはいくつかの国際空港でも行われている。1980年代後半からスハルト体制のもと、とくに女性を中心に、人口密度が極めて高いジャワからの国内移民政策に加えて、海外就労推進政策がとられるようになり、多くの女性が家政婦として中東に向かった。中卒女性で、多くが村落出身であった。最初に国際空港でジャワ語のアナウンスが行われるようになったのはドバイ空港であった。最初に流れるアラビア語も、次の英語も理解しない人が多かったために、ジャワ語のアナウンスメントを付け加えたのが最初だという。2015年、プラハに住まうジャワ人の女性が空港アナウンスの仕事始めた。

それでは、空港のアナウンスがなぜ国家語インドネシア語ではなくて、地方語のあるジャワ語なのだろうか。ジャワ語はインドネシアにおいてもっとも多くの人に話されている言語である。ジャワ語話者数は、ディアスポラ・ジャワ人も含め1億を超えるが、それでも2億5千万の人口を抱える大国家インドネシアにとっては、ジャワ語は地方語のひとつとみなすべきである（Pabottingi 1990）。

CNN 2017年8月のインタビューによると、ドバイからインドネシアに向かうインドネシア人乗客の中には、Gate number や、flight number, boarding といった言葉が、英語やアラビア語では理解できない人が多い、そのため、ドバイ空港を皮切りに、オランダ・アムステルダム・スキポール空港、次にジョグジャカルタ国際空港、スラバヤ空港においてジャワ語の Krama によるアナウンスメントが続くようになった（Tribun Jatim 2017）。

ドバイ空港は、ジャワ語でアナウンスできる人を公募、そこで選ばれたのがプラハに住むジャワ人女性 Widya だった。

Dubai 空港のジャワ語アナウンサーWidya は、自己がアナウンスするジャワ語について次のように語る。

「ジャワ語は前近代的で古臭い言語だと考えられています。しかし、ジャワ語の美しさとオリジナリティは、世界中に住まうジャワ人を統一するのに不可欠なツールなのです。私は、言語は国の人々を統一するツールのひとつだと強く考えています。言語はアイデンティティの重要な部分をなしていると思います。私は外国でずっと住むことになるかもしれないし、もっと他の言語を話していきることになるかも知れませんが、どこにいてもジャワ人であり続けます。ジャワ語でアナウンスが流れることは、長らく忘れてしまっていたり置いてきぼりにされていたジャワ人としてのアイデンティティーを活性化させることなんです。（Widya, Dubai 空港アナウンサー）

ディアスポラ・ジャワ人たちは、この高ジャワ語のアナウンスを聞いて、搭乗時間についての情報がわかると同時に、はるかかなたの故郷ジャワへのノスタルジアを感じる。さらに付け加えると、空港で放送されるこのジャワ語は100パーセント高ジャワ語であり、ドバイを出る多くのジャワ人にとって日常つかう大衆言語形態の Ngoko ではない。多くのジャワ人が、「自分は話せない」と言っている高ジャワである。ジャワ人らはこの「美しく美しい」ジャワを異郷のドバイで耳にしノスタルジアに酔い、おもわず笑みを浮かべる（YouTube 2017）。国際空港でのアナウンスにジャワ語が加えられるという新しい音風景は、さらに、バリの Ngrah Rai 空港、スラバヤの空港にも採用された（Tribun Jatim 2017）。これらインドネシアの空港アナウン

スでは、Ngrah Rai では、インドネシア語、英語、バリ語 (*alus* ‘高バリ語’)の順で、ジャワの空港では、インドネシア語、英語、ジャワ語 (Krama ‘高ジャワ語’) の順でアナウンスがある。

2010 年以降、インドネシア人による国内旅行の伸び率は大きく伸びた。これはインドネシア人の中産階級の台頭（倉沢）と呼ばれてきたが、とりわけ大都市に住まうインドネシア人は、国内を観光し始め、ジョグジャカルタと、もう一つの王国小都市であるスラカルタ（Surakarta/Solo）を訪れ、大都市の高層ビル、環境汚染、騒音問題、スラム化とは一線を画したジャワの王宮都市、高貴なふるまいと気高い言語、ゆったりとしたガムランの音楽、優雅な踊り、Gudeg という、ジャックフルーツを黒砂糖を入れて煮た甘味の強いジョグジャ料理に癒されるのだという。

低ジャワ語 Ngoko は、高ジャワ語 Krama に対し、粗雑で品性に欠け、無礼な言語形態とみなされている。ジャワ語の使用状況について尋ねられ、「ジャワ語はあまり話しません」や、「ジャワ語を話すことはできません。」とジャワ人が答えるときは、Krama を正当なジャワ語とみなされなければならない、という無意識の固定概念が働いている。一部を除き、ジャワに住まうジャワ人がジャワ語でコミュニケーションしているにも関わらず、Krama を使いこなせないと感じているがために、「ジャワ語をあまり使いません。」ということが多い。Javanologist の伝統的役割はこの、消えつつある階級言語の維持にある。この意味で、高ジャワ語を話す人が少なくなった事象をもっとも憂うのは Javanologist でもある。

3.5. ジャワ文字

2000 年以降、ジョグジャカルタではそれぞれの文字が道の標識やレストランの看板でみられるようになった。1998 年のレフォルマシと、ジャワ語のソフトウェアが開発されてからは、ジャワ文字は自由に印刷できるようになったことからジャワ文字のリバイバルが始まったと考えられる。しかしながら、現実には、ジャワ文学を学んだ学生以外の人には文字を読めない。現代のジャワ語は話し言葉であり、表記するときには、インドネシア語と同じようにローマ字である。ジャワ文字 Aksara の看板を掲げているレストランのレジや宮廷に仕えている *abdi dalem* に、Gamelan の楽器（ガムランの楽器 *kempul* や *Gong* など）の裏に書かれている Aksara をどのように読むか尋ねたところ、実際に読む人はいなかった。空港やエアポート電車で聞くアナウンスのように、ジャワ文字もまた、ディアスポラ・ジャワ人にとってノスタルジアを駆り立ててくれるアイテムである。ジャワ人ではないインドネシア人にとって、この文字はまた、エキゾティズムを感じさせてくれ、異文化体験を提供してくれるアイテムである。Aksara は小学校のジャワ語の授業でどのように読むかは学ぶ。しかし、現実には使用していないことから、実用されていない。そのようななか、2000 年以降、道の名称やレストランの名称に、ラテン文字の下に Aksara が増えたのは、これもジャワ文化の再確認と再認識の結果であると思われる。増加した国内旅行者の前でジョグジャカルタを中心にした王宮文化を代表するもののひとつとして、この Aksara が使われている。

宮廷内の各ブロックや道路名はローマ字の下にジャワ文字がやや小さめに書いてある。

図 2. ジョグジャカルタ 宮廷地域の道路名とカンブン名。 道路名の下にジャワ文字が付け加えてある。



図 3. バティックとお土産品店

Batik Hamzah の入口 March 22, 2025 バティック・お土産品、シアターをもつショッピング・モールの入り口にある看板。経営者である中華系ビジネスマン Hamzah のもう一つのエゴ Raminten の顔写真のすぐ上に Sugeng Rawuh（いらっしやいませ）とローマ字で書かれ、その上にジャワ文字がある¹。

3.6. ファストフードの看板とメニュー

インドネシアのファストフードやカフェの看板やメニューの言語はほとんどが英語である。



図 4. Mixue のメニュー (Google より)

英語国発のものでないメニューなら、そこに少数のオリジナルの言語アイテムが追加されている。日本発のラーメンなら、日本語語彙が英語のメニューに散見され、ピザなら、イタリア語が英語のメニューに散見される。Mixue や Momoyo のような、中国発のパラーにあるアイスティーとソフトクリームがメニューのパラーのメニューも英語である。

日本のラーメンにとっても近いラーメン屋も増えた。メニューは、ローマ字の日本語か英語である。ジョグジャカルタの人々に、「メニューが英語でしか書かれていないのに、誰もがこのメニューが読めるのですか。」と尋ねると、「写真でみているから子供でもみんなわかるんです

¹ Hamzh 氏に 2025 年 3 月 19 日ご自宅でインタビューができた。その 3 週間に Hamzah 氏の訃報が入った。とても親切に応待してくれた。糖尿病が進行しつらそうではあったが、よく答えてくださった。突然で驚いている。ご冥福を祈る。

よ」。と答えており、国際化しているネットゲームに慣れた子供たちにとってはメニューが英語であることに気をとめていないようだった。

メニューに書かれている言語が、作る人、食べる人の言語でもない状況は理解しがたいが、インドネシアにおいては、この、全面的に英語のみで提示される食べ物や飲み物がごく普通のこととなり、「読めないから買わない」という返答はなかった。

日本におけるマクドナルドやKFC、ましては日本発のロッテリアのような、アメリカンスタイルのファストフードでは確かにメニューの英語をそのままカタカナ表記にしている。それでも「昼マック」、「てりやきチキン」、「ダブチ」といった **coining** が行われてそれが売る側と買う側の両方で通用しているようだ。一方、インドネシアのファストフードメニューにはそうしたコイニングが見られない。宣伝文句には、下記の、McDirumah 「おうちマック」、独立（記念日パーティー）というのが見られ、インドネシア語が使われているが。



図 5. バーガーキングのメニュー(独立記念日パーティ) (Google より)

強いというのなら、McDirumah 「おうちマック」の写真にあるように、目玉商品はもともとジャワにもあるフライドチキンである。バーガーキングのメニューにあるように、フライドチキンだけはインドネシア語の表記があり、しかもそのフライドチキンにはパンではなくご飯がついている。メニューのほとんどが英語であるのにたいし、フライドチキンだけは、インドネシア語の名称で書かれていることに注意したい。

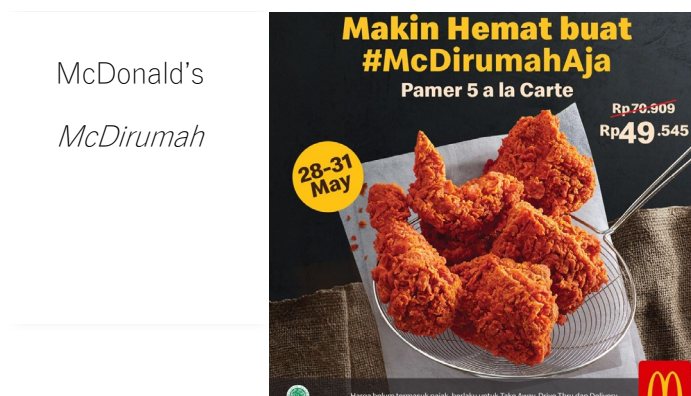


図 6. マクドナルドの看板 (Google より)

「おうちマックだけさらにおとく」とインドネシア語で書かれている。ハンバーガーではなく、この地域には古くからある鶏の揚げ物がお得の品であることに注意したい。

ファストフードのメニューから：英語とジャワ語



図 7. Bangor ハンバーガーショップのメニュー（Google より）

ジャワ語のウィットが感じられるメニューが、ジョグジャカルタ発のファストフードハンバーガーショップ Bangor にみられた。ショップウィンドウだけで、基本的には座って食べるところのない店なので、ほとんどの人は持ち帰りか、デリバリーで買う。ジャワ語の動詞化の鼻音接頭辞をつけて、*ng-Bangor* という（バゴールする）も生み出している。このハンバーガーのメニューでは、ハンバーガーのサイズの名称が、ジャワ王宮のヒエラルキーと呼応している。ハンバーガーのサイズを大きいものから小さいものにしたものがメニュー表に並んでいる。

4 層の牛ひき肉パティが挟んである最も背の高いハンバーガーが *Sultan* スルタン、つぎに 3 層バーガーが *Ningrat*（貴族）、次に、*Juragan*（家来）、最後に、*Jelata*（平民）という名前である。中身は、BBQ Smoked beef, Hotdog, Chili dog, Cheese fries, Nachos fries, Rolls と英語だけである。この、ジャワの王国のヒエラルキーをハンバーガーの命名に使うというのはいかにもジャワらしいウィットである。この 4 つの名称のうち、今日ジャワ語としてのみ使われているのは、*ningrat* のみで、他の 3 つの単語はインドネシア語になっている。上のフライドチキンと同様に、チキン・サンドウィッチは、*pitik* ‘鶏’とジャワ語で命名されている。なお、Bangor とは、「いたずらっこ」の意味。ジャワらしいユーモアが現れている。

3.7. 低ジャワ語のリバイバル？カキリマ文化

1998 年 UGM の建築家の卒業生が集まってつくったのが、T シャツとサンダルのショップ

Dagadu である。Dagadu はネット販売にも手を広め、今ではジョグジャの著名な若者ファッション店の代表として君臨している。

店の名称の Dagadu もまた、ジャワ語のことば遊びの産物である。もとのことばは、口で言うのがはばかれる罵倒語 *matamu* ‘lit.お前の眼！’である。この *Matamu* をジャワ文字 にして、そのジャワ文字のアルファベット表——これは、実際には 16 の文字が、日本語の「いろはにほてと」に似て、それぞれの音韻が一度だけ出てくる詩となっている——これが、4 行、4 列にならべてある。うち、第 4 行にある m、t、（第 2 行）、再び第 4 行にある m を、それぞれ、第 2 行、第 4 行、第 2 行のシラブルと交換し、母音の /a/, /a/, /u/ を残すと、Dagadu になる。つまり、Dagadu は、*Matamu* の子音を 2 行違いの子音と交換した結果である（下記表 1 参照）。

あえてジャワ語の罵倒語をベースにしたブランドをうちたて、ジョグジャの若者ファッションとして確立させた例のひとつである。



図 8. Dagadu T-シャツショップの商標 罵倒語 *Matamu* (‘Lit. おまえの眼’) にかけていて、商標は「目のかたち」をしている。(https://dagadu.co.id より)

ha	na	ca	ra	ka
da	ta	sa	wa	la
pa	dha	ja	ya	nya
ma	ga	ba	tha	nga

表 1. ジャワ文字 Aksara のアルファベット表

(www.shutterstock.com より)。上左から読む。Ana caraka data sarala. Padha jawanya. Waga bathanga. ‘二人の大臣がいて、争っていた。ふたりの力は同じだった。（それで）両者共倒れになった。

3.8. 反政府デモ

ジョグジャカルタは学生街であり、インドネシアの新世代、民主主義を育んできた。この 2015 年、庶民派の Jaka Widodo(ニックネームはジョコウィ。このアクロニムを推して大統領当選に導いた街でもある。しかしながら、Jaka Widodo が第 2 期も制し退くときには、最初の選挙で宿敵だった Prabowo に、ジョコウィ自身の 30 代の息子が副大統領候補としてタッグを組んで、出馬、選挙で勝利した。この時、インドネシア中の人々はジョコウィに失望し、反対デモを始

めた

ポスター、バンナーには次のインドネシア語の詩が書かれている。それぞれの行の下に日本語訳を付ける。

1. ‘Tanam Padi Tumbuh Pabrik,
稲を植えて工場が建つ
2. Tanam Jagung Tumbuh Gedung,
トウキビ植えてビルが建つ
3. Tanam Modal Tumbuh Korupsi’
資本を植えて汚職が育つ
4. Seret 3 Setan,
サタンの三つ巴が
5. Bangun Budaya Tanding,
争いの文化を作る
6. Hancurkan kapitalisme,
Militarisme, Sisa Feoda
資本主義、軍国主義、封建主義の名残りを倒そう

(Wisang Seto Pangaribowo, Reni Susanti 2024)。



図 9：ジョグジャカルタ宮廷の来

た広場前にバンナーを開いてデモの準備をする若者たち。Kompas.com, October 20, 2024.

学生たちは、宮廷の前から北に向かう目抜き通りマリオボロ通りに集合し、バンナーを掲げた。抗議のメッセージは、インドネシア語のみで書かれている。「3人のサタン」と痛烈に批判されている元大統領ジョコウィ、新大統領プラボウォ、新副大統領でジョコウィの長男ギブランもジャワ人であるのに対し、インドネシア語の詩で抗議するのは、ジャワ語そのものが封建主義の名残りであること、そしてまた、この反対運動が、ジョグジャカルタだけの運動ではなく、インドネシア全体の運動であるからであると考えられる。

4. まとめ

言語風景の研究は、国際化に伴う多言語化などのコンテクストで語られることが多い (cf. Kallen and Dhonnacha 2010)。オランダの植民地や日本の支配を経て、今日のインドネシアは、どの使用言語もローマ字で書かれており、オランダ語、英語、中国語の語彙に加え、日本語の語彙もしばしば見られる。こんにちでは、当然、日本語の文字が書かれた T シャツやジャケットはファッションアイテムである。

海外からのヴィジターが常にいたジョグジャカルタの言語風景は、本来のジャワ語、国家語のインドネシア語、国際語英語が常に存在していた。本論は、この、既に「国際化」しており、海外のヴィジターがいたジョグジャカルタにおいて、現在どのような言語風景のマッピングができるかを試みたものである。

ジャワ語は二つの相反する感情をとまなう。不安と安堵感である。高ジャワ語を正しく話せていないのではないかという不安は、高ジャワ語を話して「ジャワ人」(Geertz 1965) にならなければならないというプレッシャーに変わっていた。しかし、そのようなプレッシャーを受け入れる姿勢は今日の子供たちにはない (cf. Argo Pratomo nugroho, Jon Hertog)。一方で、ジャワ語は、ジャワ人としてのアイデンティティをかきたて、ジャワ人としての安堵感と穏やかな気持ち (*tentrem*) をもたらしてくれるものである (Mas Jon)。

言語風景はジョグジャカルタ特別地区のジャワの多次元的状况を反映している。ジョグジャカルタ空港や電車で聞くジャワ語と、ドバイ国際空港等で聞くジャワ語は高ジャワ語である。ジャワ人は、このジャワ語を聞いて、搭乗のインフォメーションを理解すると同時に、ジャワへの憧憬とノスタルジアにひたることができる。ジャワの外からのツーリストにとっては、ジャワ語のアナウンスやジャワ文字は、エキゾチックな「ジャワ的なもの」の体験を提供してくれる。

ジョグジャカルタの宮廷境界の道路名はローマ字で書かれ、その下にジャワ文字が付随している。これもまた、ジャワ人にとっては、ジャワ人としてのアイデンティティとノスタルジアを提供してくれるものであり、旅行者にとってはエキゾチックな、ジャワならではの体験となる。

一方で、ジョグジャカルタとその周囲の町は多くの学生を抱え、その文化は、創造性に満ち、ラディカルで、ポップ・カルチャーをも楽しむ。伝統ガムランや民族楽器とポップ音楽の楽器の融合体もよくある。この特徴は伝統的な王宮文化の正反対の位置にある。学生たちは、Kaki Lima 文化 (屋台や道端の物売り、市場の文化) を再活性化しようと、Ngoko のため口、罵倒語をブランド名にし、T シャツとサンダルファッションを中産階級の若者ファッションに切り上げた。この、低ジャワ語の再活性化、新しい価値づけは、ポピュラーなレストランやトランス・ジェンダーの店、劇場にもみられる (cf. Hamzah p.c.)。誰もがスマホをもち、SNS アカウントをいくつか持って、写真やビデオを送り合うインドネシアの人たちにとって、ジャワ語とジャワ文字は、再び文化価値を与えられ、言語風景となって再生したと考えてもよいのではないか。

References

- Geertz, Clifford, 1976. *The Religion of Java*. The University of Chicago Press.
- Kallen, Jeffrey L. and Esther Ni Dhonnacha, 2010. Language and inter-language in Urban Irish and

Japanese Linguistic Landscapes. In Shonany, E. E. Ben-Rafael, and M. Barni (eds), *Linguistic landscape in the city*. Pp.3-18.

倉沢愛子 1996 「開発体制下のインドネシアにおける新中間層の台頭と国民統合」『東南アジア研究』34 : 1 : 100－126.

Shohany, Elana, Eliezer Ben-Rafael, and Monica Barni (eds). 2010. *Linguistic landscape in the city*. Multilingual Matters.

Poedjosoedarmo, Soepomo, 2017. *Language propriety in Javanese*. Journal of Language and Literature: Vol 17, No 1:1-17.

Wisang Seto Pangaribowo and Reni Susanti. 2024. Pelantikan Presiden Prabowo disambut demo di Yogyakarta. *Kompas.com*. October 20.

山川和彦 2020 『観光言語を考える』くろしお出版。

補文標識 *untuk* に導かれる補文について¹

Klausa pemerlengkapan yang didahului oleh pemerlengkap “*untuk*”

安田和彦（京都産業大学）

Kazuhiko YASUDA (Universitas Kyoto Sangyo)

Abstrak

Kata *untuk* tidak hanya dapat membentuk frasa preposisional yang diikuti langsung oleh nomina, tetapi juga dapat diikuti langsung oleh verba. Penggunaan *untuk* yang diikuti verba ini dapat muncul langsung setelah verba transitif berafiks *meN-* yang berfungsi sebagai predikat klausa utama, atau setelah frasa nomina yang langsung mengikuti predikatnya. Dalam penelitian terdahulu, bentuk ini dipahami sebagai klausa pemerlengkapan yang didahului oleh pemerlengkap *untuk*, di mana subyek klausa pemerlengkapan dilesapkan dengan mengacu pada subyek atau obyek dari klausa utama sebagai anteseden. Pada prinsipnya, makalah ini juga mengikuti kerangka analisis tersebut.

Namun, dalam kenyataannya, subyek klausa pemerlengkapan tidak senantiasa dilesapkan, melainkan dapat dinyatakan secara eksplisit. Lebih lanjut, terdapat juga konstruksi di mana anteseden subyek yang dilesapkan tidak hadir di klausa utama, sehingga harus direkonstruksi berdasarkan konteks wacana. Fenomena demikian belum dibahas dalam penelitian terdahulu.

Makalah ini mengkaji contoh-contoh klausa pemerlengkapan yang didahului oleh pemerlengkap *untuk* yang belum tercakup dalam penelitian terdahulu, serta bertujuan menjelaskan ciri-ciri semantis verba transitif berafiks *meN-* yang mengambil klausa pemerlengkapan, struktur sintaksis yang ditentukannya, kemunculan dan peran semantis komplemen dalam klausa utama maupun klausa pemerlengkapan, referen subyek klausa pemerlengkapan, serta perilaku gramatikalnya.

1. はじめに

インドネシア語の *untuk* は、前置詞として直後に名詞を取り前置詞句を作るだけではなく、直後に動詞を取ることができる。そして、この *untuk* に動詞が後続する形式²が、主節述語に当たる *meN-*他動詞の直後、または直後の名詞句に続く位置に現れる用例が見られる。以下にその例を挙げる。

- (1) Di sela-sela, jadwal tersebut, Presiden³ **memutuskan *untuk* (Ø=presiden)⁴ melakukan⁵** Rapat Terbatas pada Senin (20/1) pagi.
- (2) Sampai akhirnya pihak kampus **mengizinkan kami *untuk* (Ø=kami) mendapatkan** tempat kerja di Asrama Sangkuriang ITB.

¹ 本稿は 2024 年 11 月 23 日に立命館アジア太平洋大学にて開催された日本インドネシア学会第 55 回大会において行った研究発表「補文標識 *untuk* に導かれる補文について」を基にまとめたものである。

² *untuk* に動詞が後続する用例には、副詞句、または形容詞句と捉えられるものもある。

³ 以下、*untuk* に後続する動詞の省略されている主語の先行詞に下線を引いて示す。

⁴ 以下、*untuk* に後続する動詞の省略されている主語と先行詞を()で括り表記する。

⁵ 以下、例文中の主節述語に当たる *meN-*他動詞、*untuk* と後続する動詞を太字で示す。

上記(1)の *untuk melakukan*、(2)の *untuk mendapatkan* のような *untuk* に動詞が後続する形は、数々の先行研究において、補文標識 *untuk* が補文⁶を導き⁷、*untuk* に後続する動詞の主語が、(1)では主節主語 *Presiden* を、(2)では主節目的語 *kami* を先行詞に省略されているものと認識されてきた。本稿においても、(1)、(2)に見られる *untuk* に動詞が後続する形を、補文標識 *untuk* が補文を導き、補文主語が主節要素を先行詞に省略されているものと捉え、主な先行研究二点を挙げ、その概略を示す。

しかし、*untuk* が補文を導く用例において、補文主語は必ず省略されているわけではなく、明示されているものも見られる。さらに、省略されている補文主語の先行詞が主節中に見当たらず、文脈に沿って談話の中から復元しなければならないものも見られる。これらの用例は、先行研究において取り上げられていない。それを踏まえ、本稿では、先行研究において取り上げられていない *untuk* に導かれる補文の用例について考察する。

また、本邦における補文標識 *untuk* に導かれる補文に関する規範文法のさらなる明確化に向け知見を提示する。

2. 先行研究と本稿における考察の方向性

2.1. Lapoliwa(1990)

Lapoliwa(1990)は、当時の変形生成文法の枠組みにおいてインドネシア語の補文について考察し、次のように述べている。

- *untuk* に導かれる補文は、補文が表す動作が（発話の時点で）⁸まだ行われていないことを示す。
- 補文がすでに行われた、または行われている動作を表す場合、*untuk* は用いられない。
- *untuk* は補文主語が表層構造に明示されない場合に用いられる。
- （*untuk* が導くものに限らず）補文において、その主語が主節主語と同一指示の場合、補文主語の省略は義務的である。主節目的語と同一指示の場合は、補文主語の省略は随意的である。
- 一般的に、*untuk* は主節動詞が個人の動作を表す場合に用いられる。
- 特定の文脈において、主節動詞が操作的な動作を表す場合に用いられる（補文標識 *supaya* に代わって、*untuk* が用いられることがある）。
- *untuk* に導かれる補文には主題化と左方転位の二つの文法規則は適用されない。

上述の事柄の証例として、以下が挙げられている。

(3) *Ani menolak untuk* (Ø=*Ani*) *berbicara dengan saya*.

(4) *Dia mencegah saya untuk* (Ø=*saya*) *masuk ke dalam ruangan itu*.

(5) **Dia menyaksikan untuk* *Adi memukul adiknya*.

⁶ 文において補部の位置を占める節を指す。

⁷ *untuk* を前置詞とみなし、動詞句とする先行研究もある。

⁸ 先行研究の要約中に挿入する（）部分は筆者による補足。

- (6) Dia mencegah saya supaya saya masuk ke dalam ruangan itu.
 (7) Dia mencegah saya supaya masuk ke dalam ruangan itu.
 (8) Saya telah **merencanakan untuk** (Ø=saya) **berlibur** ke Bali.
 (9) ?**Untuk** (Ø=saya) **berlibur** ke Bali, telah saya **rencanakan**.
 (10) ?**Untuk** (Ø=saya) **berlibur** ke Bali, saya telah **merencanakannya**.⁹

上記(3)、(4)、(8)は、**untuk** に導かれる補文が表す動作が発話の時点でまだ行われていないこと、(3)、(8)は補文主語が義務的に、(4)は随意的に省略されていることを示すものである。

それに対し、(5)は、補文が表す動作が現在行われている、補文主語が省略されていないという二点により非文とされている。

そして、(3)、(8)は、主節動詞が主節主語「個人」で行える動作を表す際に **untuk** が用いられているもの、(4)は、主節動詞が他人に働きかける「操作的な」動作を表す際に **supaya** に代わって **untuk** が用いられている例である。ただし、(4)が用いられる文脈については特に言及されていない。参考として、主節動詞が「操作的な」意味を持ち **supaya** が用いられている例も(6)、(7)に引用するが、**supaya** が導く補文の主語は(6)のように明示されても、(7)のように主節目的語を先行詞に随意的に省略されてもよいとされている。

さらに、(8)～(10)は、**untuk** に導かれる補文が、主節の meN-他動詞に対し目的語の位置を占めなければならない、主題化も、文頭に移動(左方転位)することもできないことを示している。

2.2. Sneddon et al.(2010)

Sneddon et al.(2010)は、インドネシア語の補文を、それが用いられる構造における必須要素であり、目的語に似ているが、受け身文の主語になることはできないものとしている。その上で、**untuk** に導かれる補文について、次のように述べている。

- 補文動詞が、主節動詞が表す動作より後に行われる動作を表す場合、随意的に、補文が **untuk** に導かれる。**untuk** は用いられなくてもよい。主節動詞によって、補文に **untuk** を取ることがほとんどないものと **untuk** を欠くことが稀なものがある。
- 補文主語は常に主節の何らかの要素と同一指示であり、**untuk** が導く節は義務的に主語を欠く。
- 補文主語を持たないのと同じように、(動詞以外の)述部を構成する要素をほとんど許さず、**tidak** のみがしばしば動詞に加えられる。
- 補文動詞には受け身形も用いられる。(主節と補文の)二つの動詞は同じ主語を持つ。

上述の事柄の証例として、以下が挙げられている。

- (11) Dia **memutuskan untuk** (Ø=dia) **tidak menolong** mereka.
 (12) Pemerintah **mengizinkan** dia **untuk** (Ø=dia) **menghadiri** sidang.
 (13) Pemerintah **mengizinkan** dia **menghadiri** sidang.

⁹ (3)～(10)は、Lapoliwa(1990)から引用、下線、()の挿入、太字化は筆者による。

- (14) Saya mencoba merokok Dji Sam Soe.
 (15) Saya **mencoba untuk** (Ø=saya) **merokok** Dji Sam Soe.
 (16) Dia **menolak untuk** (Ø=dia) **diperiksa** oleh mereka.¹⁰

上記(11)、(12)、(15)、(16)は、補文動詞が表す動作は、(11)の *tidak* を伴う場合も含め、主節動詞が表す動作より後に行われること、補文主語は主節の主語または目的語と同一指示で義務的に省略されていることを示すものである。

そして、(12)、(13)により、補文に *untuk* を用いるどうかは随意的であることが示される。

また、(11)の *memutuskan* は補文に *untuk* を欠くことが稀な動詞、(14)、(15)の *mencoba* は補文に *untuk* を取ることがほとんどない動詞の例として挙げられている。

さらに、(16)は、補文動詞に受け身形が用いられ、主節と補文の二つの動詞は同じ主語を持ち、補文主語が義務的に省略されていることを示している。

2.3. 本稿における考察の方向性

前述のように、*untuk* に導かれる補文には、上記の Lapoliwa(1990)、Sneddon et al.(2010)では証例として取り上げられていない用例も見られる。

まず、*untuk* が補文を導く場合、補文主語は必ず省略されるわけではない。

- (17) "Karena saat itu susah sekali toko-toko tutup, dan kemudian kita **memastikan untuk kita menyalurkan** bansos secara cepat, dan harus dibungkus tas, maka kita lakukan percepatan yang saya ketahui secara teknis itu yang jadi pertimbangan," tutur Hartono.

上記(17)の引用符中の文では、主節動詞 *memastikan* に対し、その直後に置かれた *untuk* に導かれる補文 (*cepat* までの *menyalurkan* に対する目的語を含む部分) が、発話の時点より後に行われるべき動作を表し、直接目的語となっている。そして、*untuk* に導かれる補文の主語 *kita* は明示されている。

次に、主節目的語を先行詞に補文主語が省略されていると解釈される場合でも、主節目的語が常に明示されるわけでもない。

- (18) Presiden Joko Widodo mengizinkan Menteri Pertahanan (Menhan) Prabowo Subianto maju dalam Pemilihan Presiden 2024. Selain mengizinkan Prabowo nyapres, Presiden juga **mengizinkan untuk** (Ø=Prabowo) **cuti mendaftar** ke Komisi Pemilihan Umum (KPU).

上記(18)の二番目の文では、主節動詞 *mengizinkan* に対し、その直後に置かれた *untuk* に導かれる補文 (文末の(KPU)まで) が、発話の時点より後に行われるべき動作を表し、直接目的語となっている。仮に、主節動詞に対する与格目的語として *Prabowo* を *mengizinkan* の直後に明示すれば、以下のように上掲(2)、(12)と同様の、*untuk* に導かれる補文の主語が省略され主節目的語を先行詞とする形となる。

¹⁰ (11)～(16)は、Sneddon et al.(2010)から引用、下線、()の挿入、太字化は筆者による。

(19) Presiden **mengizinkan** Prabowo **untuk** (Ø=Prabowo) **cuti mendaftar** ke Komisi Pemilihan Umum (KPU).

しかし、(18)では、**untuk** に導かれる補文の主語を **Prabowo** と正しく解釈するために、その先行詞を主節外に求め、文脈に沿って前文から続く一連の談話において復元しなければならない。

次章から、(17)、(18)のような **untuk** に導かれる補文において主語が明示されている用例、また、省略されている補文主語の先行詞が主節中に見当たらない用例について考察していく。それに際し、上記 Lapoliwa(1990)、Sneddon et al.(2010)を踏まえ、以下の事柄を前提とする。

- **untuk** に導かれる補文を取る meN-他動詞には、意味的特徴が見られる。
- **untuk** に導かれる補文は、発話の時点でまだ行われていない動作を表す。
- **untuk** に導かれる補文において、その主語が省略される場合、原則として主節の主語、または目的語を先行詞とする。
- **untuk** に導かれる補文は、主節の必須要素として機能するが、meN-他動詞の直後、または直後の名詞句に続く位置に置かれなければならない、受け身文の主語になること、文頭に移動することはできない。

以上を前提とし、本稿は、補文を取る meN-他動詞の意味的特徴、それによって決定される統語構造、主節、補文における補語の現れ方、意味役割、補文主語の指示対象、文法的振舞い等を明らかにする。

3. **untuk** が補文を導く用例

よく知られているように、文の統語構造は主節動詞によって決定される。それは **untuk** に導かれる補文についても例外ではない。そのことを基本的な認識として、主節動詞の意味的特徴を示し、それぞれに対して考察を進める。

3.1. 主節目的語に影響を及ぼし、補文動詞の動作を行わせようとするもの

主節動詞は、主節目的語に影響を及ぼし、主節目的語に補文動詞が表す動作を行わせよう、または行わせまいとする主節主語の意図、意思、態度¹¹を表す。

主節動詞の意味を受け、**untuk** に導かれる補文は、主節主語が行う動作によって何らかの影響が及ぼされた結果、主節目的語・補文主語が行う、または行うべき動作を表す。

必須補語は、主節主語・主節動詞の動作主、主節目的語・主節動詞の被動作主、補文主語・補文動詞の動作主、補文動詞となる。当然ながら、主節目的語と補文主語は同一指示の関係にあり、主節動詞の被動作主と補文動詞の動作主の二つの意味役割を担う。

そして、主節動詞の被動作主・補文動詞の動作主は、主節目的語、補文主語、省略のいずれかの形を取って現れる。

まず、主節動詞の被動作主・補文動詞の動作主が、主節目的語として明示される形式を示す。

¹¹ Lapoliwa(1990)では、「操作的」と述べられていた。

- (20) PETUGAS DAS¹² yang sebelumnya membicarakan masalah ini dengan Candra dan Ferry akhirnya **mengizinkan kami untuk (Ø=kami) mewawancarai** keempat orang itu.
- (21) Keterbatasan akses informasi ini **menghalangi mereka untuk (Ø=mereka) mengambil** langkah yang tepat dalam karier dan pendidikan.

上記(20)、(21)のような形式は、先行研究にも取り上げられていた。主節動詞の被動作主が主節目的語としてのみ明示され、補文主語は主節目的語を先行詞に省略されているものである。次に、主節動詞の被動作主・補文動詞の動作主が、補文主語として明示される形式を示す。

- (22) "Lihatlah dulu hulunya. Pemerintah juga **mengizinkan (Ø=mereka) untuk mereka menjual** dengan dolar. Lagipula, kalau memang kami melakukan kesalahan sudah lama harusnya PGN dihukum. Tapi karena kami mengikuti aturan, sampai sekarang jalan saja," ucapnya.
- (23) "Kita butuh kebugaran, bahkan saya sudah pernah berkirim surat tentang hal ini, termasuk juga Kadin (Kamar Dagang dan Industri) dan pihak swasta. Kami **meminta (Ø=mereka) untuk mereka menyediakan** waktu satu atau dua jam untuk berolahraga. Ini penting untuk menjaga kebugaran," kata Menpora.

上記(22)、(23)の太字部分を含む文では、主節動詞の被動作主は、補文主語としてのみ明示されている。そして、逆行的な照応関係により、主節目的語の方が省略されている。

(20)～(23)において、必須補語の省略と復元は、主節目的語と補文主語の同一指示関係によって統語的に定められていると言える。

それでは、主節動詞の被動作主・補文動詞の動作主が、主節目的語と補文主語のどちらの形で明示されるのが無標の構文なのだろうか。先行研究では、主節動詞の被動作主・補文動詞の動作主が主節目的語として明示されるもののみを取り上げられていたが、現実には補文主語として明示される用例もかなり頻繁に見られる。疑問について、現時点で明確に結論を述べることはできないが、主節動詞によって傾向が違ってくるのではないと思われる。

先行研究において述べられていたように、補文は、受け身文の主語にすることも、文頭に移動することもできない。主語が省略されていても明示されていても、その点は変わらない。(20)、(23)を基に非文となる例を示す。

- (24) ***Untuk (Ø=kami) mewawancarai** keempat orang itu kami **diizinkan** oleh PETUGAS DAS.
- (25) ***Untuk (Ø=kami) mewawancarai** keempat orang itu PETUGAS DAS **mengizinkan kami.**
- (26) ***Untuk mereka menyediakan** waktu satu atau dua jam untuk berolahraga kami **menta.**
- (27) ***Untuk mereka menyediakan** waktu satu atau dua jam untuk berolahraga kami **memintanya.**

しかし、上記(20)～(23)に見られる主節動詞の被動作主は、主節目的語、補文主語のどちらの形を取っていても、受け身文の主語となることができる。以下が(20)から(23)の **untuk** に導かれ

¹² 大文字は原文ママ。

る補文を含む文または節を基に作られる受け身文である。

- (28) Kami **diizinkan untuk** (Ø=kami) **mewawancarai** keempat orang itu oleh PETUGAS DAS.
(29) Mereka **dihalangi untuk** (Ø=mereka) **mengambil** langkah yang tepat dalam karier dan pendidikan oleh keterbatasan akses informasi ini.
(30) Mereka **diizinkan untuk** (Ø=mereka) **menjual** dengan dolar oleh pemerintah.
(31) Mereka **kami minta untuk** (Ø=mereka) **menyediakan** waktu satu atau dua jam untuk berolahraga.

(30)、(31)は、補文主語が主節動詞に対しても被動作主の意味役割を持つため、受け身文で主節主語に繰り上がるという構造を成している。

続いて、主節動詞の被動作主・補文動詞の動作主が、主節目的語としても補文主語としても省略されている形式を示す。

- (32) Karena orang tua **sudah tidak mengizinkan** (Ø=saya) **untuk** (Ø=saya) **melanjutkan** sekolah karena masalah biaya, maka saya mencari informasi dimana saya bisa sekolah tapi dengan biaya yang ringan.
(33) “Mungkin untuk Sekolah Rakyat kami punya lahan 5-10 hektare di dekat kantor Gubernur Malut,” kata Sherly. Menyambut baik apa yang diutarakan oleh Sherly, Mensos **menganjurkan** (Ø=Sherly) **untuk** (Ø=Sherly) **melakukan** pengajuan lahan pembangunan Sekolah Rakyat secara tertulis ke Kemensos.

上記の二つの用例において、**untuk** に導かれる補文は、(32)では **karena** に導かれる従属節に、(33)では二番目の文に現れている。(32)の主節動詞句 **sudah tidak mengizinkan**、(33)の主節動詞 **menganjurkan** の主節目的語と同一指示の補文主語は、共に必須補語ながら省略され、談話の中から探し出されなければならない。

主節動詞から続く **meN-他動詞+untuk+動詞**という単語の並びだけを見ると、前掲の(1)等、先行研究に取り上げられていた用例と同じように見えるかもしれないが、統語構造は全く異なる。前掲(1)等では、補文主語は主節主語を先行詞に省略されていたが、(32)、(33)では、補文主語は省略されているが、その先行詞は主節主語ではない。

当然ながら、主節目的語・補文主語を復元し主節主語とし、受け身文を作ることができる。

- (34) Saya **sudah tidak diijinkan untuk** (Ø=saya) **melanjutkan** sekolah oleh orang tua.
(35) Sherly **dianjurkan untuk** (Ø=Sherly) **melakukan** pengajuan lahan pembangunan Sekolah Rakyat secara tertulis ke Kemensos oleh Mensos.

(28)から(31)、(34)、(35)のような受け身文の用例は談話においてよく見られる。以下に二例を挙げる。

- (36) Suka tidak suka mau tidak mau kita **dipaksa untuk** (Ø=kita) **hidup** berdampingan dengan tren teknologi.

(37) KOMPAS.com – Italia mengumumkan akan membuka perjalanan masuk dan keluar negara mulai 3 Juni 2020. Keputusan ini diumumkan pada Sabtu (16/5/2020). Pembukaan batas negara ini dilakukan sebagai langkah untuk menghidupkan kembali industri pariwisata yang terpuruk akibat virus corona. Bar, restoran, pertokoan, salon, dan layanan keagamaan akan **diizinkan untuk** (Ø=bar, restoran, pertokoan, salon, dan layanan keagamaan) **dibuka** kembali pada Senin (18/5/2020).

(28)から(31)、(34)から(37)の受け身文では、主節主語と補文主語が同一指示の関係になり、補文主語は省略されている。

3.2. 主節主語が行おうとする補文動詞の動作に対する主節主語の意思を表すもの

主節動詞は、主節主語が行おうとする、または行うべき補文動詞の動作に対する主節主語の意図、意思、態度を表す。

必須補語として、主節主語・主節動詞の動作主、補文主語・補文動詞の動作主、補文動詞を取る。主節主語と補文主語は同一指示の関係にある。

先行研究において、補文主語は義務的に省略されると述べられていたが、そのことは原則的に、ほぼすべての用例に当てはまる。

しかし、一部の用例において、補文主語が省略されていない形が見られる。まず、前掲の(17)がその一例である。再掲する。

(17) "Karena saat itu susah sekali toko-toko tutup, dan kemudian kita **memastikan untuk** kita **menyalurkan** bansos secara cepat, dan harus dibungkus tas, maka kita lakukan percepatan yang saya ketahui secara teknis itu yang jadi pertimbangan," tutur Hartono.

また、動詞 *memutuskan* にも以下の例が見られる。

(38) Perbedaan prinsip lah yang membulatkan tekad Aldila Jelita untuk berpisah dari Indra Bekti.

"Terus tahun 2023 ternyata kita udah beda, sangat beda prinsip."

"Ya udah kita **memutuskan untuk** kita **berpisah**," tutup Aldila Jelita.

先行研究において述べられていたように、*untuk* に導かれる補文は受け身文の主語になることも、文頭に移動することもできない。補文主語が明示されていても、そのことは変わらない。

(39) ?Untuk kita **menyalurkan** bansos secara cepat, kita **pastikan**.

(40) ?Untuk kita **menyalurkan** bansos secara cepat, kita **memastikannya**.

(41) ?Untuk kita **berpisah**, sudah¹³ kita **putuskan**.

(42) ?Untuk kita **berpisah**, sudah kita **memutuskannya**.

¹³ 助動詞の口語体 *udah* から標準的な表記 *sudah* への変更は筆者による。

(39)、(41)の形になると、**untuk** に導かれる補文が、**untuk** に導かれる副詞節と解釈される可能性も生じる。仮に、副詞節とみなせば、主節主語を欠いていることになる。また、(40)、(42)では、主節動詞の目的語に当たる **-nya** が左方転位された **untuk** に導かれる補文を指すと解釈することはかなり難しい。

また、前章 3.1.に挙げた用例と異なり、補文主語・補文動詞の動作主 **kita** は、主節動詞に対して意味役割を持たず、以下のような受け身文は非文となる。

(43) *Kita kita **pastikan untuk menyalurkan** bansos secara cepat.

(44) *Kita sudah kita **putusan untuk berpisah**.

なぜ、補文主語が省略されずに明示されるのだろうか。そのことに何らかの統語構造上の意味を見出すのは難しい。

3.3. 二つの意味を持つ動詞

以下に、①主節目的語に影響を及ぼし、主節目的語に補文動詞が表す動作を行わせよう、または行わせまいとする主節主語の意図、意思、態度に加え、②主節主語が行おうとする、または行うべき補文動詞の動作に対する主節主語の意図、意思、態度の二つの意味を持つ動詞の用例を挙げる。

まず、動詞 **mendorong** の用例を取り上げる、以下(45)～(47)に、①の意味を表し、主節動詞の被動作主・補文動詞の動作主が、主節目的語、補文主語、省略の形を取って現れるものを順に示す。

(45) Tony juga menjelaskan seputar ketiga prinsip ASEAN-BAC dalam konteks bisnis yang ia pimpin.

Terkait prinsip “sentralitas”, perusahaan **mendorong setiap individu untuk** (Ø=setiap individu) **terus menggali** potensi mereka dan memperkuat kerja sama tim.

(46) Inklusivitas dan toleransi menjadi penekanan Gubernur Jawa Tengah Ganjar Pranowo kepada guru, agar diterapkan di lingkungan sekolah. (中略)

“Saya **mendorong** (Ø=mereka) **untuk mereka menyiapkan** yang ada di sekolahan mereka. Ya karena banyak hal yang kita mesti membangun moderasi toleransi itu, karena seringkali bullying terjadi, kekerasan seksual terjadi,” beber gubernur.

(47) Kunjungan ini diakhiri dengan diskusi dan pemberian masukan dari Inspektur Koharmatau kepada tim Depohar 50 dan Sathar 55. Beliau menyampaikan apresiasi atas dedikasi dan inovasi yang telah dilakukan, serta **mendorong** (Ø=tim Depohar 50 dan Sathar 55) **untuk** (Ø=tim Depohar 50 dan Sathar 55) **terus mengembangkan** teknologi yang dapat mendukung kesiapan operasional satuan.

これに対し、以下(48)では②主節主語が行おうとする、または行うべき補文動詞の動作に対する主節主語の意図、意思、態度を表す。

この用例は先行研究中にも、前掲(1)のように取り上げられていた。必須補語は、主節主語・主節動詞の動作主、補文主語・補文動詞の動作主、補文動詞であり、補文主語は主節主語と同一指示であるため省略されている。

(48) “Kami dari lembaga legislatif akan mendorong dinas, tidak hanya Dinas Kesehatan saja, namun semua komponen seperti Pemkot Semarang sampai masyarakat. Kami **mendorong untuk** (Ø=kami) **bergerak** bersama mengeliminasi TBC. Kepada masyarakat juga diharapkan kejujurannya dan tidak menutupi jika ada anggota keluarga yang terkena penyakit TBC, sehingga pada proses pendataan berjalan lancar, sampai tahap pengobatan,” ucapnya.

(45)～(47)と(48)は異なった統語構造を取り、*untuk* に導かれる補文の意味役割も、補文を構成する要素の文法的振舞いも異なる。

(45)～(47)からは、主節目的語・被動作主を主語として受け身文を作ることができる。

(49) Setiap individu **didorong untuk** (Ø=setiap individu) **terus menggali** potensi mereka dan memperkuat kerja sama tim oleh perusahaan.

(50) Mereka saya **dorong untuk** (Ø=mereka) **menyiapkan** yang ada di sekolah mereka.

(51) Tim Depohar 50 dan Sathar 55 **didorong untuk** (Ø=tim Depohar 50 dan Sathar 55) **terus mengembangkan** teknologi yang dapat mendukung kesiapan operasional satuan.

これに対し、(48)の二番目の文の補文主語・補文動詞の動作主 *kami* は、主節動詞に対して意味役割を持たないため、復元しても以下のような受け身文は非文である。

(52) *Kami kami **dorong untuk bergerak** bersama mengeliminasi TBC.

(53) *Kami sendiri kami **dorong untuk bergerak** bersama mengeliminasi TBC.

次に、動詞 *memutuskan* にも、上記 *mendorong* と同じような二つの意味の用例が見られる。

(54) “Alwi ada tertarik sedikit otot kakinya kemarin, jadi saya **memutuskan dia untuk** (Ø=dia) **istirahat** dulu sambil memulihkan kondisi. Sementara Reza sudah siap dan fit untuk bertanding,” ucap Harry Hartono, pelatih tunggal putra.

(55) “Mungkin semua sudah tahu, saat-saat ini memang (Indonesia) sedang berjangkit virus Corona, kebetulan juga Jakarta sedang PSBB. Jadi panitia (SKB) sebulan yang lalu sudah **memutuskan** (Ø=kita) **untuk kita melakukan** kegiatan ini secara virtual, memang tidak seperti tatap muka, tetapi apapun kita mengupayakan (penerimaan CPNS) setransparan mungkin,” katanya di ruang Pansus B, Gedung Nusantara II, Senayan, Jakarta (28/9/2020).

上記(54)、(55)では、①の意味を持つ主節動詞 *memutuskan* が *untuk* に導かれる補文を取り、主節動詞の被動作主は(54)では主節目的語、(55)では補文主語として現れている。以下が、それぞれの受け身文である。

(56) Dia saya **putuskan untuk** (Ø=dia) **istirahat** dulu sambil memulihkan kondisi.

(57) Kita **diputuskan untuk** (Ø=kita) **melakukan** kegiatan ini secara virtual oleh panitia.

しかし、①の意味を表す *memutuskan* が *untuk* に導かれる補文を取り、主節目的語も補文主語も省略されている用例は見つけられなかった。

次に、②の意味を持つ *memutuskan* が *untuk* に導かれる補文を取る用例を挙げる。

- (58) Secara keseluruhan, persoalan-persoalan yang dihadapi oleh Jakarta sebagai ibu kota negara merupakan masalah yang kompleks dan membutuhkan penanganan serius dan terencana dengan baik. Hal ini menjadi dasar mengapa Presiden Joko Widodo **memutuskan untuk** (Ø=Presiden Joko Widodo) **memindahkan** ibu kota negara ke lokasi lain, dalam hal ini yang sudah ditetapkan ialah di Pulau Kalimantan dan dikenal dengan Ibu Kota Nusantara.

やはり、補文主語・補文動詞の動作主は、主節動詞に対して意味役割を持たず、以下のような受け身文は非文である。

- (59) *Presiden Joko Widodo **diputuskan untuk memindahkan** ibu kota negara ke lokasi lain oleh Presiden Joko Widodo.

また、用例がインターネット上の検索に現れる頻度を見ると、*mendorong* は①の意味で、*memutuskan* は②の意味で用いられるものが多く現れる。特に、*memutuskan* について、その傾向は顕著である。

4. まとめとして

4.1. 本稿における結論

untuk に導かれる補文は、主語を欠く、主語を持たない、のではない。

まず、主節動詞が主節目的語・補文主語に補文動詞の動作を行わせようとする意図、意思、態度を表す場合、主節動詞の被動作主が補文主語としてのみ明示されることもあり、補文主語は主節動詞に対しても意味役割を持ち、受け身文において主節主語に繰り上がることも可能である。

次に、主節動詞が補文動詞の動作に対する意図、意思、態度を表す場合、主節主語と同一指示ながら補文主語が現れる用法が一部において見られる。きわめて例外的で、補文主語を明示する、その統語上の根拠が不明瞭である。

さらに、主節目的語に補文動詞の動作を行わせようとする意図、意思、態度と、主節主語が行おうとする補文動詞の動作に対する意図、意思、態度の二つの意味を表す動詞がある。そのような動詞は、主節目的語に対する補語、または主節目的語として四種類の *untuk* に導かれる補文を取ることが可能である。動詞によって、どちらの意味が優勢かは異なり、四種類全ての補文が談話に現れることは確認できないが、動詞の意味に応じて作られる補文の統語構造上の特徴を把握することは正確な文意の解釈、理解の上で不可欠である。

また、主節動詞の直後に補文が置かれ、補文主語が省略されている用例では、省略の先行詞が主節主語の場合、または主節に現れていない主節目的語と同一指示の語の場合がある。二つの異なる用例を主節動詞の意味により確実に区別し扱うことが、本邦におけるインドネシア語

教育にとって必要となる規範文法のさらなる明確化につながると考える。

4.2. 残された課題

主節目的語に影響を及ぼし、主節目的語に補文動詞が表す動作を行わせよう、または行わせまいとする主節主語の意図、意思、態度を表す主節動詞が、**agar**、**supaya** に導かれる補文を取る形式、主語の一連の動作を表す連鎖動詞の用例との比較が挙げられる。

例文の出典

- (1) Labuan Bajo menuju destinasi Super Premium dan Tuan Rumah KTT G-20 - ANTARA News Kupang
<https://kupang.antaranews.com/berita/28702/labuan-bajo-menuju-destinasi-super-premium-dan-tuan-rumah-ktt-g-20>
- (2) Aksantara ITB Borong Juara di Kontes Robot Terbang Indonesia 2020 - Institut Teknologi Bandung
<https://itb.ac.id/berita/aksantara-itb-borong-juara-di-kontes-robot-terbang-indonesia-2020/57657>
- (17) Sekjen Kemensos Ungkap Kemahalan Bayar Rp 74 M untuk Bansos Corona
<https://news.detik.com/berita/d-5559325/sekjen-kemensos-ungkap-kemahalan-bayar-rp-74-m-untuk-bansos-corona>.
- (18) RRI.co.id - Presiden Jokowi Izinkan Menhan Prabowo Cuti Nyapres
https://www.rri.co.id/pemilu/408841/presiden-jokowi-izinkan-menhan-prabowo-cuti-nyapres?utm_source=popular_home&utm_medium=internal_link&utm_campaign=General%20Campaign
- (20) Saya ke Sini Hanya untuk Jalan-jalan...
<http://www.kompas.com/kompas-cetak/0308/07/ln/473551.htm>
- (21) Alarm Keras di Balik Angka 9,9 Juta Pengangguran Gen Z
<https://news.detik.com/kolom/d-7375234/alarm-keras-di-balik-angka-9-9-juta-pengangguran-gen-z>
- (22) PGN tak Ambil Pusing Disomasi karena Jual Gas Pakai Dolar
<https://batam.tribunnews.com/2015/07/01/pgn-tak-ambil-pusing-disomasi-karena-jual-gas-pakai-dolar>.
- (23) Menpora imbau Kementerian/Lembaga aktifkan Hari Krida - ANTARA News
<https://www.antaranews.com/berita/3390558/menpora-imbau-kementerian-lembaga-aktifkan-hari-krida>
- (32) Laa Tahzan, Rencana Allah Jauh Lebih Indah by Zuli Amanah – FTP – RUMAH ZIS UGM
<https://rumahzis.ugm.ac.id/blog/laa-tahzan-rencana-allah-jauh-lebih-indah-by-zuli-amanah-ftp/6378/>
- (33) Gubernur Maluku Utara siapkan lahan 10 hektare dukung Sekolah Rakyat - ANTARA News
<https://www.antaranews.com/berita/4722709/gubernur-maluku-utara-siapkan-lahan-10-hektare-dukung-sekolah-rakyat>
- (36) Portal Berita Pemerintah Kota Yogyakarta - BSSN dan Pemkot Yogya Ajak Pelajar Jaga Keamanan Ruang Siber
<https://warta.jogjakota.go.id/detail/index/22649>
- (37) Italia Mulai Buka untuk Turis Asing pada Juni 2020

<https://travel.kompas.com/read/2020/05/18/180200627/italia-mulai-buka-untuk-turis-asing-pada-juni-2020>.

(38) Tegaskan Gugat Cerai Indra Bekti, Aldila Jelita Sebut Tak Ada Niatan Rujuk,

<https://aceh.tribunnews.com/2023/03/07/tegaskan-gugat-cerai-indra-bekti-aldila-jelita-sebut-tak-ada-niatan-rujuk?page=2>.

(45) Pimpinan PT GNI Jadi Panelis pada Forum ASEAN-BAC Indonesia's Summit Week 2023

https://www.kompas.id/baca/adv_post/pimpinan-pt-gni-jadi-panelis-pada-forum-asean-bac-indonesias-summit-week-2023

(46) Cegah Kasus Kekerasan Seksual di Sekolah, Ini Pesan Ganjar pada Kepsek – Pemerintah Provinsi Jawa Tengah

<https://jatengprov.go.id/publik/cegah-kasus-kekerasan-seksual-di-sekolah-ini-pesan-ganjar-pada-kepsek/>

(47) Inspektur Koharmatau Kunjungi Satuan Pemeliharaan 55 untuk Tinjau Inovasi Baru

<https://tni-au.mil.id/berita/detail/inspektur-koharmatau-kunjungi-satuan-pemeliharaan-55-untuk-tinjau-inovasi-baru>

(48) 20 Desember Upaya Wujudkan Kota Semarang Bebas TBC 2028, Yayasan SSR MSI Lakukan Kolaborasi dengan Banyak Pihak - Mentari Sehat Indonesia

<https://www.mentarisehatindonesia.org/20-desember-upaya-wujudkan-kota-semarang-bebas-tbc-2028-yayasan-ssr-msi-lakukan-kolaborasi-dengan-banyak-pihak/>

(54) Kejuaraan Dunia Junior 2022: Hadapi Chinese Taipei, Indonesia Buat Tiga Perubahan – PBSI

<https://pbsi.id/2022/10/22/kejuaraan-dunia-junior-2022-hadapi-chinese-taipei-indonesia-buat-tiga-perubahan/>

(55) Akibat Pandemi Covid-19, Setjen DPR Gelar SKB CPNS Secara Virtual

<https://merdekabicara.com/baca/21366/akibat-pandemi-covid-19-setjen-dpr-gelar-skb-cpns-secara-virtual>

(58) Bagaimana Pembangunan IKN Dapat Mendorong Pemerataan?

<https://news.detik.com/kolom/d-7099558/bagaimana-pembangunan-ikn-dapat-mendorong-pemerataan>

参考文献

松野明久. 1984a. 「インドネシア語の前置詞 UNTUK の “untuk+動詞” における願望標示機能について」『大阪外国語大学学報六十四号』大阪外国語大学.

-----, 1984b. 「続・インドネシア語の前置詞 UNTUK の “untuk+動詞” における願望標示機能について」『大阪外国語大学学報六十六号』大阪外国語大学.

森山幹弘、原真由子、降幡正志. 2017. 『インドネシア語基本文法（試行版）』

http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/furihata/ind_kyozaibank/

安田和彦. 2007. 「untuk に導かれる副詞節における主語の代名詞化について」『インドネシア言語と文化 第13号』日本インドネシア学会.

-----, 2008. 「untuk に導かれる形容詞節における主語の代名詞化について」『インドネシア言語と文化 第14号』日本インドネシア学会.

- , 2014. 「インドネシア語の補文の含意について」『インドネシア 言語と文化 第 20 号』日本インドネシア学会.
- Alwi, Hasan, Anton M. Moeliono, Hans Lapoliwa, and Soenjono Dardjowidjojo. 2003. *Tata bahasa baku bahasa Indonesia. Edisi ketiga*. Jakarta : Balai Pustaka.
- Dardjowidjojo, Soenjono. 1978. *Sentence Patterns of Indonesian*. Honolulu : University of Hawaii Press.
- Lapoliwa, Hans. 1990. *Klasifikasi Pemerlengkapan dalam Bahasa Indonesia: Suatu Tinjauan Sintaktik dan Semantik*. Yogyakarta : Penerbit Kanisius.
- Moeliono, Anton M. , Hans Lapoliwa, Hasan Alwi, Sry Satriya Tjatur Wisnu Sasangka, and Sugiyono. 2017. *Tata bahasa baku bahasa Indonesia. Edisi keempat*. Jakarta : Badan Pengembangan dan Pembinaan Bahasa, Kementrian Pendidikan dan Kebudayaan,
- Sneddon, James N, Alexander Adelaar, Dwi N Djenar, and Michael C. Ewing. 2010. *Indonesian : A Comprehensive Grammar-2nd Edition*. London and New York : Routledge.
- Sudaryanto. 1983. *Predikat-objek dalam bahasa Indonesia*. Jakarta : Penerbit Djambatan.

日本インドネシア学会会則

- 第1条 本学会は「日本インドネシア学会」（インドネシア語名称 Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang、英語名称 Japan Association for Indonesian Studies）と称する。
- 第2条 本学会はインドネシアを中心とした言語、文化、文学等に関する研究の発展および会員相互の協力を促進することを目的とする。
- 第3条 本学会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- ① 機関誌の発行
 - ② 研究発表のための大会の準備
 - ③ 会員総会の開催
 - ④ 会員への連絡および協力促進
 - ⑤ その他必要な事業
- 第4条 本学会の会員は第2条の目的に賛同し、所定の会費を納めたものとする。
2. 入会の際には、5年以上会員であった者1名の推薦により、会員総会における承認を求める。
 3. 特別な理由なく3年以上にわたり、所定の会費を納めないものに関しては、本人の意思を確認の上、総会において除籍する。
- 第5条 本学会の発展に寄与し、会員総会において承認されたものを名誉会員とする。
2. 名誉会員からは会費の徴収をせず、機関誌を贈呈する。
- 第6条 本学会の会員は、大会（総会および研究発表）への参加、機関誌への投稿、機関誌の被配布の権利を有する。また、会費納入の義務を負う。
- 第7条 本学会に次の役員と委員を置く。
- ⑥ 会長1名
 - ⑦ 監査委員1名
 - ⑧ 事務局委員（総務担当1名、学会誌担当1名、会計担当1名）
2. 会長の任期は3年とし、重任をさまたげない。
 3. 監査委員および事務局委員は、会長がこれを委嘱し、会員総会において承認を経なければならない。
 4. 監査委員および事務局委員の任期は3年とする。
 5. 当番校は事務局と協議の上、研究発表のための大会および会員総会を開催する。
 6. 会長は、「日本インドネシア学会会長選挙規程」の定めるところにより、会員総会において選出する。
- 第8条 本学会の事務は事務局が執り行う。

2. 本学会の事務局を東京外国語大学（郵便番号 183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1）内におく。

第 9 条 本学会会則の改正は会員総会において行う。

第 10 条 本学会の会議は会員総会とし、毎年少なくとも一回会長が招集する。

2. 会員総会は、全会員の 3 分の 1 以上の出席をもって成立し、議事は出席会員の過半数をもって決する。
3. 総会の議事は、事務局の総務担当が執り行う。

第 11 条 本学会の経費は、会費、寄付金及びその他の収入をもってあてる。

2. 本学会の会計年度は、10 月に始まり翌年 9 月に終わる。
3. 決算報告書は、会員総会に提出し、その承認を経なければならない。

附則 この会則は 1998 年 12 月 14 日より発効する。

2007 年 11 月 10 日 一部（7 条 1, 2, 3, 4, 5 項、8 条 1, 2 項、9 条 1 項、10 条 1, 2, 3 項、11 条 1, 2, 3 項）改正、即日施行。

2008 年 11 月 8 日 一部（4 条 2 項、10 条 2 項）改正、即日施行。

2016 年 11 月 19 日 一部（第 1 条）改正、即日施行。

会費等に関する細則

この細則は、会則第 4 条の規定のうち、会費の施行について定める。

2. 会員の会費は、年額 3000 円とする。

付則 この細則は 1998 年 12 月 14 日より発効する。

2008 年 11 月 8 日一部（2 項）改正、3 項削除、即日施行。

以上

編集後記

『インドネシア 言語と文化 Bahasa dan Budaya : Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang』第 31 号をお届けします。

本誌は、2024 年 11 月 23 日（土）・24 日（日）の両日に立命館アジア太平洋大学（別府市）にて開催された日本インドネシア学会第 55 回研究大会における発表報告を基に、改めて投稿された論稿を掲載したものです。

第 55 回研究大会のプログラムは以下の通りです。

第一日目：11 月 23 日（土）

11:15- 受付開始

12:00-12:05 開会の辞

舟田京子（日本インドネシア学会会長）

12:05-12:10 来賓挨拶

アムズル・リフィン（駐日インドネシア共和国大使館教育文化部長）

12:10-12:35 自由発表 1

ダヴィド・ムルヤディ（神田外語大学）

エラータグ付きインドネシア語学習者コーパスにおける高頻度語

12:35-13:00 自由発表 2

シンティア・ヴィエンティアニ（大阪大学）

大阪大学インドネシア語専攻のナラティブ作文教育における直接話法

13:00-13:25 自由発表 3

安田和彦（京都産業大学）

補文標識 *untuk* に導かれる補文について

13:25-13:50 自由発表 4

原真由子（大阪大学）、降幡正志（東京外国語大学）、森山幹弘（南山大学）

コーパス分析に基づく *ke-an* 非名詞派生語の用法に関する考察

13:50-14:00 休憩

14:00-14:25 自由発表 5

西島薫（小松公立大学）

民主化期インドネシア地方社会における劇場国家の「再現」：西カリマンタン州の
ダヤック人王国を事例とした考察

14:25-14:50 自由発表 6

高地薫（神田外語大学）

“新”一次資料から見る新体制下の共産党関係者への抑圧

14:50-15:15 自由発表 7

アリフィア・マシタ・デウィ（ダルマプルサダ大学）

日本占領下のインドネシアにおけるプロパガンダ活動家としてのインドネシア
女性作家の役割

15:15-15:40 自由発表 8

チャハヤニンルム・デウオジャティ (ガジャマダ大学)

タン・テン・キエの『SYA' IR DJALANAN KERETA API』(1890)に描かれた道に沿った苦難の軌跡—ポストコロニアリズムの研究—

15:40-16:05 自由発表 9

澤井志保 (京都産業大学)

香港で働いたインドネシア人家事労働者帰還民の起業

16:05-16:15 休憩

16:15-17:15 総会

19:00-20:30 懇親会 (四季彩 銀の塔)

第二日目 : 11 月 24 日 (日)

09:00-09:25 自由発表 10

エルヴィタ・ウィアシー (立命館アジア太平洋大学)

教室を超えた国際オンライン協働学習 : APU マレー語・インドネシア語にて VE/COIL プロジェクトの実施について

09:25-09:50 自由発表 11

ノルリザ・ジャマルディン (スルタン・イドリス教育大学)

日本におけるマレー語 : 作品、作家、機関

09:50-10:15 自由発表 12

大形里美 (九州国際大学)

グローバル時代のハラール認証制度と諸問題 ; インドネシアと日本のハラール認証制度の関係性から

10:15-10:40 自由発表 13

ミヤ・ドゥイ・ロスティカ (大東文化大学)

インドネシアにおけるカルティニ像の変遷と彼女の歴史的役割

10:40-10:50 休憩

10:50-11:15 自由発表 14

エディ・プリヨノ (京都産業大学)

新型コロナウイルスを振り返るインドネシアの風刺漫画

11:15-11:40 自由発表 15

フィリア (インドネシア大学)

ブリトゥン島の海岸の地名: 海岸名の由来と意味

11:40-12:05 自由発表 16

三宅良美 (秋田大学)

中部ジャワの言語風景とグローバリゼーション

12:05-12:30 自由発表 17

サムスディン・スハイリ (スルタン・イドリス教育大学)

マレーの詩 (パントウン) による文化交流

12:30-12:55 自由発表 18

山口真佐夫

原オーストロネシア語のシュワーとスラウェシの諸語群における反映

12:55 閉会

インドネシア 言語と文化

Bahasa dan Budaya: Jurnal Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang

第 31 号

編集者： 安田 和彦（京都産業大学外国語学部）

発行者： 日本インドネシア学会 Himpunan Peneliti Indonesia Seluruh Jepang

<http://nihon-indonesia-gakkai.org/>

連絡先： humas@indonesia-gakkai.sakura.ne.jp

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学 大学院総合国際学研究院 インドネシア研究室気付 青山亭

Prof. Toru Aoyama

c/o Indonesian Studies Program, Graduate School of Global Studies,

Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan

発行日： 2025 年 9 月 30 日

ISSN： 1882-9848
